

せかへい 外伝ストーリー

ピラフドリア

世界最強の兵器はここに!? 外伝ストーリー

☒ あらすじ ☒

世界最強の兵器はここに!? の本編とは別で展開されるエピソードが投稿されます。

外伝や季節イベント、などなど多くの作品を投稿していきます。

まさかのあの人物の活躍なども!?

時系列はバラバラです。本編ではまだ登場していない人物や設定が出てくることもあります。

ここでしか見られない特別ストーリーをお楽しみください。

☒ ピラフドリア ☒

初心者の手書きです。誤字など多いと思います。

イラストや動画制作もしているので、そちらもよろしければご覧ください。

☒詳細☒

以下のサイトでも投稿しています。

- ・小説家になろう
- ・エブリスタ
- ・カクヨム
- ・ハーメルン
- ・pixiv
- ・ノベルアップ+
- ・アルファポリス
- ・MAGNET MACROLINK
- ・ツギクル
- ・note
- ・YouTube

目次

第1話	【ハロウィンパーティ】	1
第1話	【秋のピクニック】	9
第2話	【秋のピクニック 其の2】	17
第1話	【温泉に行こう】	25
第2話	【温泉に行こう 其の2】	33
第3話	【温泉に行こう 其の3】	41
第1話	【読書をしよう】	49
第1話	【天使】	57
第1話	【反転世界】	63
第2話	【反転世界 其の2】	71
第3話	【反転世界 其の3】	79

第4話	【反転世界 其の4】
第1話	【ハロウィン討伐】
第2話	【ハロウィン討伐 其の2】
第1話	【衣替え】
第1話	【裏か表か】
第1話	【カボチャの討伐へ】
第2話	【カボチャの討伐へ 其の2】
第3話	【カボチャの討伐へ 其の3】
第1話	【メタルハート 1話(ギルド)】
第2話	【メタルハート 2話 森】
第3話	【メタルハート 3話 圧倒】
第4話	【メタルハート 4話 仕事】
第5話	【メタルハート 5話 正体】

第 18 話	第 17 話	第 16 話	第 15 話	第 14 話	第 13 話	第 12 話	第 11 話	第 10 話	第 9 話	第 8 話	第 7 話	第 6 話
【メタル ハート	【メタル ハート	【メタル ハート	【メタル ハート	【メタル ハート	【メタル ハート	【メタル ハート	【メタル ハート	【メタル ハート	【メタル ハート	【メタル ハート	【メタル ハート	【メタル ハート
18 話	17 話	16 話	15 話	14 話	13 話	12 話	11 話	10 話	9 話	8 話	7 話	6 話
世界へ】	狂気】	目の力】	騎士】	家族】	瞳】	過去】	記憶】	老人】	戦闘】	奇襲】	潜入】	心鋼】

第19話	【メタルハート 19話 居合い】
第20話	【メタルハート 20話 真似】
第21話	【メタルハート 21話 協力】
第22話	【メタルハート 22話 情報】
第23話	【メタルハート 23話 ドラゴン】
第1話	【ダズのダイエット 其の1】
第1話	【慎重者の進捗日記 其の1】
第1話	【村の三人の少年 其の1】
第2話	【村の三人の少年 其の2】
第3話	【村の三人の少年 其の3】
第4話	【村の三人の少年 其の4】
第1話	【村の井戸に住むもの 其の1】
第1話	【雪の降る村 其の1】

第1話	【ベアウルフ討伐イベント 其の1】	367
第2話	【ベアウルフ討伐イベント 其の2】	373
第3話	【ベアウルフ討伐イベント 其の3】	379
第4話	【ベアウルフ討伐イベント 其の4】	385
第5話	【ベアウルフ討伐イベント 其の5】	393
第1話	【平和な日常 其の1】	401
第2話	【平和な日常 其の2】	409
第3話	【平和な日常 其の3】	417
第1話	【冒険者の日々 其の1】	425
第1話	【魔道具ショッピング 其の1】	431
第1話	【暖かい家 其の1】	437
第1話	【王国の外れ 其の1】	445
第1話	【雪山の温泉 其の1】	451

第2話	【雪山の温泉 其の2】	
第3話	【雪山の温泉 其の3】	
第4話	【雪山の温泉 其の4】	
第5話	【雪山の温泉 其の5】	
第6話	【雪山の温泉 其の6】	
第7話	【雪山の温泉 其の7】	
第8話	【雪山の温泉 其の8】	
第1話	【貴族の妹達に幸せを！（クリスマス） 其の1】	
第2話	【貴族の妹達に幸せを！（クリスマス） 其の2】	
第3話	【貴族の妹達に幸せを！（クリスマス） 其の3】	
第4話	【貴族の妹達に幸せを！（クリスマス） 其の4】	
第5話	【貴族の妹達に幸せを！（クリスマス） 其の5】	
第6話	【貴族の妹達に幸せを！（クリスマス） 其の6】	

第7話	【貴族の妹達に幸せを！（クリスマス） 其の7】
第9話	【雪山の温泉 其の9】
第10話	【雪山の温泉 其の10】
第1話	【襲撃ユキザル 其の1】
第2話	【襲撃ユキザル 其の2】
第1話	【王国 其の1】
第1話	【はじまり 其の1】
第2話	【はじまり 其の2】
第3話	【はじまり 其の3】
第4話	【はじまり 其の4】
第5話	【はじまり 其の5】
第6話	【はじまり 其の6】
第7話	【はじまり 其の7】

第 8 話	【はじまり 其の 8】
第 9 話	【はじまり 其の 9】
第 10 話	【はじまり 其の 10】
第 1 話	【ガール奮闘記 其の 1】
第 1 話	【盗賊のプハッー!! 其の 1】
第 2 話	【盗賊のプハッー!! 其の 2】
第 3 話	【盗賊のプハッー!! 其の 3】
第 4 話	【盗賊のプハッー!! 其の 4】
第 5 話	【盗賊のプハッー!! 其の 5】
第 1 話	【エスの病 其の 1】
第 1 話	【ユキザル討伐クエスト 其の 1】
第 2 話	【ユキザル討伐クエスト 其の 2】
第 3 話	【ユキザル討伐クエスト 其の 3】

第4話 【ユキザル討伐クエスト 其の4】

第1話 【氷の女王 其の1】

第2話 【氷の女王 其の2】

第3話 【氷の女王 其の3】

第1話 【進め!! 洞窟探検隊 其の1】

第2話 【進め!! 洞窟探検隊 其の2】

第3話 【進め!! 洞窟探検隊 其の3】

第4話 【進め!! 洞窟探検隊 其の4】

第5話 【進め!! 洞窟探検隊 其の5】

第6話 【進め!! 洞窟探検隊 其の6】

第1話 【ヤマブキクッキング 其の1】

第1話 『寝れない天才を寝かしつけろ』

第1話 【大脱出 其の1】

第1話 【ハロウィンパーティ】

せかへい 2021ハロウィン

著者..pirafudoria

作画..pirafudoria

第1話

【ハロウィンパーティ】

村ではハロウィンに向けて準備が行われていた。

「パトー!! これはこの辺に飾れば良いか？」

「ああ、そこで頼む！」

村一番の慎重者ルンバは、パトに確認しながらカボチャの置物を村の広場に設置する。

一年に一度あるハロウィンに向けて、村では大忙しで作業を進めていた。

村の広場には顔のくり抜かれたカボチャの飾り物が並べられて、村人たちは夜行われるパーティーに向けて架装を始めていた。

パト達が準備を終えた時、エリスがやってきた。エリスの手には紙袋があり、仮装に使う服を買ってきたようだ。

「パト！ 終わった？」

「おう、どうしたんだ？」

するとエリスは紙袋をパトの方へ向ける。

「どうせ、準備が忙しくて仮装の準備できてないんでしょ？ 私が買ってきたよ！」

そしてパトに紙袋を渡した。

「ありがとう！ エリス!!」

パトが礼を言うと、エリスは「当たり前よ」っと言って腕を組んだ。

やがて日が暮れ、パーティが始める。

今夜は雲がなく月が綺麗に見える。そんな中、ハロウィンパーティが始まった。

村人達は各々仮装をして村の中心に集まった。村の広場では屋台が開かれ、お祭りムードだ。

「お、おい、俺は狼男か……」

エリスがパトに用意したのは、狼男の仮装である。

「そうよ！ なかなか似合ってるじゃない。ペットにしたいくらいよ！」

「何言ってるんだよ」

パトの仮装のおまけに首輪をつけようとしたエリスをパトは引き剥がす。

「てか、お前はなんだ？ 制服じゃないがいつもの服装と違うな」

エリスの服は王立魔法学園の制服ではないが、とんがり帽子を被っている。

「これは魔女の服よ！」

「それは仮装に入るのか!？」

「さあ、ハロウィンは気持ちよ！ 気持ち！ 気持ちが大事なのよ!!」

ハロウィンは収穫祭から始まったという言い伝えもある。だから仮装をそこまでこだわる必要はないのか？

「さ、今日は楽しむよ！」

エリスはバトを連れて、村の広場へと向かった。村の中心では村人達が待ってい

る。

「お、来たな！ パト、それとエリス!!」

すでに屋台で食べ物を売っていたパトの父親であるガオは、やってきた二人に声をかけて、売り物であった食べ物を渡した。

「え、お金は良いんですか？」

エリスがそう聞くと、ガオは首を振る。

「良いんだよ。サービスだ。楽しんできな!!」

ガオはそう言って二人を見送った。こうしてサージュ村のハロウィンパーティーは

進んでいくのであった。

終わり

第1話

【秋のピクニック】

せかへい 外伝 1

著者… p i r a f u d o r i a
作画… p i r a f u d o r i a

第1話

【秋のピクニック】

サージュ村にある小さな丘。そこに一人の少年が向かう。

「おう、待たせたな！」

彼の名はサージュ村の村長の息子パト・エイダーだ。

茶髪で頭にはゴーグルをつけている。

「遅いぞ、パト」

そう言ってパトに腹を優しく殴る。攻撃的な感じではなく、スキンシップのような感覚だ。

「いや、俺遅刻するかもって言っただろ」

「そうだったか？」

パトの言葉に聞き覚えがない。彼はエス。村の門番だ。

「なあ、ルンバは覚えてるか？」

「ん、覚えてるぞ。確か昨日の16時くらいにそんな話をした」

「そんな細かく!?!」

ルンバはエスと同じく村の門番だ。今日は休日が重なったということで集まろうということになった。

パト達三人は年齢も近いこともあり、村では小さな頃からよく集まって遊んでいた。悪戯もしたこともあったが、それぞれが仕事をするようになり集まる機会も減っていった。

「じゃあ、行くか」

パトがそう言うと、三人は出発した。

村を出て少し先に紅葉樹の森がある。秋にはそこは燃え盛るように赤く染まる。

三人はそこへ向かうことになった。

「ここに来るもの何年ぶりか……」

エスは紅葉の景色を見ながら、懐かしむ。

「8年じゃないか？ パトとはなかなか休みが合わないしな」

ルンバはそう言うと、歩きを指さした。

「あの木を覚えてるか？」

「ん、あ、あれは」

そこには小さな傷の付いた木があった。

8年前、三人が同じように紅葉を見に行った時のことである。

三人は談笑しながら歩いていると、目の前に一匹のモンスターが現れた。

それはウサギのような見た目だが、頭にはツノがあり、尻尾がギザギザしている
モンスター。

決して強いモンスターではない。

しかし、パト達三人はアマルの授業を抜け出して、ひっそりと遊びに来ていたのだ。

外にはモンスターがいる。村からはさほど離れた場所ではない。こんな場所で現れるのは稀だ。

「ど、どうする！」

エスはビビりながら何か対策がないか考える。

そんな中、パトは二人を守るように前に出た。

「エス、ルンバ、お前達は逃げろ」

授業を抜け出して気楽に來ただけだ。武器などは何ももっていない。

うさぎのモンスターは一匹だが、武器なしの子供では倒すことはできない。

エスとルンバは恐怖から動くことができなくなってしまう。

ここはなんとかするしかない。

パトは一人モンスターに立ち向かう体制になる。

続く

第2話 【秋のピクニック 其の2】

せかへい 外伝 1

著者…pirafudoria
作画…pirafudoria

第2話

【秋のピクニック 其の2】

パトはモンスターと対峙する。しかし、武器を持っているわけではない。

だが、パトは自分から前に出て、モンスターの目を惹きつけた。それは後ろにいるエスとルンバに攻撃させないためだ。

モンスターは一匹。うさぎのような見た目をしている。頭にあるツノで突進してくると聞いたことがある。

パトはモンスターを惹きつけると走り出した。

モンスターはパトを標的にすると、パト目掛けて頭突きを仕掛けてきた。

しかし、パトはギリギリのところでモンスターの攻撃を躲す。パトは転けてその場で倒れてしまう。

モンスターはツノが近くにあった木に刺さるが、すぐに抜け出して再びパトを標的にした。

「パトー!!」

エスとルンバが叫ぶ。それと同時にモンスターがパト目掛けて頭突きを仕掛ける。

ここまでか、そう思った時、

モンスターに炎の弾が直撃した。

「ふう、危なかった」

そこに現れたのはアマルの父親であり、村の警備をしているマテイルであった。マテイルは授業中に姿を消した三人を探しにきていたのだ。

こうしてモンスターによる被害は起こらず、無事に帰ることができた。

「そんなこともあったな」

パト達は懐かしむ。

木には昔モンスターが突っ込んだ跡が残っていた。しかし、昔よりも其の傷の位置が低く感じる。これはパト達が成長したからだろうか。

「お、着いたな」

紅葉樹の森の先には小さな湖がある。赤や黄色の木に囲まれ、青いはずの湖は紅く揺れる。

パト達は湖に映る自分たちの姿を見ながら、昔の姿を思い出しながら今の姿を比べる。

成長した姿は昔に比べてどうなっているのか。良くなったことも悪くなったこともあるだろう。しかし、それを全て合わせて自分という存在になるのだ。

「んじゃ、そろそろ帰るか」

パトがそう良い二人を連れて帰る。

「ああ、そうだな。俺このあと夜勤だし」

エスはこの後の予定を言う。

ほんのちょっとした休憩時間。しかし、それが彼らに休息を与えてくれた。そして過去に一瞬でも戻してくれた。

「そういえば、パトはこの後何をするんだ」

ルンバはパトに聞く。

「ん、ああ、エリスにちょっと呼ばれててな。手伝って欲しいことがあるんだと」
エスは頭の後ろで腕を組む。

「またあいつ帰ってきてるのか」

「ああ」

「本当に王国の学校の学生か？」

「でも、エリスの凄さは知ってるだろ」

「ま、そうなんだけどよお」

彼らは村に着いた。

終わり

第1話 【温泉に行こう】

せかへい 外伝2

著者… p i r a f u d o r i a
作画… p i r a f u d o r i a

第1話

【温泉に行こう】

今日は村にある人物がやってきていた。

「ねえ、パト、まだ？」

彼女の名前はエリス・グランツ。王立魔法学園に通う魔法使いであり、パトの幼

馴染だ。

「あー、もう準備できるよ」

今日は研究の手伝いをエリスに頼まれ、俺は隣の村に行くことになった。

「早く」

「だからもう終わるって!!」

急かしてくるエリスにパトはもうすぐ終わると伝える。

隣の村まで行き、研究をしてから帰る。1日で終わるはずがなく、数日滞在する予定になっている。

パトは行く前にできるだけの仕事を終わらせておいて、残りは父親に任せようという形にした。

そのためさっきまでずっと机で書類仕事を続けていた。

やっと仕事も終わり、支度の準備を終わらせると、エリスと合流。隣の村へ向かうことになった。

「てか、なんで俺が着いていかなきゃなんないんだよ」

「あんたが着いてこなかったら、誰が私の世話をするのよ」

「どっかのお嬢様か!! てか、それで王国にいる間はどうかやって生活してるんだよ」

「嫌だからちよくちよく帰ってくるんじゃない」

「おい」

隣の村までは歩いて半日ほどかかる。

今回は荷物も少ないし、経費なども問題もあり、徒歩で行くことになった。

パト達は朝早くに村を出発する。問題がなければ、昼には隣の村のコット村に着くはずだ。

村から村までの道のりは森を超えていくことになる。

パト達は村を出て早速その村に入った。村は生い茂り、空を見上げてても青空はなく緑のカーテンが空を覆う。

「なんか、モンスター出てきそうだなあ」

パトがボソリとそんなことを言うと、

「そう言うことを言っていると……」

パト達の前に突如、草むらから何かが飛び出してくる。それは鋭い角を持ち、大きな花を持ったイノシシのようなモンスター。

しかし、イノシシとの大きな違いは色が紫色という点だ。

「こうやってモンスターが現れるのよ」

そう言い、エリスはモンスターに向かって杖を向ける。

いつもめんどくさがり屋のエリスが、自分から戦闘をしようとするのは珍しい。何か邪魔をされたみたいな感じで、軽くモンスターに怒っているようにも感じる。

しかし、モンスターは一体とはいえ、かなり興奮している。今にも突っ込んできそうな状況だ。

「エリス、どうする？」

パトが聞くとエリスは杖を持って堂々と前に出た。

「あなたは下がってなさい。ここは私がやる。私がサクッと終わらせてあげる」

エリスとモンスターの戦闘が始まった。

第2話 【温泉に行こう 其の2】

せかへい 外伝2

著者… p i r a f u d o r i a
作画… p i r a f u d o r i a

第2話

【温泉に行こう 其の2】

エリスはモンスターを楽々と倒し、パト達は隣の村のコット村に着いた。

「お、パトじゃないか」

村に着くと、青髪に紫色のバンダナを巻いた女性と出会う。

「シルバさん！」

彼女の名前はシルバ・マーキュリー。コット村の村長であり、パトに科学文明（アルシミー）について教えてくれた先生のような存在だ。

「どうしてこの村に？」

シルバは首を傾げながら、パトに聞く。

パトは親指でエリスを指す。

「エリスの研究に付き合って、この村に来たんだ」

エリスは帽子を脱ぐと深々と頭を下げた。

「シルバさん、お久しぶりです」

「エリスちゃん、久しぶりね！」

シルバとエリスは昔に面識がある。

まだエリスが王立魔法学園に入学する前に、パト達について来てこの村にやって来たことがあるのだ。

事情を説明したパト達はシルバに宿を紹介してもらい、2部屋を予約する。これでコット村で寝泊まりをすることができるようになった。

「じゃあ、私はパト、手伝ってね！」

こうしてエリスの研究に付き合うことになった。

まあ、しかし、パトには何をやっているのかわからず。村をグルッと周り、見かけた村人に声をかけて色々質問して回っているだけだ。

やがて日が暮れて、パト達は宿に戻る。

「はぁ、疲れた」

エリスは二つの部屋を借りたのだが、パトの部屋のベッドまでやってきて倒れた。

「おい、自分の部屋で寝ろよ。俺だって疲れてるんだから」

「まだやることがあるの。寝そうになっても起こしてもらわないと」

「俺はお前の執事か」

そんなやりとりをしていると、部屋の扉がノックされる。

「どうぞ」

エリスは人が来たのを察知すると素早く姿勢を正す。

「いや、お前が言うなよ！」

部屋の扉が開かれると、そこから現れたのはシルバだ。

「お、二人とも丁度いるね」

すると、シルバは最近村に新しくできたと言う温泉を紹介してくれた。

「今日一日歩き回って疲れたでしょ。なら、丁度いいんじゃない」

サージュ村には銭湯はあるが温泉はない。コット村では地下を掘っている最中に偶然掘り当てて、そこを開発したらしい。

「分かりました。ありがとうございます」

パトが礼を言うと、シルバはニコニコして帰って行った。

シルバはパトが父親のガオの次に尊敬する人物だ。

彼女だって仕事で疲れているはずなのに、それだけを伝えるためにやって来てくれた。

「よし、エリス。せっかくだから行くか」

パトが立ち上がり、行こうとエリスに言うとエリスは、

「まだ」

すでに準備を終えていた。

「はや!!」

第3話 【温泉に行こう 其の3】

せかへい 外伝2

著者…pirafudoria
作画…pirafudoria

第3話

【温泉に行こう 其の3】

コット村の外れにある木造の建物。ここがコット村に新しくできた温泉だ。

「じゃあ、またな！」

パトとエリスはそれぞれ男と女の暖簾を潜り、中に入る。

脱衣所で服を脱ぎ温泉に行くと、そこは見上げると夜空の広がる温泉。

壁は木造で囲まれているが、天井が空いていることで開放感がある。床はゴツゴツした岩が敷き詰められていて、少し痛い気もするがまたそれが気持ちいいような感じもする。

パトは温泉に肩まで浸かり、ゆっくりと身体を休める。そうしていると木造の壁の反対側からエリスの声が聞こえる。

「パト、いる？」

「ん、いるぞー！」

「石鹸いる？」

温泉には石鹸が設置されている。必要ないと感じたパトは、

「大丈夫だ」

というが、エリスは続ける。

「王都で買った。ちょっと良い石鹸なの。あなたの匂いも少しマシになるかもよ」

「俺が臭いつてか!!」

「そりゃー、あなたのお父さんの次に臭いよ!」

それは結構傷つく。

「わーたよ。じゃあ、ちょっと貸してくれ！」

「はいはい」

壁の向こうから石鹸が飛んでくる。俺は頭上でキャッチしようとするが、うまくキャッチできず石鹸が手から滑ってしまい頭にぶつかる。

「痛っ！」

そのあと、石鹸を使い身体を綺麗に洗う。

言っていた通り、良い匂いにする石鹸だ。

身体を洗い、スッキリとする。ゆっくり温泉で休むことができた。

「いやー、気持ちよかった」

温泉を上がったあと、パト達は牛乳を飲む。

「美味しいなあ」

二人の口には牛乳がつく。

こうして二人の休憩は終わった。そして次の日もこの日同様に、村をずっと歩き回った。

そして夜はエリスはずっと書いたことをまとめて、三日後には研究を終えてエリス達はサージュ村に帰ることにした。

「ではシルバさん、また！」

「ああ、また来いよ！」

エリス達は無事にサージュ村に帰ることができて、パトはすぐにガオと仕事を交代し、残っていた仕事を始める。

エリスはコット村に行った時にまとめた資料をさらにまとめて、論文を書く。

そして無事にパト達のちょっとした研究の旅は終わった。

|||||||

後書き

今回は三話までの長い話になりました。短編集してこちらの作品は書いていき

いので、なるべく長くない話にはしたいのですが、気づいたらこのような形になってました。

次回からこのように話数が長い短編もあるだろうし、一話完結もあるかもしれません、これからよろしくお願いします。

第1話

【読書をしよう】

せかへい 外伝3

著者… p i r a f u d o r i a
作画… p i r a f u d o r i a

第1話

【読書をしよう】

サージュ村。ここは平和な村だ。

「パト、おはよう」

村人の一人が茶髪の少年に声をかける。

彼の名はパト・エイダー。サージュ村の村長の息子で、将来は村の村長になることを夢にしている。

「おう！ エス!!」

そしてパトに話しかけてきたのは、サージュ村で門番として働くエスだ。

エスは槍を持っていて、門番の仕事を交代し、仕事を終えた後のようだ。

「あ、そうだ。パト」

エスはパトを見て何かを思い出す。

「そういえば、本が欲しいって言ってたよな」

「ああ！」

パトは頷く。すると、エスは、

「父が王都に行った時、新しい本を買ってきたんだ。で、また買った本が使いきれなくて余ってたりするんだ。よければいるか？」

「本当か!？」

パトは嬉しそうに答える。

エスの父は作家であり、王国では有名な作家だ。多くの作品を売り、作品を書くために王国から本を大量に買い込んでいる。

「是非くれ！」

パトはエスから余り物の本をもらうことにした。

パトがエスの家に行くと、エスの母が出迎えてくれる。

「パト君、いらっしゃい」

「あ、どうもです！ お邪魔します！」

「ゆっくりしていいね」

エスは家にある図書室にパトを案内する。エスの家はサージュ村で一番多くの本が置かれている。

その中からエスは数冊の方を取り出す。

「一応要らないって言ったのはこの辺なんだが……欲しいのはあるか？」

「うーん、そうだなあ」

エスの出した本は雑多であり、王国の歴史や、魔法についての本、文明文化についての本など多くのものがある。

「じゃあ、これもらって良いかな？」

パトが手に取ったのは科学文明（アルシミー）についての本。

「ああ、良いぞ!!」

エスはパトに科学文明（アルシミー）についての本を渡した。

パトはウキウキで本を受け取る。

「ありがとう!!」

パトは元気よく礼を言った。

その後、パトはエスの家で談笑をした後、遊んでしばらくして家に帰った。

パトはエスに貰った本を自分の家の本棚にしまう。パトの部屋の本棚にはいくつもの本が並んでいる。

本棚には科学文明（アルシミー）に関する本が大量に保管されていた。

パトは新しく増えた本を見ながら、満足そうに本棚を見つめる。

「これが将来的に役に立つと良いなあ」

パトはそう言いながら、部屋にある机で書類仕事を始めた。

|||||

今回は1話完結でしたー!!

村人達の職業や人間関係をどんどん公開できると嬉しいです。

第1話 【天使】

せかへい 外伝4

著者… p i r a f u d o r i a
作画… p i r a f u d o r i a

第1話

【天使】

これは古代のお話。人々は作物を育て、裕福ではないにしろ。その時代を幸せに暮らしていた。

そんなある日、一人の天使が人々の前に降り立った。天使は人々に知識や力を与

え、生活を豊かにしていった。

そんな中、天使と共に協力して人々を支えていたのが、二人の兄弟だ。

二人の兄弟は天使に与えられた力を、それぞれのやり方で活用し、人々の生活を発展させていった。

ある時、人類を嵐が襲う。嵐は人々に大きな被害をもたらした。しかし、これほどの大きな災害であったのに、誰一人死者が出ることはなかった。

それは天使と二人の兄弟の協力により、人々を守ることができたからだ。

だが、ここから悲劇が起こる。

二人の兄弟は天使に恋をしていたのだ。

それから二人の争いが始まった。

最初は小さなことからだった。ちょっとした会話、ちょっとした仕事。それが徐々に大きくなり始めた。

そして二人の力を使うようになった。お互いの得た力を行使して、天使にどれだけ自分の方がすごいのかそれを見せつけようとした。

二人に協力するものも現れ、二人の争いはやがて個人のもものではなくなった。

二人は人々を動かし、戦争を始めた。二人はお互いの得た力を見せつけ合い、ぶつけ合った。その力は強大であり、大陸に大きな空洞を作った。

やがて戦争が終わった。

天使は戦争中に幽閉されていた。戦争が終わり、外に出ると待っていたのは一人であつた。

「彼は……?」

天使はそう尋ねた。しかし、兄弟の一人は答えることはなかった。

人類は増え、人々は栄え始めた。そして天使と兄弟の一人は子を作った。その子はやがて、国を作った。

国は発展し、時間の経過で人は寿命で死ぬ。しかし、天使は人の何れもの寿命があり、国をずっと見守り続けた。それは何代にも続いた。

終戦後。消えた残りの兄弟はどこに消えてしまったのか。彼は何を残したのか。

――――

後書き、

今回はパト達のメインの話とは少し外れた話を書きました。しかし、本編には一番関係のある話であります。是非こちらの話も含めて、本編の「世界最強の兵器はここに!」もご覧ください。

次回は何を書くかまだ考えてませんが、今まで通りに短編シリーズを続けていく予定です。本編の方もストックの様子を見ながら、公開していくので、お楽しみに!!

では、ご覧くださり、ありがとうございました!!

第1話

【反転世界】

せかへい 外伝5

著者… p i r a f u d o r i a
作画… p i r a f u d o r i a

第1話

【反転世界】

王国から離れた地には反転した世界がある。そんな噂を聞いたことがある。

「エリス先輩ー！」

シーヴ・レーベル。エリスを慕う王立魔法学園の後輩であり、エリスと同じく魔法の知識はかなり高い。

シーヴは校内でエリスを見つけて、声をかける。

「ん、シーヴ。何か用？」

「用っていう用はないんですけど」

「じゃあ、また……」

「いや、ちょちょ待ってください!!」

「何よ」

シーヴは立ち去ろうとするエリスを止める。

しかし、止めたは良いが何を話せば良いのかわからない。迷って考えていると、

「用がないなら」

再びエリスは立ち去ろうとする。

「ちよ、待ってくださいよぉ!! なんでそんな急いでるんですか!!」

「急いでないよ」

「じゃあなんで!」

「用がないから」

「あーもう!! あります!! ありますよ!!」

シーヴはムキになってそう答えた。

王立魔法学園には多くの設備が整っており、その中の一つに校内で学生や先生が休める場として、喫茶店が整備されている。

授業の合間に友達と話す学生や課題を進める学生など多くの人たちがいる。

そんな中、窓際の席で二人の生徒が座っていた。

店内に入る時に注文は済ませているため、完成次第テーブルに注文した品が持ってきて来られる。

しかし、エリスは注文した品が届くよりも早く、話を始めた。

「それでなんなの？」

ゆっくり話す機会が得られたかもと機会したシーヴであったが、エリスの態度にちよつとがっかりしながらも答えた。

「最近噂の反転村って知ってますか？」

エリスは腕を組む。

「全てが反転してるって噂の？」

「さすがはエリス先輩情報が早い。そうです。その村です」

最近生徒達の間で噂になっている都市伝説的な村の噂だ。

村の敷地だけ重力が逆さになっていて、村が逆さに作られているという。住む住民も逆さになっていて、その敷地だけおかしい空間になっているという。

「少しだけ話を聞いたことがあるだけよ。でも、それがどうしたの？」

シーヴはエリスの真似をして腕を組む。

「いえ、先程面白い話を聞きました、本当にこの村があるかもしれない可能性が増したんです」

エリスはシーヴが真似したのに気づいて、腕を組むのをやめる。

「それはどういこと？」

シーヴもエリスが腕を組むのをやめたので、真似をしてやめる。

「その反転村に行ったことがあるという人物が現れたんです！」

||||||||||||||||

今回は反転している村についてのお話です。

シーヴは本編にも登場するキャラです。

第2話 【反転世界 其の2】

せかへい 外伝5

著者… p i r a f u d o r i a
作画… p i r a f u d o r i a

第2話

【反転世界 其の2】

シーヴが言うには最近噂になっている反転村に行ったことがある人物がいるのだと言う。

反転村とは全てのものが反転していると噂であり、とても人間の住めるような環

境ではないはずなのに、そこに暮らす村人がいるというもの。

だが、実際には噂の領域であり、確証のある話ではない。

ある話だと、その村の重力は天に向かって落ちており、その村から落ちると天界に行くことができるとも言われている。

「それでその村に行ったことがあるってのは誰なの？」

エリスが聞くとシーヴはニヤニヤする。

「少し興味が湧きましたか？」

しかし、エリスは冷たく一言で返す。

「……ええ、そうね」

ちょっとシーヴは落ち込むが、すぐに立て直して説明を始める。

「それですね！一緒に調査しませんか!!」

シーヴが勇気を出して、エリスと一緒に調査をしないかと聞いた。

まずはその反転村に行ったという人物を探すところから始まった。

生徒達に聞き込みをして、学校中を歩き回る。そしてしばらく探し回った末にやっとその人物を見つけることができた。

その人物は新入生であり、まだ少し幼さが残る女の子。

彼女の教室に行くと、すでにその子の周りには生徒達が集まり様々な話をしていた。

エリスとシーヴはその輪を割って入り、その生徒の前に立つ。

「少し良いかしら？」

エリスがそう聞くと、周りの生徒がエリスの顔を見る。そして衝撃を受ける。

「え、エリス先輩だ!!」

「ほ、本物!？」

エリスは校内ではもう名前が十分に広がった大物だ。

凄まじい魔法の才能と知識を見せつけて、この学校に入学した。

それにそれだけではなく、すでに先生達を超えており、もう卒業できる実力を持ちながら学校に残っている理由は、先生達に授業をしているという噂がある。

女性生徒は聞く。

「えっと、私に何か用ですか？」

まさか、自分に話しかけてくるとは思っていなかったのか。少し驚いた様子だ。

「反転村について話を聞かせて欲しいの」

エリス達は女性生徒を連れて、校内にある中庭に移動した。

中庭は花や草木が整理されて育てられており、風水なども設置されている。

エリス達は屋根付きの大理石で出来たベンチで座る。

真ん中にはテーブルがあり、それを囲むように椅子が設置されている。

早速エリスは本題を聞く。

「それであなたは本当に反転村に行ったの？」

すると、女性生徒はゆっくりと口を開く。

「はい、一度だけですが、小さい頃に……」

続
く

第3話 【反転世界 其の3】

せかへい 外伝5

著者… p i r a f u d o r i a
作画… p i r a f u d o r i a

第3話

【反転世界 其の3】

反転村とは全てのものが反転している村であり、村の建築物や水流、人までもが反転している世界である。

その村の上空は地下にあり、無限に続く地下であるとも言われている。それでそ

の地下の先には地下の空洞と繋がっており、そこには世界を揺るがす大罪人が囚われているとも言われている。

そんな村が本当に存在するのか。今までは噂でしかなかった村だ。しかし、最近その村に行ったことがあるという人物が、オーボエ王国の王立魔法学園に入学してきた。

エリスとシーヴはその真実を確かめるべく、行動を起こすのであった。

「それで本当の話？」

エリスが聞くと少女は答える。

「はい、本当です。小さな頃の話ですが……」

私は行商人の家の娘で、父は取引のために多くの村を点々と旅をして取引をしてきました。

ある時、私もその旅について行くことになり、馬車に乗って大陸の各地を移動しました。

そんなある時です。

私は父達が取引をしている間に、私は村の子供達と一緒に遊んでいました。でも、道に迷ってしまい、森の中に迷い込んでしまったんです。

その時は誰も近くにいなくて、とても心細かったです。

そんな時、見つけたんです。全てが逆さになっている村を!!

村を囲うように円状に、おかしい空間が広がっており、そこだけ地面が逆さになってました。

下は暗くずっと続く地下。でも、モノは下に落ちていくのではなく、上に上がっていく。

本当に重力が逆さになってました。

地面は空高く伸びていて、でも、少し前までそんな高いものは見えていなかったのに、突然現れたんです。

そこには村人もいました。村の中に入ると、私も逆さになり、違和感はなかったです。

村人達はとても優しくて、私に帰り道を教えてくれて、それで帰ることができました。

少女の話を聞いたエリスは尋ねる。

「それはどこの村の近くなの？」

「それが記憶があやふやなんです。私だけじゃなくてその場にいた人間、誰もがです」

「それは……」

「おそらく行ってはいけない場所だったんです」

少女は立ち上がる。

「先輩達もこの件に関してはほどほどにした方が良いでしょう」

そう言うと、少女は頭を下げて、この場から離れていった。

記憶が残らない。

少女の話が本当のことだとは思えない。重要な情報がないという点で、信憑性に欠ける。

だが、それは少女の話を聞いたただだったらだ。エリスには少し思い当たることがあった。

続く

第4話 【反転世界 其の4】

せかへい 外伝5

著者…pirafudoria
作画…pirafudoria

第4話

【反転世界 其の4】

シーヴは頭を下げる。

「すみません、エリス先輩!! なんの情報も得られなくて!!」

しかし、エリスは首を振る。

「まだ諦めるには早いよ。付いてきて」

そう言い、エリスはシーヴを連れて歩き出す。

シーヴを連れてきたのは王立魔法学園にある図書館だ。

そこには多くの本があり、王国で一番多く本が保管されている。

本棚は人の三倍ほど積み上げられており、上の方に置いてある本を取るためには梯子を使うなどする必要がある。

「あそこにある本を取ってきてくれる？」

エリスはそう言うと、一番上の方にある赤い本を指さす。

「俺？」

シーヴは自分のことを指さす。

「あなた以外誰がいるのよ」

シーヴは嬉しそうに「はい!!」と返事をする、梯子を持ってきて上に登っていく。

「この本ですか？」

シーヴはエリスが指した本を取ると、エリスに見せて確認する。

「そうよ」

シーヴは梯子からジャンプして降りる。

高さはかなりあるが、シーヴは余裕で着地した。

「どうぞ!!」

シーヴはエリスに本を渡す。

エリスは本を開くと、本の内容を確認する。

「これは私の仮説なんだけど……」

そう言うと、エリスは自分の考えを話す。

大陸には世界の始まりの木となった大樹があると言われている。

それは不思議な力で守られており、通常ではたどり着くことも、見ることもできないと言う。

その木は大陸の西側にあると言われており、木のある近くは魔素が集まりやすいと言う噂もあり、魔力を求めてオーボエ王国とフルート王国の間で戦争が起きたこともあった。

エリスの仮説はその木が反転村なのではないか。と言うものである。

その木は地界から天界まで繋がる巨大な大木であり、世界の柱となっている。

もしも、反転村と神話に登場するその木が存在するのなら、その二つは関係性が

あるのかもしれない。

大昔に王国を作ったと言われる人物達。王族や貴族は天族の子孫であると言われる、もしかしたらその木を伝って、この下界にやってきたのかもしれない。

情報が少ない以上、これを調べる手段はこれ以上ない。

しかし、この知識は今後、何かに使えるかもしれない。

エリスはこの記憶を留めておくことにした。

「で？これ行けないんですか？」

「行ったでしょ。今の状況じゃ、行けないのよ」

|
|
|
|
|
|
|
|
|
|
|
|
|
|
|

今回はちょっと長めのストーリーでした。

この短編はもしかしたら本編にも関係が出てくるかも!?

ご覧くださり、ありがとうございました!!

第1話

【ハロウィン討伐】

せかへい 外伝 6

著者… p i r a f u d o r i a

作画… p i r a f u d o r i a

第1話

【ハロウィン討伐】

ハロウィンパーティーが始まり、村は大盛り上がり、そんな中、防壁では静かに時が過ぎていた。

「あゝ、あゝ、暇だなあ」

エスは槍を持ちながら、そんなことを言う。

「おい、あまりサボるなよ」

そんなエスにマティルは言う。

村の中心では祭りが行われているが、今日は二人が門の見張りをしている。

「ま、中では祭りの最中だしな」

そう言い、マティルは腕を組んだ。

そんな調子で門番をしていて、しばらく経った頃。

「ん、あれなんですか？」

エスが防壁の外に何かを見つけた。

「なんだ？」

それはオレンジ色の球体の下には緑色の何かがついている。

しかし、草原の先にいるため、その正体がなんなのか遠くて見えない。

「エス、双眼鏡を持ってこい」

マテイルはそう、エスに指示をする。

「はい！」

エスは急いで双眼鏡を倉庫から持ってくる。

マテイルはエスから双眼鏡を受け取ると、汗を流した。

「あれは……………」

「どうしたんですか？」

マテイルはエスに双眼鏡を渡す。

「モンスターについて知識はあるか？」

「少しですが……」

エスか双眼鏡を貰い、さっき遠くに見えた物を見ると、

「あれは!？」

顔のついたカボチャが三つほどあり、その下にはウネウネとうねる緑色の蔦。

「ランクBのモンスター、カボトレントだ」

カボトレント。木に擬態するモンスターのカボチャバージョンであり、カボチャなどが大量に実る頃に、カボチャ畑などに隠れて、農家を襲う。

基本的には収穫の前に冒険者を雇い、討伐をお願いするモンスターである。

しかし、あの個体はどういう経緯で草原に現れたのかが不明だ。

どこかで自然に実っているカボチャに擬態にて誕生したのか、それともどこかの村で討伐に失敗してここまでやってきたのか。

だが、どちらにしろ。

「エス、武器を持て！俺たちで討伐するぞ」

マテイルはそう言うのと、腰にかけてある剣を抜く。

村では祭りの最中だ。ここは門番である二人で討伐したい。

それに奴がトレントと分かったからには、ここから離れるわけにはいかない。

奴を一度でも見失えば、すぐに擬態してしまい、探すのが困難になってしまう。

犠牲を出さないためにも、見えているうちに討伐するの一番だ。

「はい！ やりましょう!!」

エスも門の柱に横掛けに置いていた槍を手にする。

「俺たちで討伐する!!」

二人はカボトレントに向かっていった。

1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36
37
38
39
40
41
42
43
44
45
46
47
48
49
50
51
52
53
54
55
56
57
58
59
60
61
62
63
64
65
66
67
68
69
70
71
72
73
74
75
76
77
78
79
80
81
82
83
84
85
86
87
88
89
90
91
92
93
94
95
96
97
98
99
100
101
102
103
104
105
106
107
108
109
110
111
112
113
114
115
116
117
118
119
120
121
122
123
124
125
126
127
128
129
130
131
132
133
134
135
136
137
138
139
140
141
142
143
144
145
146
147
148
149
150
151
152
153
154
155
156
157
158
159
160
161
162
163
164
165
166
167
168
169
170
171
172
173
174
175
176
177
178
179
180
181
182
183
184
185
186
187
188
189
190
191
192
193
194
195
196
197
198
199
200
201
202
203
204
205
206
207
208
209
210
211
212
213
214
215
216
217
218
219
220
221
222
223
224
225
226
227
228
229
230
231
232
233
234
235
236
237
238
239
240
241
242
243
244
245
246
247
248
249
250
251
252
253
254
255
256
257
258
259
260
261
262
263
264
265
266
267
268
269
270
271
272
273
274
275
276
277
278
279
280
281
282
283
284
285
286
287
288
289
290
291
292
293
294
295
296
297
298
299
300
301
302
303
304
305
306
307
308
309
310
311
312
313
314
315
316
317
318
319
320
321
322
323
324
325
326
327
328
329
330
331
332
333
334
335
336
337
338
339
340
341
342
343
344
345
346
347
348
349
350
351
352
353
354
355
356
357
358
359
360
361
362
363
364
365
366
367
368
369
370
371
372
373
374
375
376
377
378
379
380
381
382
383
384
385
386
387
388
389
390
391
392
393
394
395
396
397
398
399
400
401
402
403
404
405
406
407
408
409
410
411
412
413
414
415
416
417
418
419
420
421
422
423
424
425
426
427
428
429
430
431
432
433
434
435
436
437
438
439
440
441
442
443
444
445
446
447
448
449
450
451
452
453
454
455
456
457
458
459
460
461
462
463
464
465
466
467
468
469
470
471
472
473
474
475
476
477
478
479
480
481
482
483
484
485
486
487
488
489
490
491
492
493
494
495
496
497
498
499
500
501
502
503
504
505
506
507
508
509
510
511
512
513
514
515
516
517
518
519
520
521
522
523
524
525
526
527
528
529
530
531
532
533
534
535
536
537
538
539
540
541
542
543
544
545
546
547
548
549
550
551
552
553
554
555
556
557
558
559
560
561
562
563
564
565
566
567
568
569
570
571
572
573
574
575
576
577
578
579
580
581
582
583
584
585
586
587
588
589
590
591
592
593
594
595
596
597
598
599
600
601
602
603
604
605
606
607
608
609
610
611
612
613
614
615
616
617
618
619
620
621
622
623
624
625
626
627
628
629
630
631
632
633
634
635
636
637
638
639
640
641
642
643
644
645
646
647
648
649
650
651
652
653
654
655
656
657
658
659
660
661
662
663
664
665
666
667
668
669
670
671
672
673
674
675
676
677
678
679
680
681
682
683
684
685
686
687
688
689
690
691
692
693
694
695
696
697
698
699
700
701
702
703
704
705
706
707
708
709
710
711
712
713
714
715
716
717
718
719
720
721
722
723
724
725
726
727
728
729
730
731
732
733
734
735
736
737
738
739
740
741
742
743
744
745
746
747
748
749
750
751
752
753
754
755
756
757
758
759
760
761
762
763
764
765
766
767
768
769
770
771
772
773
774
775
776
777
778
779
780
781
782
783
784
785
786
787
788
789
790
791
792
793
794
795
796
797
798
799
800
801
802
803
804
805
806
807
808
809
810
811
812
813
814
815
816
817
818
819
820
821
822
823
824
825
826
827
828
829
830
831
832
833
834
835
836
837
838
839
840
84

今回は村の門番であるエスとマティルのお話です。

ハロウィンの話の続きます。

第2話 【ハロウィン討伐 其の2】

せかへい 外伝6

著者… p i r a f u d o r i a
作画… p i r a f u d o r i a

第2話

【ハロウィン討伐 其の2】

エスとマティルはカボトレントの元に向かう。

カボトレントは、カボチャの部分の大きさは通常のカボチャと変わらないが、根がこの部分が以上に長い。

カボトレントの根っこは地面に埋まっていて、目視はできないが、最大で三メートルほど伸びると言われている。

「これ以上近づくな」

マテイルはカボトレントから其の最大サイズの倍の数、六メートルほど距離を取って止まった。

カボトレントは、その根っこを地面から操作して攻撃してくる。

そのため接近戦による戦闘はお勧めされない。

「ここから俺が魔法で攻撃する。何かあれば、そこから援護を頼む」

マテイルはそう、エスに告げる。

マテイルは昔は王都に暮らしていたこともあり、それに王立魔法学園を卒業している。

エリスと比べると、魔法使いとしての腕は低く感じてしまうが、それでも一流の魔法使いだった。

「はい！」

エスは槍を構えて、何があっても対処できるようにする。

「大丈夫。すぐに終わる！」

マテイルの手に魔法陣が現れると、魔法計算を行い、炎の弾が現れる。

「一撃で終わらせる！ 炎の弾（パルフラム）!!」

マテイルはその弾をカボトレントに向けて放った。

カボトレントは炎に包まれて、苦しむ。

トレントには炎系の魔法が有効だ。植物に擬態することにより、より燃えやすい素材になっていることが多い。

だが、カボトレントもこのままでは終わらない。

カボトレントは根っこをうねうねと動かすと、自身の元を集める。そして、地面から飛び上がった。

トレントは植物を元にモンスターとなった魔素の集合体だとされやすいが、正確

には違う。

魔素は近くにある動物の性質を元に形となりモンスターとなる。

そのため、植物が元とされることはない。

かなり形は変わっているが、トレントの元は虫である。

草木に擬態する虫の特徴を受け継いだモンスターであり、その擬態するという点を強調して生成されたのがトレントとなるのだ。

そのため根っこは地面に埋まっているが、移動する際には地面から抜いて足になる。

トレントは足を使って飛び上がったのだ。

「まだやるか」

マティルは再び魔法計算を行う。

マティルの得意魔法は炎と風である。そしてその両方を合わせた必殺技。

「なら、俺の十八番で終わらせる」

魔法陣はカボトレントの真下にある地面にも現れる。そして魔法計算が終わると、

「くらえ！ 風炎」

カボトレントを包む炎の竜巻が現れた。

炎の竜巻はカボトレントを完全に消滅させた。

「お疲れ様です、マティルさん」

「いやいや、俺はお前がいたからこんな大技を撃てたんだ。こいつは時間がかかる。俺一人だと隙が多すぎてできなかったよ」

こうして村にひっそりと訪れていた脅威は去ったのであった。

第1話 【衣替え】

せかへい 外伝7

著者…pirafudoria
作画…pirafudoria

第1話

【衣替え】

サージュ村も夏が終わり、秋になる。そして季節は寒い季節になってきた。

村人達は寒さに備えるために、準備をしていた。

「おーい、パト」

パトのことを呼ぶのは、父親であるガオだ。

ガオは家にあるリビングで部屋の掃除をしていた。

パトは自分の部屋で書類仕事をやっていたが、呼ばれたため部屋の扉を開けて顔を出す。

全身を出すわけではなく、扉を少しだけ開けて顔だけを出している状況だ。

「どうしたの？ 父ちゃん」

パトがそう聞くと、ガオは掃除をしながら言う。

「そろそろ寒くなってきただろ。お前服は大丈夫か？」

「ああ……」

パトの服は夏用の半袖短パンであつた。それを見たガオが心配したのだ。

「そろそろ冬服出すよ！」

パトはそう言うのと、自分の部屋に戻る。

パトの部屋にはアルシミーに関する本が大量に入れられた本棚と、書類の散らかっている机。そしてベットがある。

普段着ている服はベッドの上にある壁にハンガーでかけており、そこには二枚の私服と、一枚の正装がかけられている。

パトはベッドの下に手を伸ばすと、下から木製の箱を取り出す。横縦はベッドの半分程度の大きさの箱で、高さはベッドの下にギリギリ入る程度である。

「確かこの中に……」

パトがその箱を開けると、中には長袖の服やズボン。または貰い物の服やその他、衣裳類が入っていた。

パトはそこから必要な服を取り出すと、ベッドの上にある服と取り替える。

「よし、これで良いかな」

パトは木製の箱をベッドの下にしまう。

そして扉を開けて、父に報告した。

「一応、服を取り替えたよ」

そう言ったパトのことをガオは見て一瞬考える。

そしてゆっくり口を開けた。

「おい、パト」

「ん、なに？」

「お前が着てる服はどうするんだ？」

「……………あ」

パトはまだ自分の服を変えていなかった。

その後、パトは今日はそのままで仕事をして、洗い終わった後、もう一度箱を取り出して服をしまったのであった。

――――

ご覧くださり、ありがとうございます!!

今回は1話で終わる短編のお話でした。

今回は意外とうっかりしていたパトの日常回でした。こういうこともあるかもです
ね！

サージュ村は品物を全て生産できる力はなく。服などは王国から買ってきたものが中心になっています。

しかし、王国までは距離があるため、誰かが買い出しに行った時に一緒に買ってくるという形ですね。

実際に現実も寒くなってきましたね。皆さん、健康にはお気をつけください!!

第1話

【裏か表か】

せかへい 外伝8

著者…pirafudoria
作画…pirafudoria

第1話

【裏か表か】

エリスは王国にある宿でベッドに横になっていた。

エリスはオーボエ王国にある王立魔法学園に通う学生である。普段はこの王国にある宿を借りて住んでいる。

オーボエ王国は笛のように高い建物が並ぶ国であり、エリスが泊まっている宿も上に長い建物である。

エリスはそんな宿の3階にある部屋に泊まっている。この宿は学園に徒歩5分で着ける便利な場所だ。

王国の中心に近いということもあり、値段は結構高いがその分快適に暮らしている。

そんなエリスに不満があるとすれば、ちょっと寂しいということくらいだ。

今日はすでに授業を終えている。しかし、夕飯にはまだ時間があり、少し暇な時間でもあった。

エリスが王国に来た理由は、あるものを手に入れるためである。しかし、そのた

めの計画は順調に進んでいる。

これ以上焦る必要もない。

エリスは何かないかと、ベッドの上で手を伸ばす。

すると、あるものがエリスの手に触れた。

それはひんやりしていて硬い。手に取るとそれは平たく丸い、親指よりも少し大きい程度。

「あゝ、さっきのお釣りか」

それはこの王国で通貨として使われている金貨である。

夕食を購入した時のお釣りであり、帰ってきた時にその辺に置いていたのが、近くにあったのだ。

エリスはそれを手に取ると、ベッドを椅子にして座る。

そして金貨を見つめた。

金貨には模様が彫られており、裏表で絵柄が違う。

エリスはそれを手に持つと、手の甲を上にして指で器用に金貨を転がした。

「……………」

エリスは一人無言で、そうやって金貨を転がした後、金貨を親指に持ってくる。

——私の望みは叶うか、ちょっとした占い——

エリスはそんなことを思いながら、金貨を親指で弾いた。

金貨は空中で回転し、やがてエリスの手に落ちてきた。

エリスは左手の手の甲で金貨をキャッチすると、右手で押さえた。

そしてゆっくりと右手をどかして、金貨が裏か表か確かめる。

その結果は……………

「……………」

裏である。

しかし、エリスは左手に金貨を乗せたまま、右手で金貨をひっくり返す。そして無理やり表にする。

そうしてしばらく金貨を見つめた後、エリスは金貨を適当にその辺に捨てると、立ち上がった。

「よっし、ご飯食べよっつと」

そう言うと、エリスはリビングへと向かっていった。

エリスが捨てた金貨はベッドの上でバウンドして、そのままベッドの壁の隙間に落ちる。

そして地面に落ちて、音を立てながら回転した後、金貨は裏になってその場に落ちた。

第1話 【カボチャの討伐へ】

せかへい 外伝9

著者… p i r a f u d o r i a
作画… p i r a f u d o r i a

第1話

【カボチャの討伐へ】

「おい、まだあー？」

ミエは両手を口元に持ってきて、大声を出した。

「ああ、もうちょっとー!!」

宿の部屋から男の声が聞こえる。

ミエの横ではダズが暇そうに頭を掻いている。

「まだっすかー？」

「まだー！」

ダズも暇だったようで扉の奥にいるリトライダーに呼びかけるが、まだ終わらないと帰ってきた。

ミエは腕を組む。

「てか、何やってるのよ？」

そんなミエにダズが答える。

「朝食の卵で腹壊したみたいっすね」

「あー、あれね」

「そうっす。リトライダーが昨日一人で買ってきてたやつっす」

ミエはため息を吐く。

「あれは……腹壊すよ」

昨日この村に着いた時に、リトライダーは出店でブンブン鶏の卵を買った。しかし、ちょっと変色している部分もあり、明らかに腐っていた。

話が聞こえたのか。部屋の中からリトライダーが喋る。

「しょうがねーだろ!! ブンブン鶏の卵といえば、そう簡単に食べられるものじゃない!! 高級食品なんだぞ!! だったら、腐っていても安ければ買うだろ!」

そんな言葉を聞いたミエとダズはお互いに目を合わせる。

「バカね」

「バカっすね」

ミエは木製の自分の魔法の杖で部屋の扉を開けて三回ほどノックする。

「それじゃ、ガーラ師匠も先に行ってるみたいだし、私たちも行ってるね」

「クエスト中に腹壊しても知らないっすよ」

二人はそう言い、リトライダーの部屋の前から離れる。

「おい、ちょっと待てよ!! おい!! 待ってって!! もうすぐ終わるから!! あ、ちょっと、マジで待って、今気づいた!! トイレットペーパーがない!! ちょ、店主呼んできて! ちょ、あれ、いない? もう行っちゃった? 誰かー!! ヘループ!!」

リトライダーの叫びが宿中に響いた。

ギルドではガーラが掲示板に貼られたクエストを確認しながら、何をやるうか迷っていた。

「……………こいつは厳しいか」

自分一人ならどうにかなるクエストもある。しかし、リトライダー、ミエ、ダズの三人がいる以上、あまり高難易度のクエストをやるべきではない。

しかし、ちょうど良い難易度のクエストがなかなか見つからないのだ。

「どうするか……」

そう悩んでいた時、ギルドの店員のお姉さんが話しかけてきた。

「えっと、ガーラさんですよね？」

「ああ、そうだ」

「あの水晶（クリスタル）の称号を持つガーラさんですか!! お会いできて光栄です!! 是非あなたに受けてもらいたいクエストがあるので!!」

そう言うと、店員はある紙を差し出した。

続く

第2話

【カボチャの討伐へ 其の2】

せかへい 外伝9

著者…pirafudoria

作画…pirafudoria

第2話

【カボチャの討伐へ 其の2】

ミエとダズがギルドに到着すると、入り口でガーラが待っていた。

「あ、クエスト決まりましたか？」

「ああ、一応な」

ガーラは一人足りないことに気づく。

「おい、リトライダーはどうした？」

「あ、奴なら腹痛っす」

「……………」

しばらく経って、やっとリトライダーも合流した。

顔を青くしたリトライダーにガーラは聞く。

「……………おい」

「は、はい、大丈夫ですから、……一応」

「……………」

こうして全員集まったということで、クエストを受けるために移動を始めた。

向かうは村の外れにある畑だ。

「今回のクエストはなんですか？」

ガーラは無言でミエ達に紙を見せる。

それはクエスト内容の書かれた紙だ。

「カボトレント討伐依頼」

成功報酬30金貨。

村のカケラーヌの管理する畑に現れたカボトレントを討伐する。

「カボトレントってあの!？」

ミエが言うところには頷く。

「ああ、あのカボトレントだ」

「カボトレントってなんですか？」

「……………知らないのかよ。なんだったんだ、さっきの反応は……………」

ガーラは説明を始める。

カボトレントはカボチャの実る頃に現れるモンスターでカボチャに擬態するトレントだ。

正確には虫型のモンスターであるが、モンスターランクはB。かなり強力なモンスターだ。

ギルドはモンスターの危険性などからそれをランク付けしている。A～Fランクまであり、その強さなどもそのランクから測ることができる。

そのため、冒険者のどのモンスターがどのランクに該当しているのかを覚えており、自分の力量と照らし合わせながらクエストを選ぶ。

しかし、そのランクは所詮は人間の作ったもの。状況などで強さは変化するた
め、あまり頼り過ぎも良くはない。

「Bランクモンスターっすか。俺たちでやれるっすかね？」

ダズは心配そうに言う。ガーラはダズの方を向くことなく、後ろを振り向かず歩
きながら答える。

「俺は何度か討伐したことある。ランクの割にはそこまで強いモンスターじゃな
い。どこにいるのかさえ、わかっていればな」

そんな会話をしているうちに、ついにクエストの場所に辿り着いた。

そこは小さな畑である。

周りには実っている植物がいっぱいあるが、カボトレントの発生により収穫ができていないようだ。

「……良いか。奴はこの畑の中央にいる。無理に突っ込むなよ」

ガーラは片手斧を持ち上げる。ミエは魔法の杖を、ダズはメリケンサックを腕につける。

「行くぞ！」

続く

第3話 【カボチャの討伐へ 其の3】

せかへい 外伝9

著者… p i r a f u d o r i a
作画… p i r a f u d o r i a

第3話

【カボチャの討伐へ 其の3】

ガーラが斧でカボトレントの根っこを切り裂く。

「おい、だから突っ込むなって言っただろ！」

それによりダズとミエがカボトレントから解放された。

「すまないっす」

「ごめんなさい」

カボトレントはカボチャの頭が三つついており、その下に緑色の根っこが地面に埋まっている。

本体はカボチャの部分であり、根っこを攻撃しても効果がない。

「一旦退け、体制を立て直すぜ」

「え、退くんすか？」

「カボトレントは移動できるモンスターであるが、基本的にはその場を動かない。

近づいてきた敵を捕食するモンスターなんだ」

ガールはそう説明すると、二人を連れて少しだけ後ろに下がる。すると、カボトレントは追撃をやめて大人しくなる。

「……と、リトライダーは？」

ふと気付いたミエが言う。

そう、気づくとリトライダーがいない。

「またトイレっすね」

「あいつ……」

ガーラはため息を吐く。そして再び、斧を構えた。

「リトライダーはいい。ここは俺たちでやるぞ。もう一度、今度は近づきすぎるなよ」

ガーラの合図で再び戦闘が始まる。

ミエは魔法で遠くからカボトレントに攻撃する。ミエの得意とする空気を固めて飛ばす魔法だが、カボトレントに効いている様子はない。

ダズはミエに向かってくる根っこを弾いて、カボトレントの攻撃からミエを守る。

そしてガーラは二人がカボトレントの気を引いているうちに、カボトレントの後ろへ回り込み、斧を投げてカボトレントの顔の部分を破壊した。

顔の部分が壊れたことで、カボトレントは突然力がなくなったように動かなくなり、その後魔素になって蒸発して消えた。

「さすが、ガーラ師匠っす!!」

「一撃ね!」

ミエとダズはガーラに近づいて、カボトレントを倒したことを喜ぶ。

「……………」

ガーラは恥ずかしそうに後ろを向いた。

「お前達も手伝ってくれたからな」

こうして、ガーラ達は無事にクエストをクリアすることができた。

クエスト中にずっとトイレに籠っていたリトライダーは報酬を受け取ることができなかつた。

さらにその腹痛は3日ほど続くのであった。

――――――――――

今回の話はポンコツ冒険者三人とガーラの物語です。

本編の洞窟の話が終わった後あたりの話です。まだ本編の投稿が間に合っていないかもしれませんが、その場合はお許しください。

今後もしろんなキャラの話を書く予定なので、よろしくお願いします!!

第1話

【メタルハート 1話（ギルド）】

メタルハート 1

著者… p i r a f u d o r i a

作画… p i r a f u d o r i a

第1話

【メタルハート 1話（ギルド）】

とある村にあるギルド。その橋のテーブルに一人の女が座っていた。

水色の髪を後ろに引っ張り結ぶポニーテールであり、銀色の鎧を着ている。年齢は20前後だろう。

そんな女性の前に荒くれ者の冒険者達が寄ってきた。顔が赤いことから酔っているのだろう。

ギルドでは酒類の提供はしていないため、外で飲んでここに来たという形だろうか。

「おい、姉ちゃん、人で何してるのお？」

酔っ払いは女性の肩に手を乗せようとする。しかし、突然横から現れた男がそれを止めた。

「何してる？」

「ああ？」

黒髪に前髪が長く、左目が隠れている男。身長は男達より一回り大きく、体つきもかなり良い。

男を見上げる形になった酔っ払い達は男にビビり、そそくさと逃げていった。

「ロウ。遅かったじゃない」

黒髪の男に女性は話しかけた。

「アイサが早いんだぞ。それでも早めにきた方だ」

「遅刻してるやつが何言ってるんだか……」

アイサはやれやれと首を振る。

「それでも依頼は決めたのか？」

ロウはアイサの向かいの椅子に座る。

「ええ、もう決めた」

アイサはそう言っていると紙を取り出して見せる。

「今日はこれをやるよ!!」

「ゴブリンの討伐」

5 金貨

森に住み着いたゴブリンの群れを討伐

「ゴブリンか」

「ま、これくらいが今の私たちにはちょうど良いんじゃないかしら……………」

アイサはロウの耳元に口を近づけて、小声で言う。

「私たちは冒険者なんだし……」

二人は装備を整えると、ギルドを出て依頼を受けにいった。

向かうは村の西側にある森。そこにゴブリンの群れが住み着いていると言う。

モンスターとは魔素を媒体に、集合して出来上がった物体であり、生物ではない。

しかし、近くにいた動物の遺伝子を元に形を生成するため、その土地に適したモンスターが現れる。

ゴブリンやオークは人間が住む土地に現れやすく。狼がいる地域には狼のようなモンスター、熊のいる地域には熊のようなモンスターが生息している。

モンスターは魔力を持つ生物を襲う傾向があり、人間や動物はその標的になりやすい。

そのため多くの動物達は工夫をして、モンスターから身を守りながら生息している。

今回の討伐以来のゴブリンは森に住み着いた。その森には彼らにとって餌となる

動物が生息しているということなのかもしれない。

そうになると、ゴブリンだけではなく。別のモンスターの危険性も出てくる。人間だけではなく、他の動物も襲われている可能性があり、その動物を元に誕生したモンスターがいるかもしれないからだ。

続く。

――――

今回のように不定期で特定の人物に注目したエピソードが投稿されることもあるかもです。

続きの場合はタイトルが同じものが使われる予定です。

第2話 【メタルハート 2話 森】

メタルハート 2

著者…pirafudoria

作画…pirafudoria

第2話

【メタルハート 2話 森】

今回の討伐目標はゴブリンである。しかし、別のモンスターにも警戒する必要があると判断したロウ達は慎重に森を進んでいた。

ロウは腰のベルトに剣を引っ掛けている。剣は片手剣であり、長さも短ければ、

重くもない。

そのため、ロウは全体的に軽装であり、重い鎧などは付けていない。

剣士というよりは盗賊に近い格好である。

隣を歩くアイサの格好は銀色プレートを付けているが、重いものではなく。軽めのものにはしている。それでも水バケツ一杯分の重さはあるので、それなりに重たいはずだ。しかし、アイサはこれを難なくと持ち歩いている。

背中に二本の長剣を持ち、頭から腰下までの長さがある。

「あなたももう少し、しっかりした武器を持ちなさいよ」

森を警戒しながらアイサがロウにそんなことを言う。

ロウは頭を掻きながら返す。

「俺はこれで十分だよ。……………お前みたいなゴリラじゃないし」

ロウはアイサに殴られる。ロウの頭には大きなタンコブが出来上がる。

「いってえ」

ロウは膨らんだ頭を撫でながら、辺りを見渡す。すると、何かを感じる。

「アイサ……………見つけたぞ」

ロウの真面目な声にアイサは反応して、雰囲気が変わる。

「どこ？」

「このまま西の方へ進んで、その先に大きな岩か？ があるな。そこから北の方へ進んで川を挟んだ先に5匹……………それに別個体もいるな」

アイサは西の方を向くが、その先はずっと森が続いている。大きな岩もなければ、川も見えない。音すら聞こえない。

しかし、アイサは迷わずに、

「じゃあ、進みましょう」

ロウと共に西の方へと進んでいった。

しばらく足を進めて、やっと大きな岩を発見した。

「まだ同じ場所にいる？」

「ああ、動いた様子はない」

大岩を超えたロウ達は今度は北の方へと進む。大岩に着いてもまだ川の音は聞こえなかったが、だいぶ歩いた先でやっと川の音が聞こえ始めた。

そして、

「いたな」

川を挟んだ先に、5匹のゴブリンの群れを見つけた。今は何をするでもなく、睡眠中のようなだ。

「ゴブリンは川の向こうだな。だが、そこそこ深い。それに……………」

ロウが喋ろうとしたところで、アイサが頷く。

「さっき行ってた別個体ね」

「……………ああ、おそらく魚類をベースにしたモンスターだ。水中戦だと流石にきつい」

すると、アイサは重い鎧をその場に置く。

「なら、そっちは私に任せなさい。ロウ、あなたはゴブリンを頼むよ」

||||||||||||||||

二人ともおそろくめっちゃ強いです。

第3話

【メタルハート

3話

圧倒】

メタルハート 3

著者…pirafudoria

作画…pirafudoria

第3話

【メタルハート 3話 圧倒】

二人は川の方へと走り出した。今まで茂みに隠れて、ゴブリンの様子を見ていたため、ゴ布林達には気付かれていなかったが、ここで気づかれる。

ゴ布林達には木製の武器を持ち、二人を迎え撃とうとする。

だが、両者を阻むのは巨大な川。

ゴブリンもロウ達もお互いに川の方へと向かう。しかし、川の中心は深い。川の中で戦うことは避けたいのか。ゴブリン達には川には入らずに、川辺で待っている。

そんな中、ロウは川に辿り着くと、走っていた勢いをそのままに飛び上がった。

そのジャンプ力は高く。大きな川を飛び越えてしまうほどの高さだ。

川の長さは馬車の5台分はある。そんな距離をロウは楽々と飛び越えようとした。

しかし、川の中央を飛び越えているところで、川の中に黒い影が映る。それは大きく。ロウと六倍の大きさはある。

その影はロウに近づくと、さらに大きくなり、水しぶきを飛び散らしながら川の中から大ジャンプしてきた。

トゲトゲした鱗を持ち、人間の体すら貫通してしまいそうな巨大な歯を持つ魚系のモンスターだ。

空中にいるロウには突然襲われたこの状況で対処することができない。だが、ロウは焦っていない。

なぜならば、

魚系のモンスターはロウに辿り着く前に、弾き返される。それはロウとは遅れてモンスターの襲撃を見てからジャンプしたアイサであった。

アイサは両手で長剣を持つと、それで魚系モンスターを斬りつけたのだ。

アイサが魚系モンスターと戦っているうちに、ロウは川を渡り切る。

そして腰にある剣を手にとると、ゴブリン達に向けて、剣を向けた。

ゴブリン達は木製の武器を手にとりかかってくる。

しかし、ロウは風のような速さで移動して、気がつけばゴブリン達の背後にいた。

二匹のゴブリンがロウの奇襲でやられる。いつ攻撃したのか。ゴブリン達には理解できない速度であった。

さらにそのままの勢いで三匹目、四匹目と仕留めていき、最後の一匹も簡単に倒した。

ロウはハンカチで剣についた血を拭いていると、川の中から先程の魚系モンスターの死体が投げ飛ばされる。

そして川の中からアイサが出てきた。

「そっちも終わったみたいね」

「ああ、どんな奴だろうと仕事だ。油断なく、全力でやらせてもらった」

川から出てきたアイサにロウはタオルを投げた。

「戻るぞ。そろそろあっちの仕事も来てるはずだ」

続く

1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36
37
38
39
40
41
42
43
44
45
46
47
48
49
50
51
52
53
54
55
56
57
58
59
60
61
62
63
64
65
66
67
68
69
70
71
72
73
74
75
76
77
78
79
80
81
82
83
84
85
86
87
88
89
90
91
92
93
94
95
96
97
98
99
100
101
102
103
104
105
106
107
108
109
110
111
112
113
114
115
116
117
118
119
120
121
122
123
124
125
126
127
128
129
130
131
132
133
134
135
136
137
138
139
140
141
142
143
144
145
146
147
148
149
150
151
152
153
154
155
156
157
158
159
160
161
162
163
164
165
166
167
168
169
170
171
172
173
174
175
176
177
178
179
180
181
182
183
184
185
186
187
188
189
190
191
192
193
194
195
196
197
198
199
200
201
202
203
204
205
206
207
208
209
210
211
212
213
214
215
216
217
218
219
220
221
222
223
224
225
226
227
228
229
230
231
232
233
234
235
236
237
238
239
240
241
242
243
244
245
246
247
248
249
250
251
252
253
254
255
256
257
258
259
260
261
262
263
264
265
266
267
268
269
270
271
272
273
274
275
276
277
278
279
280
281
282
283
284
285
286
287
288
289
290
291
292
293
294
295
296
297
298
299
300
301
302
303
304
305
306
307
308
309
310
311
312
313
314
315
316
317
318
319
320
321
322
323
324
325
326
327
328
329
330
331
332
333
334
335
336
337
338
339
340
341
342
343
344
345
346
347
348
349
350
351
352
353
354
355
356
357
358
359
360
361
362
363
364
365
366
367
368
369
370
371
372
373
374
375
376
377
378
379
380
381
382
383
384
385
386
387
388
389
390
391
392
393
394
395
396
397
398
399
400
401
402
403
404
405
406
407
408
409
410
411
412
413
414
415
416
417
418
419
420
421
422
423
424
425
426
427
428
429
430
431
432
433
434
435
436
437
438
439
440
441
442
443
444
445
446
447
448
449
450
451
452
453
454
455
456
457
458
459
460
461
462
463
464
465
466
467
468
469
470
471
472
473
474
475
476
477
478
479
480
481
482
483
484
485
486
487
488
489
490
491
492
493
494
495
496
497
498
499
500
501
502
503
504
505
506
507
508
509
510
511
512
513
514
515
516
517
518
519
520
521
522
523
524
525
526
527
528
529
530
531
532
533
534
535
536
537
538
539
540
541
542
543
544
545
546
547
548
549
550
551
552
553
554
555
556
557
558
559
560
561
562
563
564
565
566
567
568
569
570
571
572
573
574
575
576
577
578
579
580
581
582
583
584
585
586
587
588
589
590
591
592
593
594
595
596
597
598
599
600
601
602
603
604
605
606
607
608
609
610
611
612
613
614
615
616
617
618
619
620
621
622
623
624
625
626
627
628
629
630
631
632
633
634
635
636
637
638
639
640
641
642
643
644
645
646
647
648
649
650
651
652
653
654
655
656
657
658
659
660
661
662
663
664
665
666
667
668
669
670
671
672
673
674
675
676
677
678
679
680
681
682
683
684
685
686
687
688
689
690
691
692
693
694
695
696
697
698
699
700
701
702
703
704
705
706
707
708
709
710
711
712
713
714
715
716
717
718
719
720
721
722
723
724
725
726
727
728
729
730
731
732
733
734
735
736
737
738
739
740
741
742
743
744
745
746
747
748
749
750
751
752
753
754
755
756
757
758
759
760
761
762
763
764
765
766
767
768
769
770
771
772
773
774
775
776
777
778
779
780
781
782
783
784
785
786
787
788
789
790
791
792
793
794
795
796
797
798
799
800
801
802
803
804
805
806
807
808
809
810
811
812
813
814
815
816
817
818
819
820
821
822
823
824
825
826
827
828
829
830
831
832
833
834
835
836
837
838
839
840
84

魚系モンスターの名前って何が良いんだろ。

第4話

【メタルハート

4話

仕事】

メタルハート 4

著者…pirafudoria

作画…pirafudoria

第4話

【メタルハート 4話 仕事】

依頼を達成したことをギルドに報告したロウ達は、宿に戻っていた。

ロウは先程の討伐でもらったお金をアイサに全て渡す。

アイサはそれを受け取ると、

「良いの？」

と不思議そうに聞いた。

ロウは首を振る。

「ま、お前がいなければ危なかったわけだしな。それにそんなちっぽけな金は俺には必要ない」

アイサはロウから受け取った金貨を財布にしまう。

「それでそろそろ指令書が届いてる頃だな」

ロウはそう言うと、部屋にある窓の方へと向かった。

「お……」

ロウが窓を開ける。すると宿の中に光が入ってきて、一気に明るくなる。

古びた宿で冒険者に人気の宿ということで、ロウ達はここを借りている。それも冒険者であると周りに思わせるため。

窓を開けたロウは一枚の小さな紙を持って、アイサの方へ振り返った。

窓の隙間に紙が挟まっていたようだ。

「なんで書いてあるの？」

「今日の夜9時、酒場の裏の路地で待つ……らしいな」

紙には通常の言葉ではなく。ロウやアイサ達にしか伝わらない暗号で書かれている。

書いてある内容は待ち合わせの場所と時刻。その場所に今回の任務内容を知っている仲間がやってくる。

「まだ時間があるみたいね」

「ま、予想以上に早く依頼が終わって、まだ昼過ぎだしな」

まだ冒険者としての依頼が終わってから、そんなに時間も経っていない。

まだ待ち合わせの時間までは時間がある。ロウ達は時間を潰すことにした。

ロウとアイサは村をふらふらと歩く。さっきまでの冒険者としての装備は宿に置いて、簡単な軽装でロウ達は村を探索した。

村には多くの店があり、冒険者用のギルドがある村ということもあり、旅人用の店もいくつもある。

冒険者としてこの村に潜伏してから、長いことこの村にはいたが、こうやって村を探索するのはあまりやっていなかった。

「あ！ あれ見て！」

「ん、なんだ？」

ロウ達は昔を思い出すように、村での平和な時間を楽しんだ。

あんな事件が起きる前の、平和だった村人の時代を思い出しながら……。

やがて時間になり、夜飯を食べたロウ達は人目を避けながら、待ち合わせ場所に向かった。

待ち合わせ場所には誰もいない。

酒場の裏は狭い路地でゴミなどが溜まっており、先には木材で壁が作られていた。

ロウとアイサは木材の壁に背中をつける。

すると、壁の反対側から声が聞こえる。

「……………来たか。心鋼（シンコウ）」

二人は何者なのか？

1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36
37
38
39
40
41
42
43
44
45
46
47
48
49
50
51
52
53
54
55
56
57
58
59
60
61
62
63
64
65
66
67
68
69
70
71
72
73
74
75
76
77
78
79
80
81
82
83
84
85
86
87
88
89
90
91
92
93
94
95
96
97
98
99
100
101
102
103
104
105
106
107
108
109
110
111
112
113
114
115
116
117
118
119
120
121
122
123
124
125
126
127
128
129
130
131
132
133
134
135
136
137
138
139
140
141
142
143
144
145
146
147
148
149
150
151
152
153
154
155
156
157
158
159
160
161
162
163
164
165
166
167
168
169
170
171
172
173
174
175
176
177
178
179
180
181
182
183
184
185
186
187
188
189
190
191
192
193
194
195
196
197
198
199
200
201
202
203
204
205
206
207
208
209
210
211
212
213
214
215
216
217
218
219
220
221
222
223
224
225
226
227
228
229
230
231
232
233
234
235
236
237
238
239
240
241
242
243
244
245
246
247
248
249
250
251
252
253
254
255
256
257
258
259
260
261
262
263
264
265
266
267
268
269
270
271
272
273
274
275
276
277
278
279
280
281
282
283
284
285
286
287
288
289
290
291
292
293
294
295
296
297
298
299
300
301
302
303
304
305
306
307
308
309
310
311
312
313
314
315
316
317
318
319
320
321
322
323
324
325
326
327
328
329
330
331
332
333
334
335
336
337
338
339
340
341
342
343
344
345
346
347
348
349
350
351
352
353
354
355
356
357
358
359
360
361
362
363
364
365
366
367
368
369
370
371
372
373
374
375
376
377
378
379
380
381
382
383
384
385
386
387
388
389
390
391
392
393
394
395
396
397
398
399
400
401
402
403
404
405
406
407
408
409
410
411
412
413
414
415
416
417
418
419
420
421
422
423
424
425
426
427
428
429
430
431
432
433
434
435
436
437
438
439
440
441
442
443
444
445
446
447
448
449
450
451
452
453
454
455
456
457
458
459
460
461
462
463
464
465
466
467
468
469
470
471
472
473
474
475
476
477
478
479
480
481
482
483
484
485
486
487
488
489
490
491
492
493
494
495
496
497
498
499
500
501
502
503
504
505
506
507
508
509
510
511
512
513
514
515
516
517
518
519
520
521
522
523
524
525
526
527
528
529
530
531
532
533
534
535
536
537
538
539
540
541
542
543
544
545
546
547
548
549
550
551
552
553
554
555
556
557
558
559
560
561
562
563
564
565
566
567
568
569
570
571
572
573
574
575
576
577
578
579
580
581
582
583
584
585
586
587
588
589
590
591
592
593
594
595
596
597
598
599
600
601
602
603
604
605
606
607
608
609
610
611
612
613
614
615
616
617
618
619
620
621
622
623
624
625
626
627
628
629
630
631
632
633
634
635
636
637
638
639
640
641
642
643
644
645
646
647
648
649
650
651
652
653
654
655
656
657
658
659
660
661
662
663
664
665
666
667
668
669
670
671
672
673
674
675
676
677
678
679
680
681
682
683
684
685
686
687
688
689
690
691
692
693
694
695
696
697
698
699
700
701
702
703
704
705
706
707
708
709
710
711
712
713
714
715
716
717
718
719
720
721
722
723
724
725
726
727
728
729
730
731
732
733
734
735
736
737
738
739
740
741
742
743
744
745
746
747
748
749
750
751
752
753
754
755
756
757
758
759
760
761
762
763
764
765
766
767
768
769
770
771
772
773
774
775
776
777
778
779
780
781
782
783
784
785
786
787
788
789
790
791
792
793
794
795
796
797
798
799
800
801
802
803
804
805
806
807
808
809
810
811
812
813
814
815
816
817
818
819
820
821
822
823
824
825
826
827
828
829
830
831
832
833
834
835
836
837
838
839
840
84

第 5 話

【メタルハート

5 話

正体】

メタルハート 5

著者…pirafudoria

作画…pirafudoria

第 5 話

【メタルハート 5 話 正体】

酒場の裏にある木造の壁は、あまり厚くないのか裏側の声が聞こえる。

壁の反対側にも誰かおり、その人がロウとアイサに喋りかけてきた。

「劍」

壁の向こうの男がそんなことを言う。

アイサはそれに対して、

「鎧」

と返した。これはこの組織での暗号。お互いが仲間であるという証明の方法である。

「心鋼（シンコウ）か。久しぶりだな」

暗号で別人ではないことを確認した彼の向こうにいる人物は喋り出す。

その声はしつかりとした真面目そうな女性の声。

「ええ、あなたも元気そうで良かった。ティン」

アイサは腕を組みながらそう返す。

「あなたたち現場に比べれば楽なんだ。それとロウもそこにいるのか？」

ティンはさっきから喋らないロウの存在が気になったようだ。

「ああ、いるぞ」

ロウはめんどくさそうに返す。

ロウの返しを聞いたティンは、

「相変わらずアイサ以外には心を開いてくれないか。まあ、良い。早速だが、新情報だ」

ティンはそう言うと、情報を伝え始めた。

「混沌の色（カオ・クルール）の獣狼（サンクディーモン）、その中でもトップクラスの要注意人物であるユウキ・ゴショウ。奴に動きがあった」

混沌の色（カオ・クルール）とはオーボエ王国の闇の仕切る組織であり、殺人や麻薬、違法武器販売に、強盗など王国を悩ませる組織である。

王国でも彼らを追っているが、かなりデカイ組織であり、手を出せないのが現状だ。

その中でも獣狼（サンクディーモン）とは組織の中心人物の数名であり、闇世界では有名な実力者である。

組織を動かす力も凄いが、戦闘力は十聖にも及ぶと言われており、一人一人が危険人物として指名手配されている。その中でも最も危険と言われているのが、ユウキ・ゴシヨウだ。

昔は王国の魔法使いでもあり、フルート王国とオーボエ王国の戦争にも参加したと言われているが、その実力は不明である。

何よりも奴が立った戦場では、敵どころか、味方でさえ、誰一人立っていないかったと言われている。

だが、獣狼（サンクディーモン）の面々は姿を消すのがうまく、闇に隠れる。情報を得るのでさえ、難しい。

ティンは続ける。

「ええ、おそらくわざと、なんのためかは分からないが、私たちに情報を与えた」

余裕か。それとも誘っているのか。どちらにしろ。ユウキは国家すら壊しかねない危険人物。それだけの人物が動いたとあれば……。

「増援は期待できないのね」

アイサはため息を吐きながら言った。

「そういうことだ」

続
く

第6話

【メタルハート

6話

心鋼】

メタルハート 6

著者…pirafudoria
作画…pirafudoria

第6話

【メタルハート 6話 心鋼】

「じゃあ、こっちの情報も伝えるわ」

アイサは壁越しのティンに話しかける。

「雲鼠（グリーズ・ニューアーズ）。奴らは予想通りこの村にいるらしい」

アイサはティンにそう伝える。

「何か尻尾を掴んだのか？」

「ええ、奴らの拠点もここにある。もう見つけた」

「優秀だな。あなた達は……。分かった。増援入るか？」

「必要ない。あの人数なら私たちだけで制圧できる」

アイサは自信満々に言う。しかし、ティンは一呼吸置いて忠告した。

「雲鼠（グリーズ・ニューアーズ）のボスは不思議な技を使うと有名だ。油断はする

なよ」

「当然」

一通り、情報交換を終えたティンは気がつけば、その場から消えていた。

ティンがいた場所に行くと、そこには布の包みに金貨が数枚入れられていた。

今回の仕事での経費と給料の両方を含めての金貨だろう。

ロウはアイサに金貨を渡す。

「少しは持っておきなさいよ」

「いらん」

頑なに金貨を受け取らないロウに、アイサはやれやれと自分の財布に金貨をしまった。

二人は一度宿に戻り、身体を休めることにした。

雲鼠（グリーズ・ニューアーズ）にはロウ達の存在はバレていない。普通の冒険者だと思われているだろう。

雲鼠（グリーズ・ニューアーズ）の拠点を制圧できれば、奴らと関係のある組織も一挙に掴まれることができるかもしれない。

雲鼠（グリーズ・ニューアーズ）は闇の世界の武器屋である。違法に生産された武

器を裏ルートで盗賊や反政府組織に販売している。

主に販売している武器は、魔法を付与した特別な武器。魔道具と呼ばれるものだ。

魔道具にはいくつか種類があり、魔石を使ったものから、魔法で武器に魔力を付与したものまで様々なものが存在する。

魔道具は使い方によっては、日用品にも武器にもなる。王国では冷気を出す装置や、髪を乾かすために暖かい風を出すもの、お湯を簡単に沸かすものまで多くのものが存在する。

そして武器であれば、爆発物を製造したり、通常の剣の切れ味をさらに上げたりと、用途によって大きく変化する。

そんな魔道具を武器として違法に販売するのが、雲鼠（グリーズ・ニュアーズ）で

ある。

アイサ達が雲鼠（グリーズ・ニュアーズ）の拠点があると予想しているのは、村にある酒場である。

通常では深夜を過ぎると店じまいをするが、深夜になっても数人の客が出て来なくなる。

おそらくそこで取引が行われている。

雲鼠（グリーズ・ニュアーズ）のボスらしき人物を見たという情報もある。

ロウ達は潜入の日程を決めた。

第7話

【メタルハート 7話 潜入】

メタルハート 7

著者… p i r a f u d o r i a

作画… p i r a f u d o r i a

第7話

【メタルハート 7話 潜入】

雲鼠（グリーズ・ニューアーズ）のアジトがここの村にあると判断したロウ達は、その拠点のある酒場に潜入することになった。

潜入は夜間で、通常の客がいない時間帯。

取引のためにやってきた闇の取引人を一挙に捉えるべく。それらが完全に中に入ってから、ロウ達は潜入することにした。

現在確認できるだけで四人が酒場から出てきていない。雲鼠（グリーズ・ニューアーズ）の仲間か、それとも取引相手か分からないが、奴らを捕らえるチャンスである。

ロウとアイサは軽装の装備で酒場に向かう。

裏にある窓に小さな穴を開けて、鍵を開くとそこから侵入した。

酒場はカウンター席とテーブル席がある小さな店であり、カウンターの奥には調理場と倉庫がある。

この空間の中に何か取引する空間に繋がる場所があるはずだ。

夜間であるため明かりはつけられず、手探りで手がかりを探す。

すると、早速ロウが何かを見つけた。

「おい、これは？」

それはテーブルの下にある取っ手だ。しかし、テーブルの下にあるため通常では気づくことはない。

「ナイスよ。ロウ!!」

扉を開けるとそこには地下に続く階段があった。

「酒場にこんな地下室があったなんてね」

アイサは驚く。

おそらくこの下に武器の保管庫と取引場があるのだろう。

「もしかしたら別に出口があるのかもしれない。逃げられるのは困るね」

ここで襲撃をしたとしても、侵入に気づかれて非常用の出口から出られては困る。

しばらく考えた後、アイサは閃く。

「私は他に出口がないか調べるよ。ロウ、あなたはここから奇襲をかけて」

「了解……」

ロウとアイサは二手に分かれることにした。

アイサは外から他の出入り口がないか探す。奇襲をしたとしても、別の出口から逃げられたら、どうしようもないからだ。

ロウは中に侵入し、状態を探りながら奇襲を仕掛ける。

別に出口がない場合は、ロウの奇襲で全ての決着がつくだろう。

ロウは石で出来た階段をゆっくりと降りる。

階段は30段もあり、かなり下に降りることになった。

下まで降り切ると、そこには狭い廊下が続いている。

そして奥の方から人の声が聞こえる。だが、まだハッキリと聞き取れるわけではない。

ロウは足音を立てないようにして、ゆっくりとその声の聞こえる方へと進んでいく。

しばらく進むと、木製の扉があり、その奥で声が聞こえていることに気づく。

声は数人の男たち。

「今日の取引はなかなかだったな」

「ああ、良いものが手に入った」

続く

第 8 話

【メタルハート

8 話

奇襲】

メタルハート 8

著者…pirafudoria
作画…pirafudoria

第 8 話

【メタルハート 8 話 奇襲】

ロウは勢いよく扉を開く。

すると、そこは少し開けた空間に三人の男たちがいた。

薄汚れたフードを被った男達。

男達はロウを見ると驚く。

「貴様、何者だ!？」

ロウは腰から片手剣を抜くと、男達に向けた。

「俺はオーボエ王国騎士団。心鋼（シンコウ）の副団長ロウ・ブラウンだ!!」

それを聞いた男達は驚く。

心鋼（シンコウ）。それは王国騎士の中でも有名な騎士団である。

最近現れた騎士団であり、犯罪組織を次々と壊滅させている。

「な、なんだと!!」

フードを被った男達は剣を持ち、ロウに向かって襲いかかった。ロウは三人の剣を難なく避けて、剣で一人の剣を折ると、その男の顎に肘を当てて、気絶させる。

一人やられても、諦めず襲ってくる男達。ロウは再び襲ってくる二人の剣を避けて、一人は剣を折り、もう一人の剣は吹っ飛ばした。

飛んでいった剣は空中を舞うと、回転しながら天井に刺さる。

剣を飛ばされた男は、剣の行方を目で追い、隙が生まれてしまい、その隙にロウは斬り伏せた。

残った男は折れた剣を捨てると、慌てて通路の奥へと逃げていった。

ロウは男を追って通路を走る。

さらに地下の奥に進むと、通路の途中に扉があり、男はそこに入って行った。

ロウは用心しながら扉に近づき、ゆっくりと扉を開ける。

するとそこは武器庫らしく、オレンジ色の槍を持ち、男がそこで待っていた。

「クソー！このままやられてたまるかよ！」

すると、男は槍を回転させてから構える。

倉庫は狭いが、槍を振り回すと壁に穴が空き、壁に引っかかることなく槍は回

転した。

「これは今日俺が買った新武器、全てを貫く槍だ。騎士であっても、これさえあれば俺でも勝てる!!」

男はその槍でロウに向かって月攻撃を仕掛けてくる。

ロウはそれを避けるが、槍は空中で止まったというのに、その先にある穴に穴を開けた。

「こいつは空気でさえ切り裂く。カマイタチを作り出す。逃げ場はない!!」

男は次々と槍でロウに攻撃を仕掛ける。

ロウはどうか避け続けるが、地下であり通路が狭いことがあり、かなり危ない

状況である。

それに通路が狭く、相手は槍という長い武器を使っている。それに比べてロウは短剣であり、攻撃を届けるのが難しい。

ロウはどうにか近づく手段がないか、考える。

「……っ!!」

狭い中の攻撃で、ロウも徐々にダメージを受け始める。

「これだとどめだー!!」

その時!!

続
く

第 9 話

【メタルハート

9 話

戦闘】

メタルハート 9

著者…pirafudoria

作画…pirafudoria

第 9 話

【メタルハート 9 話 戦闘】

「これで終わりだー!!」

男はロウに向けて、槍で攻撃する。

この狭い空間、ロウは避けることができない。

槍がロウに向かってくる。

「させるかァー!!」

その時、壁が壊れて、その中から現れたのはアイサ。

アイサは槍を弾くと、ロウを守るように前に立った

「アイサ!!」

「何ボサツとしてるよの!! あなたの死に場所はここじゃないでしょ!!」

アイサが現れたことで、槍を持った男は少し後ろに下がる。

「貴様もそいつの仲間か」

「ええ、その武器、回収させてもらおう!!」

アイサは槍を弾いた短剣を持って、槍を持つ男に攻撃を仕掛ける。

男は槍を振り回し、攻撃を防ぐ。しかし、アイサはその槍をうまく回避して、懐に潜り込んだ。

「終わりよ」

そして男を腹を切り裂いた。

「がハー!!」

男の腹には右から左へ斜め下に向かって、切り傷ができて、そのまま地面に倒れた。

槍は男の手から離れると、重力に従って地面に倒れていくが、途中で壁にぶつかるとその倒れた勢いで壁を切り裂いて、勢いがなくなると壁にめり込んだ状態で止まった。

「アイサ、無事だったか」

ロウはアイサに近づく。

「ええ、あんたほど弱くないからね」

「それはどういふことだよ……」

アイサの返しにロウは怒る。

「この程度の槍に苦戦するなんて、騎士失格よ」

「俺だってやろうと思えばやれたんだ!! お前が邪魔したんだよ!!」

「何よ!! 私が来なければ死んでたかもしれないのよ!!」

二人は睨み合いながら喧嘩をしたが、今は任務中だ。

「まあ、この件は後にして。他の入り口から逃げようとしていた者は捕らえたよ。でも、まだ奴が見つけられていない」

「奴って……」

「雲鼠（グリーズ・ニューアーズ）のボス。ダードゥだ」

雲鼠（グリーズ・ニューアーズ）のボス。ダードゥ。

闇の武器商人であり、多くの裏組織に魔道具などを売買してきた。

そのことから指名手配もされており、騎士だけではなく、冒険者からも狙われている。

だが、奴は何年もの間捕まることはなかった。それは……。

「よく来たな。心鋼（シンコウ）」

アイサ達が地下を探索していると、しばらくして広い場所に出た。

そこは地下の中でも巨大な空間であり、家が一軒入ってしまいそうな巨大な倉庫。奥には木箱がいくつも積み上げられており、その上に男がいた。

男はスーツ姿にハット帽を被った紳士的な格好をした老人。

杖についており、シワのある顔には立派な髭を生やしている。

髭は鼻の下にありVを逆さにしたような形だった。

「さあ、反撃と行こうか」

続く

第10話

【メタルハート

10話

老人】

メタルハート 10

著者…pirafudoria
作画…pirafudoria

第10話

【メタルハート 10話 老人】

地下の奥にいたのは老人。その老人の名は……。

「私がダードゥだ」

雲鼠（グリーズ・ニューアーズ）のボス。ダードゥ。

闇世界の売買人であり、あらゆる武器を販売している。

武器を購入するのは、犯罪組織や反乱軍。それにより多くの犠牲が生まれる。

「堂々と出て来るなんて、自信があるのね」

アイサがそうダードゥを挑発する。

「ああ、君たちも聞いているだろう。私の実力を……」

ダードゥは過去7年間。指名手配されていたながら、一度も捕まったことがなかった。

ダードゥは何度も目撃され、このように基地を襲撃されたことも何度もあった。

十聖の百の兵を連れて、ダードゥの基地を占拠したこともある。しかし、どの時もダードゥは捕らえることができなかった。

それはダードゥの力。単純な戦闘能力。

十聖にも匹敵する戦闘センスを持っており、魔法も剣の腕前も、何においても最強クラスと言われる人物である。

有名な冒険者が何人もダードゥの討伐に挑むが、決してダードゥには勝てない。

どんな騎士であっても、ダードゥを捕らえることはできなかった。

「二人か。ま、君たちの實力だと、下手な兵を集めた方が邪魔か」

ダードゥはアイサとロウを見てそんなことを言う。

ダードゥは木箱の上からジャンプして降りると、二人の前に立った。

「さ、私を捕まえてごらん」

アイサとロウは短剣を手にとり、ダードゥに向かって走り出す。

ダードゥは杖のフックの部分を腕にかけると、腕を動かして杖を回転させ始めた。

二人の剣がダードゥに届こうとした時、二人の前からダードゥが消えた。

「私はね。つまらないのだよ……」

気がつくと、二人の後ろにダードゥがいた。

二人は再び剣を手にダードゥに斬りかかろうとするが、身体が動かない。

「私がなぜ武器を売り続けるか知っているか？」

アイサとロウは不思議な感覚に陥る。それは床が自分に向かって迫って来るような感覚。

世界が歪み、赤く染まる。

「孤独だった。私は寂しかったんだ」

ダードゥは杖を地面に立てると、カンッという音が鳴る。

「強さとは孤独なものだ」

アイサとロウは地面に倒れていた。

「な、何が起きたの？」

アイサは地面に突っ伏したまま、現状を知ろうとする。

自分の倒れる床は赤く染まっていて、腹に痛みを感じる。

「まだ理解できないって顔だね。じゃあ見せてあげよう」

そういうとダードウは杖の少し上にあげる。すると、杖の手で持つ部分から、杖の部分が離れて、杖に刃物が見えた。

「仕込み刀。武器を持たない武器商人がどこにいる？」

アイサは自分が斬られたという事実を知った。

第 11 話

【メタルハート

11 話

記憶】

メタルハート 11

著者… p i r a f u d o r i a
作画… p i r a f u d o r i a

第 11 話

【メタルハート 11 話 記憶】

アイサは自分が斬られたことを知った。

身体が痛む。死の恐怖も感じる。だが、自分のことよりも……。

「ロウ!! ロウ!! 返事をしなさい!!」

さっきから隣で倒れている。ロウに目が入った。

倒れてから全く動かないロウを見て、ダードウは言う。

「うーむ。手加減はしたつもりだったんだけどなあ。まあ、一人残ってれば情報は聞き出せるか」

ダードウは頬を掻いてやれやれという顔だ。

「ロウ!! ロウ!! 起きなさい!! ロウ!!」



声が聞こえる。俺を呼ぶ声が……。

懐かしい声だ……。

緑生い茂る森の中、俺は倒れていた。

何があったか分からない。だけど、左目が痛むのと、人々の悲鳴が頭の中に残っていた。

気がつくと俺はベッドの上にいた。天井は木造で近くには窓がある。窓からは日差しが入ってきていて、鳥の囀りが微かに聞こえる。

俺は立ち上がろうとしたが、身体が動かない。

左目の痛みはないが、身体中が焼けるように痛かった。

しばらくすると、部屋の扉が開かれて、そこから一人の少女が入ってきた。

水色の長髪で薄汚れた黄緑色の服を着た村人の少女だ。

「あ!! 大丈夫？」

少女は俺の姿を見て、すぐに近づいてきた。

俺は動かない体を無理して動かそうとする。それは人を恐れるように。

「待って、動いちゃダメだよ」

少女はベッドで暴れる俺を安心されるように手を握った。

「大丈夫。大丈夫だから」

怯える俺を落ち着かせようと……。

それからしばらく少女は俺の手を握って、落ち着くまで一緒にいてくれた。

俺は少しずつ落ち着きを取り戻す。

「待ってて……。お父さん呼んでくるから」

少女はそう言って俺から手を離す。そして父を呼ぶために部屋を出て行こうとする。

俺はその少女が行ってしまったら、また一人になってしまう気がしてしまう。

しかし、少女は俺の方を振り向くと、笑顔でこちらの方を向いた。

「大丈夫。すぐに戻って来るから」

その言葉と表情が俺に安心を与えてくれた。

それからその少女の父親がやってきて、その症状を見た。

俺は大きな怪我をしていたのか。身体中が包帯で巻かれており、父親が看病をしてくれている間、少女もずっと近くにいてくれた。

それが彼女との出会いであった。

今回のちょっと過去編のエピソードになります。この出会いが何に繋がっているのか。

――――

第12話

【メタルハート

12話

過去】

メタルハート 12

著者… p i r a f u d o r i a
作画… p i r a f u d o r i a

第12話

【メタルハート 12話 過去】

少女の家にやってきて数日が経ち、俺もこの家の住民と少しずつ話せるようになってきた。

この家には父親であるシィアーと一人娘であるアイサという親子が二人で暮らし

ている。母親は昔に亡くなっており、今は村から少し離れたこの土地で畑仕事をし
て暮らしていた。

「ほら、ご飯持ってきたよ」

アイサがご飯を運んできてくれた。

「……ありがとう」

畑仕事で疲れているはずなのに、アイサはいつも俺が食べている時は一緒にいて
話をしてくれた。

俺が食べ終わるのが遅くても、ずっと一緒にいてくれた。

そして俺は少しずつだが、アイサに心を開いていった。

ある時アイサは聞いてきた。

「ねえ、あなたはどこから来たの？」

俺はそのことについて答えようとする。

しかし、何も思い出せない。俺がどこから来て、何をしていたのか。何も思い出すことができなかった。

アイサは俺が困っているのを気づくと、すぐに話題を変えた。

しかし、それから俺は俺というものが何者なのか。その疑問をずっと抱き続ける

ことになった。

俺は何者なのか。俺はなんなのか。

そんな疑問を抱きながらも数日が経過し、俺の怪我は治り始めて、やっと立ち上がることができるようになった。

まだ足元はふらつくが、少しずつ歩くことができるようになっていく。

もう少し動けるようになったら、俺はアイサ達のために少しでも恩を返せるように、仕事を手伝いたいと思っていた。

だから俺はひっそりと歩けるようになるために、トレーニングを行うようになった。

基本的にはアイサか、その父がいる時に肩を貸してもらいながら歩く練習をした。

だが、そんなペースではダメだと、壁に添いながらゆっくりと歩く練習をする。

何度も倒れながらも歩ける距離を伸ばしていった。

しかし、

俺は二人がいない間に歩く練習のため部屋を歩く。そして一時的なゴールとして何歩か先にあるテーブルをゴールとした。

俺がどうにかたどり着くと、そこには鏡がありふと自分の姿を見てしまった。

そこには左目が黒い謎の物体に覆われて、紅瞳の少年がいた。

両目で色が違う。いや、それどころじゃない。この左目は人間のものではない。

俺は普通の人間ではない。

自分の姿を見て、俺は気づいてしまった。俺という存在の正体に……。

それから俺は動かない身体を無理に動かしながらも、家を出た。

どこに向かうのかわからない。でも、現実から逃げるように。

第13話

【メタルハート

13話

瞳】

メタルハート 13

著者…pirafudoria
作画…pirafudoria

第13話

【メタルハート 13話 瞳】

自分の姿を見てしまった俺は逃げ出した。

怖かった。自分が自分でなくなることが……。何も覚えていない。覚えていないはずなのに、声が聞こえてくる。

悲鳴が……。怒りが……。

ただ俺は何度も転びながらも森を走り続けた。

やがて雨が降り始めて、身体は転んだ傷だけではなく、泥だらけになっていく。

俺はそれでも走り続けた。

怖かった。怖かったんだ。何か壊れてしまうのではないかと、そう思って怖く
なってしまった。

気がつけば雨も強くなり、辺りは暗かった。

そんな中、

「ロウ……」

そこに現れたのはアイサだった。

アイサは俺よりも泥だらけで何度も転んでいたようで、綺麗な顔には泥と傷でいっぱいだった。

「アイサ、なんで……」

俺が不思議そうにアイサのことを見上げると、

アイサに頬を叩かれた。

それと同時に今まで俺に聴こえていた不思議な声と一緒に、雨の音も聞こえなくなった。

それは突然ノイズが聞こえなくなるように。いや、叩かれた音が耳に残ってそれらを全てかき消してしまった。

それでもアイサの声だけは聞こえた。

アイサは俺を守るように抱きつく。

「心配した……」

アイサは小さな声で言った。

それを聞いて俺は理解した。アイサは俺を追いかけてきてくれていたんだと……。

こんな雨の中、森の中を駆け回り、俺を探して、何度も何度も転んでそれでも諦

めずに俺を探し続けてくれていた。

「……ありがとう」

俺は感謝を言っていた。

雨は降っている。だから、どうだったのかはわからない。でも、俺は泣いていたと思う。

俺も両目で……。

怖かった。怖かった。それはアイサ達を失うことが怖かったんだ。

この目を見て俺は自分を人間じゃないと判断した。

アイサ達は俺の目のことについて既に知っていただろう。それでも一緒にいられたのだ。

それでも……。

俺は立ち上がると、アイサを置いて再び歩き出す。

「アイサ、ありがとう。親父さんにも礼を言っておいてくれ……………」

俺は転びながらも前に進もうとする。

「お前達を危険に晒したくはない……。この目はきっと危険なもの……。だから」

俺が無視して進もうとしていると、アイサが横に来て支えてくれた。

「私たちなら大丈夫よ。その目……何かあるのは確かよ。でもね。だからって一人で背負い込まないで……」

アイサは俺と一緒に前に進んで、

「一緒に進みましょう。……私たちを頼って。もう家族でしょ」

第14話

【メタルハート

14話

家族】

メタルハート 14

著者… p i r a f u d o r i a
作画… p i r a f u d o r i a

第14話

【メタルハート 14話 家族】

それから俺達は家に帰ると、俺はアイサの父に怒られた。

でも、嬉しかった。初めてだったからだ。こんなに優しく怒られたのは、初めてだった。そう、記憶はないけど、こんなことはなかった。そう分かった。

それから数日の間、俺とアイサは寝込んでいた。二人で雨を浴びて身体が冷えてしまったことで風邪をひいてしまったのだ。

そんなこともありながらも、時間は少しずつ過ぎていき、俺はどうか軽い畑仕事なら手伝えるようになっていた。

身体が動くようになったことで、二人にも少し楽をさせられるのではないかと、そうやって手伝いを率先してやっていく。

そんな中、家にある人物が訪ねてきた。

それはオーボエ王国の騎士だ。

数人の兵士を連れた男がやってきたのだ。

男はアイサの父と知り合いらしく。古くからの友人らしい。

二人で話していたが、しばらく経って俺とアイサが呼ばれた。

アイサの父は娘と息子と紹介した。

そして俺たちの話をしばらくした後、本題に入った。

「なあ、お前に少し相談がある。この子の目についてだ」

それは俺の目に関する話。俺の目をどうにかしてあげられないかと、その騎士に

相談したのだ。

しかし、その騎士にも俺の目の原因がわからなかったらしく、どうすることもできなかった。

だが、ある可能性を教えてくれた。

「俺はその分野については専門外なんだが……王国の裏組織。そこで人体実験をしている連中がいると聞いたことがある」

それは俺がその組織の実験体であり、逃げ出したか、それとも捨てられたか。それでここまでやってきたのではないかという。

記憶がないのも、ショックによる記憶喪失か。それとも操作されているか。分からないが、記憶がないというものの繋がりがあってはならないかという考えになった。

だが、一人として記憶を失っていることが嘘だと疑ったり、俺がその組織のスパイであるなどということは口にしなかった。

それだけで嬉しかった。

話した後、騎士は帰っていった。

それから俺は考えた。もしもそんな組織と繋がりがあったなら、ここにいることで二人に危険に晒されることがあるかもしれない。

なら……。

俺はこの家を出ていくことを決意した。

一応、この家を出た後の行くあてはさっきの騎士が用意してくれた。いや、というよりもその組織に逆に近づく方法だ。

危険が迫るなら、その危険に立ち向かえば良い。

騎士に紹介されたのは、その裏組織と専門に対峙する騎士団への紹介状だった。

第15話

【メタルハート

15話

騎士】

メタルハート 15

著者… p i r a f u d o r i a

作画… p i r a f u d o r i a

第15話

【メタルハート 15話 騎士】

翌朝、俺が家を出ようとするときよりも早く玄関には多く持つを持ったアイサがいた。

二人とも顔を合わせると。

「え……」

と間拔けな声を出した。

二人はお互いに指を差し合う。

そして同じように旅支度をしていることに気づいた。

「なんで……」

ロウが聞くと、アイサは答える。

「私が騎士になって、あなたがそうになった理由を突き止めて、そして元の身体にも出してあげる。だから待ってて」

アイサはそう言い行こうとするが、俺は止める。

「なんで、これは俺の問題だ。俺がいく」

そう、これは俺の問題なのだ。この家族を巻き込みたくはない。だから、俺一人で騎士になって原因を知るのだ。

しかし、アイサに振り払われる。

「私がいく」

「いいや、俺だ」

「私だ！」

「俺だ!!」

二人はどちらがいくかで喧嘩を始める。外はまだ朝早い。静かな森に二人の声が響く。

俺には二人を巻き込みたくない。だから、ここにいて欲しい。そう思って行動をしているのに、なぜなんだ。なぜなんだろう。

二人の口論は徐々に激しくなる。

そんな中、リビングの扉が開いた。

そこから現れたのは、アイサの父親だ。

父は二人に布に包まれた弁当箱を渡す。

「二人で行け」

「え？」

二人は再び間拔けな声を出した。

「二人ではどうしようもないことがある。そんな時、二人なら乗り越えられる」

父はそんなことを言って二人を一緒に外に出した。

「お前らは俺の大事な子供達だ。やることやって帰ってこいよ」

そして理解した。この人は俺たちを行かせようとしている。だが、心配していな

いわけではない。

我慢をしている。だが、それでも二人で生かせるべきだと考えて、このような行動をしたんだ。

なら、この人のためにも、

「分かりました。俺はアイサを守ります」

「分かった。私がロウを守る」

二人はそう伝え、王国へ向けて歩き出した。

その先にどんな困難があるかわからない。だが、きっとこの先に幸せがあると信じて。

「……………あ、着替えとか大丈夫か？」

「…………え」

見送ってくれたと思ったら、すぐに父は走って追いかけてきた。

「俺が見てないと心配だな。ほら、二人ともバックを見せろ」

この後、お節介で色々持たされて大荷物で王国に向かうことになった。

信用してくれてるんだか、それとも心配されてるんだか。でもそれでも、

二人は目的のために歩き出した。

第 16 話

【メタルハート

16 話

目の力】

メタルハート 16

著者… p i r a f u d o r i a
作画… p i r a f u d o r i a

第 16 話

【メタルハート 16 話 目の力】

ロウはフラフラした身体で立ち上がる。

アイサは立ち上がるロウの姿を見て驚いた。

猛獣のような唸り声をあげて、ロウはダードゥを睨みつけている。

アイサは俯した状態のまま、そんなロウの姿に違和感を覚えた。

ダードゥはロウを見て不思議そうな顔をする。

「ほお、生きていたか。しかし、なんだ、それは？」

ロウは短剣を持ちながら、両手をフラフラとぶら下げながら揺らした。そしてそのまま全身も揺れだす。

「何をしてるのかね？」

その姿はロウではなく。別もの。何か別の存在がロウの身体を動かしているような、そんな印象を受ける。

「まあ良い。次はしっかり仕留めてあげよう」

ダードゥは杖の仕込み刀を抜く。

すると、そんなダードゥに向かってロウが走り出した。

すごい速さだ。普段の数倍の速さ。そのスピードのまま、ダードゥを短剣で斬りつける。

ダードゥはカードをしようとするが、ロウの速さには追いつくことができず、腹に大きな傷を負ってしまう。

「ぐは……。なん……。だと、この私が……。何が起こったんだ」

ダードウはロウの突然の変化についていくことができないようだ。しかし、それはアイサも同じだ。

「このガキがああ!!」

ダードウはロウに向かって斬りかかる。一步踏み込むと、そこには剣の通った後の二本の線が一瞬映る。しかし、それは一瞬のことでアイサには一度の攻撃だったようにしか見えなかった。

だが、ロウはギリギリ後ろに下がりを避けたようで、大きくダメージを喰らった様子はない。だが、ロウの服には新しく2回分の切り傷がついている。

「……私の剣を躲したか」

先程まで怒っていたダードウであったが、ロウが一度離れたことで少し呼吸を整

える時間ができて、そこで冷静さを取り戻したようだ。

「倒れてからの覚醒。そこからの突然の進化。不思議な力だな、とても興味深い……だが、その力はなかなか危険だな。生捕は難しい」

ダードウは杖にある仕込み刀の刃を舐める。

「殺してから解剖するでしょう」

ダードウは本気だ。ダードウならそれを行うだけの实力がある。

アイサはロウに加勢しようと立ち上がろうとするが身体が動かない。

「ロウ!!」

アイサの声はロウには届いていないようで、ロウは敵のことしか見えていない。

ロウは再び両手をぶらりと下げる。

ダードウも杖を手に攻撃の構えを取った。

――

続く

第17話

【メタルハート

17話

狂気】

メタルハート
17

著者… p i r a f u d o r i a
作画… p i r a f u d o r i a

第17話

【メタルハート 17話 狂気】

ロウとダードゥは接近戦を行う。

どちらも攻撃を避けて攻撃を繰り返す。二人の武器は宙を舞い、何かに衝突することは決していない。

二人とも盾などの防御する道具は持っていない。それに軽装であり、一撃でも当たれば致命傷になる。

二人の持つ武器も耐久力はない。そのためお互いの武器をぶつけ合いことはせず、隙があれば武器を破壊しようと考えている。

武器が壊れるか、それとも攻撃が当たるか。それがこの戦いの決着になるだろう。

二人の戦闘は短いようで長い。一撃一撃に集中する戦いの中。一回の攻撃が何分もの時間にも感じる。

相手の攻撃を読み、相手の行動を理解する。この戦いの勝利はそこにある。

だが、この状況でアイサはロウの方が不利だと感じた。

それはいつもと様子の違う。ロウの様子である。戦い方は彼のままである。

戦闘時の癖やりズム。全てにおいて彼のままである。だが、違うのは中にいるのがロウではないという点だ。

戦っているのは、ロウであり、ロウではない。

何か別の存在がこの身体を守ろうと、ロウの身体を操作しているように感じる。

戦闘に関するセンスはロウ以上、だが、そこには信念がない。

ロウは今や戦闘をするだけの意思のない存在。

「ロウ!!」

その場で動くことのできないアイサはただロウの名前を叫ぶことしかできなかった

た。

俺はどこにいるのか。

気がつくところこそは真っ暗な何もない空間だった。

「……………ここは」

俺はあたりを見渡して、出口がないか探す。

しかし、出口は一向に見つからない。

「ここは一体……」

そうしていると、目の前に赤い目の何かが現れる。

それはモヤがかかったようにはっきりとは見ることができない。

だが、赤い真紅の目だけが、光っておりその姿を確認することができる。

「……………お前は……」

すると、赤い目の存在の後ろで何かが広がる。それはその存在の身体の一部。
翼だ。

赤い目に翼の生えた存在。

大きさは俺と大差ないだろう。形は分からない。人なのか、そうでないのか。

だが、赤い目と翼。それだけはなんとなく分かった。

その存在はしばらく俺のことを見つめると、空を見上げた。

俺も一緒になって空を見る。

すると、そこにはシャボンのようなものが飛んでおり、外の様子が映し出されている。

ダードゥと戦う俺、そしてその横で倒れるアイサの姿。

その存在は指を指す。まるで戻りたいか聞くように……

第18話

【メタルハート

18話

世界へ】

メタルハート 18

著者… p i r a f u d o r i a
作画… p i r a f u d o r i a

第18話

【メタルハート 18話 世界へ】

気づくと俺はダードゥと戦っていた。突然戦闘に放り込まれたことで動揺したが、どうにか立て直す。

ロウはダードゥの攻撃を避けると、距離を取った。

「ん、どうした。突然人が変わったように」

ダードゥは何か変化を感じ取ったようだ。しかし、その真相には辿り着いてはいない。

ロウはダードゥを無視して、アイサの方を向く。

「アイサ！ 無事か？」

アイサはそう聞かれて、ロウが戻ってきたことに安堵した。

「ええ、一応……ね。でも、加勢はできそうにない」

アイサはダードゥの攻撃を喰らったことで身体が動かない。

アイサの傷はかなり深い。一回の攻撃だったとはいえ、その一撃で身体がいうことを聞かなくなってしまった。

しかし、アイサはダードウの攻撃を喰らうほんの一瞬前に、その攻撃を見切り、少しだけ身を躲した。そのため、意識は保っている。

だが、油断をしてしまえば、すぐにでも気を失ってしまう。

ロウが頑張っている中、ここで気を失うわけにはいかない。

アイサは目の前が少しずつ暗くなる視界の中、それでもロウの戦いを見守っていた。

ロウは短剣を握った状態で警戒するように、ダードウと距離をとりながら、その

周りを右回転で回る。

それはダードウの力がまだ理解できていないからだ。

最初の一撃は気づいた時には斬られていた。

どんな攻撃なのか。

騎士に入隊仕立ての時、同じような技を使う生徒と戦ったことがある。

その彼もロウと同じく騎士見習いであったが、ロウは当時は彼になかなか勝つことができなかった。

その時に聞いた技。それが居合い。

剣を鞘にしまい構える。そして攻撃と同時に抜き、一撃で攻撃を終わらせる。

武器をしまっていることから、不利に見えてしまうこの技。しかし、その構えこそが速さを生む秘策であった。

ダードゥはそれと同じ技を使った。

杖の仕込み刀を一瞬のうちに抜き、それで二人を斬りつけた。

ダードゥの技は一流だ。それをロウに理解させる。それがあの技だった。

だが、ロウにはうっすらと覚えているが、別の戦闘も覚えている。

それは無意識のうちにダードゥと戦っている光景。

自分の身体が自分の身体でないかのように。夢の世界の動きのように。制御のできない身体が、勝手に戦っていた光景。

その光景を覚えていた。

そしてその時の戦闘はダードゥと互角。ロウはダードゥと互角に戦っていたのだ。

第 19 話

【メタルハート

19 話

居合い】

メタルハート 19

著者… p i r a f u d o r i a
作画… p i r a f u d o r i a

第 19 話

【メタルハート 19 話 居合い】

ロウはダードゥと戦っていた。それも互角に張り合っていたのだ。

ダードゥの最初の攻撃を喰らうまではロウは自分であると認識している。

杖の仕込み刀による居合いの攻撃を喰らった後、ロウは倒れた。

あの攻撃は確かにやばかった。死んでいてもおかしくない。いや、死んでいただろう攻撃だ。

しかし、すぐに痛みはなくなった。それどころか血も止まり、傷口は塞がっている。

そして何も分からない間に、ダードゥと戦っていた。なぜ、何が起きたのか。

だが、ダードゥの攻撃を避けられていたのは確かだ。居合いではないとはいえ、ダードゥの攻撃のスピードは凄まじいほど速い。

通常であれば剣の動きなど見ることができない。だが、ロウには見えていた。そしてそれを躲していた。

どうしてそんなことができたのか。何が起きていたのか。自分でも理解できていない。

しかし、ロウはその光景を思い出して、自分でもできるかもしれないと考えた。可能性はある。それは確かに自分の身体である。ダードゥと互角に戦っていた。剣の動き見えていたし、反撃もできていた。

違うのは誰が戦っていたかだ。だが、その存在は何者かわからない。それにまわせるわけにはいかない。

すぐ側には動けなくなったアイサがいる。彼女を巻き込むわけにはいかない。ならば、ここは自分の手で決着をつける。それも素早く。

ロウはさっきの光景を真似するように、身体の力を抜いてゆっくりとダードウに近づいてみる。

なんとなくさっきの感覚に近づくように、見様見真似でやってみる。

それを見たダードウも警戒する。

ゆっくりと歩き、ロウは間合いに入った。

それと同時にダードウの剣がロウに向かってくる。

見えている。先程の光景のように剣は見える。

だが、

ロウは身体は後ろに吹き飛んだ。

ダードウの剣は頭を掠った。ダードウの攻撃は見えたが、さっきのように接近戦での攻防戦はできなかった。ロウの判断が一瞬遅れてしまった。

だが、それでも遅れたが体もついてきた。だから、後ろに飛んで攻撃をギリギリで避けた。

顔には斜め線に傷がついている。

そこから血が垂れてきて口の中に入り、血の味がする。

さっきのように出血が止まることはない。

だが、見えはした。あとは感覚を掴むだけ……。

ロウは再びさっきの構えの真似をする。

何度でも何度でもやってやる。これがダードウに勝つことができる最善の手だ。

第20話

【メタルハート

20話

真似】

メタルハート 20

著者…pirafudoria
作画…pirafudoria

第20話

【メタルハート 20話 真似】

ロウは体の力を抜き、再びダードゥに向かって歩みを進めた。

一回目は剣は見えていたが、少しビビってしまったことで後ろに下がってしまった。それにより反撃をすることができなかった。

ならば、今度は……

「まだやるのか？ 何度やっても同じことだ」

再び間合いに入る。ダードウの攻撃はロウに襲いかかる。

だが、今度はロウは退かなかった。ロウの取った行動は、

前に出たのである!!

ダードウの攻撃が見えたロウにはどこが危険でどこが安全かそれが見えている。危険なのはダードウの刃が届く範囲。そして安全なのはダードウの攻撃が届かない範囲。

その安全地帯は離れた場所だけではない。ダードウに最も近い場所。そう、さら

にもう一步踏み込むことでロウは安全地帯に踏み込んだ。

「……っ」

ロウはダードウの攻撃を躲すと、そのまま短剣で攻撃に出る。だが、大振りではなく、急所だけを狙うように素早くすぐに動きを切り替えられるように攻撃した。

だが、それでもダードウは倒せない。ダードウもロウの攻撃を避ける。

ダードウもロウと同様にさらに一步踏み込んで攻撃を躲す。そして反撃をする。

これでロウの中にある。自分でない自分が戦っていたシーンと同様の攻防戦がで
きる。

だが、これでは互角だ。ダードウを倒すことはできない。だからここで行動に出

る必要がある。

攻防戦が繰り広げられる途中で、ロウは行動に出た。

ロウはダードウの攻撃を避けたタイミングで、ロウはダードウに攻撃を仕掛けるのではなく、ダードウの目の前で天高く剣を上放り投げた。

短剣は宙を舞い回転する。

ダードウは一瞬だけその剣に気を取られてしまった。

すぐにこれは罠だと気づいた時、すでに遅かった。

ロウはダードウの顔に向かって手のひらを向けている。そしてニヤリと笑うと、そこには魔法陣が展開されていた。

「俺、騎士より魔法使いの方が向いてるって先生に言われてたんだよ」

次の瞬間、ダードウの視界は閃光で真っ白になる。

何も見えない。目眩し……。

だが、ダードウはかなりの戦闘を切り抜けてきた感がある。視界を奪われた程度では動揺しない。

ダードウは視界が使えないのならば、他の感覚を頼りにする。嗅覚、感覚。

そこからロウの行動を予測して、それに合わせてカウンターをする。

宙を舞う剣。

それは地上に向かって降りてくる。

その剣は目の前で止まる。誰かが取った。それは目の前にいる少年。

なら、その剣を使い、反撃してくる。それに合わせて、カウンターを!!

第21話

【メタルハート

21話

協力】

メタルハート 21

著者… p i r a f u d o r i a
作画… p i r a f u d o r i a

第21話

【メタルハート 21話 協力】

ダードウはロウによる魔法で視界を奪われた。

その魔法は洞窟探索の時や街の街灯などで使われている光の魔法を強化したものだろう。

目が治るまではほんの数秒かかる。

ロウの狙いは視界を奪い奇襲をすること。だが、ダードゥは何度の命を狙われてきた。その度に戦闘をして生き残ってきたのだ。

視界を奪われた程度では負けない。

他の感覚を頼りに、ロウの攻撃を予測する。そして先ほど投げられた剣が目の前で止まった。

つまりそこに少年がいる。そしてそこから反撃をしてくる!!

ダードゥは前にロウがいますと予想してカウンターをしようとする。だが!!

後ろからも足音？

前後の両方から気配がする。

だが、ダードゥはすでにカウンターのつもりで前方に攻撃をしてしまう。

ダードゥの攻撃は当たった。前にロウはいたのだ。

だが、ダードゥの攻撃はロウに一瞬掠るが、

後ろから奇襲を仕掛けていたアイサの攻撃を受けたことにより、途中で力が抜けてしまい、ロウにダメージを負わせることができなかった。

ダードゥはそのまま倒れる。

「な、なぜだ。さっきまで動けていなかったはず……」

ダードゥは倒れた状態でアイサの方を見る。

アイサは完璧とはいえないが、少しだけ傷が治っていた。

不思議そうなダードゥにロウが答える。

「俺の魔法だ。俺の魔法でアイサの傷を塞いだ」

ロウはダードゥと戦っている間に魔法計算を行い、アイサの傷を癒していたのだ。

「あの間に……か」

ダードゥは悔しそうに言った。

「俺も歳を取った。そんなことにも気づかないとはな……」

「さあ、ダードウ、あなたを王国に連行する」

アイサはそう言い、ダードウを縄で縛ろうとするが、アイサの身体はぶらりとふらつく。

それを咄嗟にロウが支えた。

「俺の魔法は応急処置だ。無理はするな。あとは俺がやる」

ロウはそう言うと、アイサを休ませてダードウを縄で縛る。

ダードウは諦めたのか大人しくロウに縛られる。

そんな中、ダードゥはロウの顔を見て、髪に隠れた左目を見つけた。

「紅瞳……」

それにいち早く反応したのはアイサだった。

「何か知ってるの!？」

ダードゥは縄に縛られながら答えた。

「ああ、噂程度だな」

「なんでも良い。手がかりを探してるの」

ダードゥはしばらく考える。そして、

「俺は商人だ。客については教えない。だが、君たちは俺を倒した。だから、それを代金として、情報を提供しよう」

第22話

【メタルハート

22話

情報】

メタルハート 22

著者…pirafudoria
作画…pirafudoria

第22話

【メタルハート 22話 情報】

王国に存在する裏組織。その中の一つにモンスターの実験をする組織があると言
う。

我々人類にはモンスターは手懐けることはできない。モンスターは生き物ではな

く物質である。魔素の集合体が周囲の動物を再現し、形を成したものの。それがモンスターだ。

そのためモンスターを戦力にしようとしてもそれは不可能である。

それにモンスターを捕らえたとしても、魔素を得ることができなければ衰弱し、魔素に戻ってしまう。

だが、モンスターではなく、モンスターになった人間ならどうだろうか。

人間にとっては魔素は有害な毒である。

自然界では植物が魔素を吸収して成長する。その植物を動物や動物が食べる。そしてその動物が魔力を持つ。その動物が魔法を使うことで魔素が発生する。その巡回がこの世界の基本である。

だが、魔素は一定以上を超えると、動物にとっては毒となり、体に害を与える。そのうちの一つの症状が、身体がモンスターのようになるというものである。

事例としては、大量の魔素を浴びた人間が、骨だけの人間になってしまったり、鱗のある魚人になってしまったり、いくつかの存在する。

それは人間にとって悪い状態であり、健康の害となる状態だ。

しかし、モンスターの身体というものは通常の人間よりも優れた点もあり、耐久性、持久性、破壊力、多くの点で強力な武器となる。

それを人工的に作り出そうとしたのが、神聖（サクレ）と呼ばれる組織である。

サクレは各地から子供を攫ってきて、実験材料とした。

大量の魔素を浴びさせて、副作用を起こさせて、それによる効果を試したのだ。

多くの者は死んでしまう。しかし、そんな中で奇跡的に生き残った者はモンスター。その力を手に入れた。

モンスターの身体は強力な力となり、その者たちはその力を得ただけで一流の武器として売りに出された。

ある者は暗殺を行い、ある者は闇組織の護衛を行い、ある者はテロの道具として、購入者次第でその人物に対する対応は違うが、ほとんどのものが使い捨てと考えていただろう。

そして組織はさらに強力な兵士を作ろうと、研究を続けた。さらに上位のモンスターの能力を人間に宿す。実験の成功率は下がったが、適合者は一人で人部隊の戦力となるほどの実力となる。

それだけ強力な力。

ダードゥは言う。そのサクレはある時、世界で最も危険とされるモンスターとの適合者を見つけた。

それは暗黒龍（ダークドラゴン）。

第23話

【メタルハート

23話

ドラゴン】

メタルハート 23

著者…pirafudoria
作画…pirafudoria

第23話

【メタルハート 23話 ドラゴン】

「俺もその適合者を見たわけじゃない。だが、そいつが脱走したというのと……
ダークドラゴンの特徴である紅瞳……そこからその可能性がある」

ダードゥの話聞いたロウは左目に髪の上から手を当てる。

それを見たダードゥは言う。

「復讐とかを考えてるのか。なら残念だがそれはできない」

「なぜだ？」

「奴らはすでに王国の騎士によって捕まっている。モンスターにされた子供たちも保護されているはずだ」

「そうか。でも俺たち目的は復讐ってわけじゃない……」

その後、ロウたちは騎士の応援を呼び、無事にダードゥたちを捕らえた。

ダードゥたちは王国にある監獄に投獄されることになった。

ロウの傷はほとんど治っていたが、アイサは応急処置をただけだったので王国の病院に入院することになった。

ロウと応急処置により、命の危険もなく。傷も目立つところには残らないようだ。数ヶ月もすれば退院できるだろう。

ロウはアイサの病室に果物を持ってお見舞いに行く。

病室は個室であり、広い部屋に大きなベッドが置かれている。

ロウが入ると、アイサは窓を開けて外を見ていた。

窓の外はオーボエ王国の特徴的な笛のような建物が並んでいる。

病室はかなりの高い場所であり、病室には風が入ってくる。

「ねえロウ……」

「なんだ？」

アイサはロウの方を向かずに聞く。

「サクレの幹部は牢獄に捕らえられてるらしいよ。事情を話せば、対話させてもらえるんじゃない？」

「そうだなあゝでも………お前が退院してからだな」

そうだ。二人が騎士になったのは復讐のためじゃない。

元の身体になるためだ。

だが、ずっと二人でやってきたことだ。ここまで来たら一人で先には進まない。

「何事も二人でいた方が、解決の手段を見つけられるかもしれない。俺たちは二人で一人だ」

「ええ、そうね。なら早く傷を治さない」と

||||||||||||||||||||||||||||||||

ということ、今回のメタルハートはここで終わりたいと思います。

今回のエピソードはダードウを捕らえる話。そして二人の出会いの話でした。メタルハートは本編にどのような関わってくるのか。

そして今後どうなるのか。お楽しみに!!

そしてもしかしたら続きがあったりするかも？

今回の話だけではなく、別の形でもこの二人のエピソードを書くことがあるかものです。その時もよろしくお願いします。

今後もしろんな外伝も書いていくので、よろしくです!!

第1話

【ダズのダイエット 其の1】

せかへい 外伝10

著者…pirafudoria

作画…pirafudoria

第1話

【ダズのダイエット 其の1】

冒険者であるダズ・ボーラル。新人冒険者としてガーラの後ろをリトライダー、ミエと共に追いかけている。

ダズの体型はぽっちゃりである。全てが脂肪ということではないが、お腹がぽっ

こりと出ていた。

「なあ、ダズ……お前、最近太ったか？」

リトライダー、ミエ、ダズの三人で宿の一階にある食堂で食事をしていると、リトライダーがそんなことを言ってきた。

「そんなことないっすよ」

ダズは手を振って否定するが、ミエは蕎麦を啜りながらダズの方を見る。

「いや、たしかに太ったみたいね」

「いやいや、いつも通りっすよ」

「じゃあ、そのメニューは何？」

ミエは蕎麦。リトライダーは定食。

それに比べて、ダズはうどんの大盛りに天ぷらとコロッケ。横にはリトライダーと同じ定食を食べている。

さらに食後にはいつもデザートを頼む。

「流石にそれは食べ過ぎよ」

「……………」

自分のメニューと二人のメニューを見比べたダズは、その量の違いを理解した。だが、腹が減ってしまっているものはしょうがない。しかし、このまま太り続ければ、冒険者としての職業にも支障が出るだろう。

「よし！ 決めた!! 俺ダイエットするっす!!」

こうしてダズのダイエット計画が始まった。

まずは食事から見直す。

普段は三食全てを腹一杯食べていたが、腹八分目で終わらせるようにする。

それも食事の前にはサラダを食べるようにして、腹を満たすようにしてから食事をする。

食事も好きなものを食べるようにするのではなく、栄養バランスを考えたものを食べるようにした。

運動も欠かさず行うようにして、朝起きたら村を一周まわるようにして、少しでも運動をするように。

仕事も冒険者であり、身体を動かすものであるため、疲れすぎない程度に適度に休憩をしながらランニングを続ける。

外に出る時はリトライダーかミエが付き添い、何か誘惑に負けて食べてしまわないように、工夫をした。

そして一ヶ月経ち、ダズの体型は変化して、今ではリトライダーと同じくらいに痩せて、筋肉もついているのでかなりの筋肉マッちょになった。

「やったね！」

三人は喜んだ。

そしてその晩、お祝いパーティーを開くことにした。

そうして数日後には二人の体型は元の体型と同じものになっていた。

――――――――――

ダイエットって難しいですね。

無理せず続けられるものをやるのが一番ですね！

第1話 【慎重者の進捗日記 其の1】

せかへい 外伝 11

著者… p i r a f u d o r i a
作画… p i r a f u d o r i a

第1話

【慎重者の進捗日記 其の1】

村一番の慎重者、ルンバ。彼の慎重さは異常である。

石の橋であっても渡る時には必ず叩く。新品の本を買うときでも必ずページ抜けや汚れがないか確認する。自分で作った食べ物であっても必ず毒味をする。

それがこのルンバという男だ。

彼の一日の始まりは朝起きて、時間を確認することから始まる。部屋には魔道具である目覚まし時計が三つほど置かれているが、それが鳴る5分前に起きて全ての目覚ましを止める。

布団から降りる時は部屋の床が抜けないか、確認してから布団から降りる。

朝食は自分で作るが、全て製造元がわかるものであり、袋で舗装されているものを使う。

作り終わった朝食は毒が入っていないか、魔法で確認してから食べることにしている。

調理で使った火は、絶対にしっかり消えたのを確認してから、離れるようにして

いる。

家の鍵は三重ロックであり、玄関だけでなく窓も厳重に閉められている。

ルンバの仕事は村の警備である。門の周囲を見張り、外にモンスターがいないかを確認する。それと外から入ってくる者の身元を確認する仕事も行う。

仕事で使う槍は使うことがなければ、布に包み危険のないようにしている。しかし、何があっても持ち運ぶようにしており、危険があればすぐに対応できるように準備している。

昼ごはんは村のお弁当屋で買ったものが上司であるマティルから渡された。ルンバはそれを全て調べてから食べた。

何事もなく仕事を終えると帰宅する。帰っている途中で銭湯により汗を流す。

使う石鹼は自分で持ってきたものだ。銭湯に常備されているものは使わない。

風呂から出たら、自分で持ってきた牛乳を飲む。そこで売られている牛乳は買わず。自前のものだけで済ます。

帰宅すると、夕食を食べる。夕食も自分で作り、全て毒がないか、確認してから食べる。

そのため、家族の中で一番遅く食べ終わる。

最後に食べ終わったものが片付けをするというルールなので、食器洗いは毎日洗っている。

夕食を食べ終わると、今日の仕事の内容に日記に記す。ノートには誰とどのような内容を何時ごろ話したのか。細かいところまで全ての情報を書く。

書き終えたルンバは寝る準備をする。寝巻きに着替えて、布団が抜けて地面に落ちないか、確認してから寝っ転がった。

1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36
37
38
39
40
41
42
43
44
45
46
47
48
49
50
51
52
53
54
55
56
57
58
59
60
61
62
63
64
65
66
67
68
69
70
71
72
73
74
75
76
77
78
79
80
81
82
83
84
85
86
87
88
89
90
91
92
93
94
95
96
97
98
99
100
101
102
103
104
105
106
107
108
109
110
111
112
113
114
115
116
117
118
119
120
121
122
123
124
125
126
127
128
129
130
131
132
133
134
135
136
137
138
139
140
141
142
143
144
145
146
147
148
149
150
151
152
153
154
155
156
157
158
159
160
161
162
163
164
165
166
167
168
169
170
171
172
173
174
175
176
177
178
179
180
181
182
183
184
185
186
187
188
189
190
191
192
193
194
195
196
197
198
199
200
201
202
203
204
205
206
207
208
209
210
211
212
213
214
215
216
217
218
219
220
221
222
223
224
225
226
227
228
229
230
231
232
233
234
235
236
237
238
239
240
241
242
243
244
245
246
247
248
249
250
251
252
253
254
255
256
257
258
259
260
261
262
263
264
265
266
267
268
269
270
271
272
273
274
275
276
277
278
279
280
281
282
283
284
285
286
287
288
289
290
291
292
293
294
295
296
297
298
299
300
301
302
303
304
305
306
307
308
309
310
311
312
313
314
315
316
317
318
319
320
321
322
323
324
325
326
327
328
329
330
331
332
333
334
335
336
337
338
339
340
341
342
343
344
345
346
347
348
349
350
351
352
353
354
355
356
357
358
359
360
361
362
363
364
365
366
367
368
369
370
371
372
373
374
375
376
377
378
379
380
381
382
383
384
385
386
387
388
389
390
391
392
393
394
395
396
397
398
399
400
401
402
403
404
405
406
407
408
409
410
411
412
413
414
415
416
417
418
419
420
421
422
423
424
425
426
427
428
429
430
431
432
433
434
435
436
437
438
439
440
441
442
443
444
445
446
447
448
449
450
451
452
453
454
455
456
457
458
459
460
461
462
463
464
465
466
467
468
469
470
471
472
473
474
475
476
477
478
479
480
481
482
483
484
485
486
487
488
489
490
491
492
493
494
495
496
497
498
499
500
501
502
503
504
505
506
507
508
509
510
511
512
513
514
515
516
517
518
519
520
521
522
523
524
525
526
527
528
529
530
531
532
533
534
535
536
537
538
539
540
541
542
543
544
545
546
547
548
549
550
551
552
553
554
555
556
557
558
559
560
561
562
563
564
565
566
567
568
569
570
571
572
573
574
575
576
577
578
579
580
581
582
583
584
585
586
587
588
589
590
591
592
593
594
595
596
597
598
599
600
601
602
603
604
605
606
607
608
609
610
611
612
613
614
615
616
617
618
619
620
621
622
623
624
625
626
627
628
629
630
631
632
633
634
635
636
637
638
639
640
641
642
643
644
645
646
647
648
649
650
651
652
653
654
655
656
657
658
659
660
661
662
663
664
665
666
667
668
669
670
671
672
673
674
675
676
677
678
679
680
681
682
683
684
685
686
687
688
689
690
691
692
693
694
695
696
697
698
699
700
701
702
703
704
705
706
707
708
709
710
711
712
713
714
715
716
717
718
719
720
721
722
723
724
725
726
727
728
729
730
731
732
733
734
735
736
737
738
739
740
741
742
743
744
745
746
747
748
749
750
751
752
753
754
755
756
757
758
759
760
761
762
763
764
765
766
767
768
769
770
771
772
773
774
775
776
777
778
779
780
781
782
783
784
785
786
787
788
789
790
791
792
793
794
795
796
797
798
799
800
801
802
803
804
805
806
807
808
809
810
811
812
813
814
815
816
817
818
819
820
821
822
823
824
825
826
827
828
829
830
831
832
833
834
835
836
837
838
839
840
84

今回は村人の一人であるルンバというキャラの話を書きました。

第1話 【村の三人の少年 其の1】

せかへい 外伝12

著者…pirafudoria
作画…pirafudoria

第1話

【村の三人の少年 其の1】

サージュ村。そこにある一軒の家に二人の人物が集まっていた。

「おい、パト、いるか？」

エスとルンバである。呼ばれたパトは扉を開けて出てくる。

「どうしたんだ？ 今日の仕事じゃなかったのか？」

パトがそう言うのと、エスは首を振る。

「いやな、それがマティルさんが仕事の配分を間違えてたみたいで、俺たち今日休みになったんだ」

エスとルンバは門番の仕事をしている。しかし、今回は急遽休みになってしまったようだ。だが、やることもないので今日は休日だったはずのパトのところに遊びに来たのだ。

「つで、お前も休みだろ。せっかくだから訓練一緒にやらないか？」

エスはそう言って、槍を持ち上げる。

訓練とは槍などの武器の特訓だ。二人は門番として村の防衛の仕事をしている。そのため時間がある時にはこうして戦闘の練習をしているのだ。

パトもガオに体術から武器の使用まで様々なことを教わっており、戦闘能力では二人と互角くらいの力はある。

そのため練習相手として誘いに來たのだ。

「おう良いぜ!!」

こうして三人は特訓を行うことになった。

特訓に使うのは村の東側にある草原だ。

村の防壁の外ではあるが、結界もすぐに近くにあるためモンスターは寄ってこな

い。それに結界にびびらないモンスターであったとしても、村まで逃げればどうにかなる。

まあ、こちらには武器もあるし、三人がかりで戦えばある程度のモンスターには対応できる。

まずは基礎的な運動から始める。三人は掛け声を出しながら、草原を走る。

「よし、誰が早く十周できるか勝負しようぜ」

走っている途中でエスがそんな提案をしてくる。

「お、たのしそうだな。やるか！」

パトはそう答える。

「俺も良いぜ」

ルンバも賛同した。

「よし、じゃあスタートだ!!」

エスがスピードを上げる。最初から二人との差を開く作戦のようだ。

「ははは〜！これでどうだああ、はあああ」

エスが自信満々に後ろを振り向く。

しかし、

「負けるかー!!」

パトが踏ん張ってついてきていた。

「なにい!？」

二人は負けまいと全力で走る。しかし、五周したところで体力に限界が来てしまい、二人はヘトヘトになってしまう。

そんな二人をルンバはあっさりと抜かした。

「な!？」

二人はルンバを抜かし返そうとするが、ルンバはペースを乱さず走り続ける。

そしてこの勝負に勝ったのはルンバだった。

「負けたー」

「勝った」

ルンバはドヤ顔していた。

第2話 【村の三人の少年 其の2】

せかへい 外伝12

著者…pirafudoria
作画…pirafudoria

第2話

【村の三人の少年 其の2】

ランニングを終えたパト達は今度はストレッチを始める。筋肉をほぐして、身体を痛めることがないようにする。

「あ、そうだルンバ後ろから押してくれ」

前屈をしている最中に、エスがルンバに後ろから押すように頼む。

ルンバはやりすぎないようにでも、なるべく力を入れて押す。

「いててててて」

エスは口では痛がつているが、まだ大丈夫そうだ。

ルンバはもう少し力を入れて押してみる。

「あ、良い!! もっと!! もっとおお!!」

ルンバは気持ち悪くて、押すのをやめた。

準備運動を終えた三人は今度は武器を使っても素振り始める。

門番が基本的に使うのは槍だ。そのため三人とも今回は槍の訓練をする。

槍での突きの練習などいくつか終わった後、三人は模擬戦を行うことにした。

ルールは簡単だ。槍を使って戦う。相手を傷つけることはなく、ギリギリのところで槍を止める。

一応先端が尖っていないものを使うが、怪我には気をつけて、それでも実戦に近い形で練習をする。

まずは最初に、ルンバとエスが戦う。

「では始め!!」

パトの合図で二人の戦闘が始まる。

ルンバは一步後ろに退いて様子見を行う体制だ。逆にエスは真正面から突っ込む。

エスはルンバに何度も突きの攻撃を仕掛けるが、ルンバは上手くそれを防ぐ。

エスは瞬発力があり、勢いで攻めるのを得意とする。三人の中では一番運動能力も高い。戦闘のセンスも一番高いだろう。

しかし、攻め方が単純だ。

ルンバは分析能力に長けている。エスのような特攻力はないが、距離をとって攻め方を探る。

相手の癖や行動パターンを分析する。さらにその日の体調や疲れも読み取り、同じ人物でもその状況にあった攻略法を見つける。

そのためルンバは何度も練習しているエスであっても、分析する時間が必要となる。だが、相手のペースを掴めば、ルンバの方が有利となる。

エスは短期決戦を狙い、ルンバは情報を読み取ってからの反撃を狙う。

時間を稼ぐことができれば、ルンバの勝利となる。だが、ルンバの防御をエスは無理矢理突破した!!

「勝負有り!!」

エスの勝利である。あとほんの数秒だっただろう。しかし、今回はエスが勝利した。

「よし、じゃあ、次はパト、やろうぜ。このまま連勝してやる」

エスはルンバに勝ったことで調子付いてパトに連戦を申し込む。

「ほう、良いだろう」

パトはその勝負を受けた。

第3話

【村の三人の少年 其の3】

せかへい 外伝12

著者…pirafudoria
作画…pirafudoria

第3話

【村の三人の少年 其の3】

次はパトとエスの練習試合である。

パトは武器や武術の技量は二人よりも多い。扱える武器の多さもあれば、それ地
形に合わせた戦い方も習っている。

技術的な面を見れば、パトは二人に圧勝できる。しかし、

「試合開始!!」

開始と同時にエスは突っ込む。ルンバの時と同じような戦い方だ。

エスはルンバとパトの二人よりも運動能力が高く、それに戦闘における感も優れている。

師匠であるマティルに教えられたのは、自分を信じて突っ込め！という戦い方である。エスの感は騎士にも匹敵するほどであり、その感を活かせば、不意打ちにも対応できると教えられた。

突っ込んでくるエスに対して、パトは槍を深く構えた。

真正面から正直に突っ込んでくるなら、それにカウンターを合わせるのみ。しかし、ルンバのように相手を観察する力はパトにはない。

狙うのは初段を避けてからのカウンター。

つまりはこの攻撃に成功するかどうかパトの勝敗になる。

エスが間合いに入る。

エスの突き攻撃を避けて、パトは反撃しようとするが、エスはそれを予期してきたように躲されてしまった。

そしてパトの攻撃は当たらず、エスの次の攻撃でパトは負けた。

「勝負アリ！」

パトとエスは武器を置く。

「よし、俺の勝ちだな!!」

エスは嬉しそうにはしゃぐ。

そんな中、ルンバがパトに教える。

「パトは臨機応変に対応できないんだよ。作戦を立てるとそのようにしか動けない。それが通用しなくてもその場に応じて行動しないと」

「うーん、それは分かってるんだけどなあ、なかなかそれができないんだ」

パトと二人の違いは実戦の差である。パトは父親の村長の仕事を手伝っている。そのため村の中でも問題を解決したり、事務作業を行ったりが中心だ。

それに対して、門番として仕事をしている二人は、村に近づいたモンスターの退治も行うことがある。

そういう点でパトにはない応用力が二人にはあるのだ。

「よし、じゃあ、次は俺とやろう！」

ルンバは槍を持って立ち上がる。そしてパトに近づくとパトを立たせて、パトの槍に槍を持たせた。

今のところエスが一番で勝ち越している。だが、ここで負ければ、最下位が決まってしまう。

「おう、じゃあ、早速やるか!!」

パトは槍を受け取ると、ルンバと距離をとってください構えた。

ルンバも後ろに少し下がって、ちょうど良い距離に行くと、槍を構えて準備を始めた。

エスは槍を置いて地面に座ると、手を叩いた。

「開始!!」

第4話 【村の三人の少年 其の4】

せかへい 外伝12

著者… p i r a f u d o r i a
作画… p i r a f u d o r i a

第4話

【村の三人の少年 其の4】

エスの開始の合図と共にパトはルンバに近づく。

しかし、すぐに攻撃するわけではなく、相手の行動を待つように止まった。

パトにはエスのような特攻力はない。そのため防御力に特化したルンバの防御を簡単には破ることはできない。

だから、作戦を変えた。

パトが取ったのは行動はルンバに攻めさせるというもの。

ルンバは防御に徹する方が得意だ。そこからのカウンターがメインの攻撃となる。なら逆にルンバから攻めさせれば、ルンバに動きを読まれることはないのではないか。そう考えた。

しかし、ルンバはパトが間合いに入ってくると、迷うことなく攻撃してきた。

パトはどうにか避ける。しかし、何発か攻撃されているうちに反撃する暇もなく、ルンバに押し負けてしまった。

「勝負アリ!!」

エスが試合を止める。

「お疲れ様ー!」

ルンバは勝てたことに満足そうに武器を持って一礼した。

パトも真似をして一礼する。そのあと、エスがパトに話しかける。

「ルンバにカウンターを狙おうとしたなあ」

パトの作戦はバレていたようだ。

「ルンバは攻めさせた方が強いんだ。相手の避け方とか守り方をすぐに覚える。ルンバと模擬戦するときには攻めたほうがいいんだよ」

そう言われてパトも思い出す。しばらく二人とこうやって練習することがなかったから忘れていたが、ルンバはペースに乗せると一気に強くなる。

それはその相手の動きを理解する力に長けているからだ。

「でもパトも悪くなかったけどね」

ルンバは武器を置くと、パトの肩を叩いた。

「しばらく練習できてなかったんだろ。総合力でいえばパトの方が上だよ」

「そうか？」

パトは疑問そうに聞く。

エスが続ける。

「お前は相手によって対策を変えられるだろ。そいつに合わせて嫌な戦い方ができる。ルンバと同じように分析して戦えるんだ。うまく活かせば強いぞ」

エスはそう言うのと、槍を手にとって立ち上がる。

「よし、じゃあ、続きをやろうぜ!! ルンバ、もう一戦だ!」

エスに言われてルンバも槍を手にした。

「おう! 今度は勝ってやる!」

こうして三人はしばらく練習を続けた。満足するまで練習をした彼らは銭湯に立ち寄って、汗を流してからそれぞれの家へと帰宅したのであった。

――――

パト VS エス パト一勝。エス三勝。

パト VS ルンバ パト二勝。ルンバ一勝。

エス VS ルンバ エス二勝。ルンバ二勝。

第1話 【村の井戸に住むもの 其の1】

せかへい 外伝13

著者… p i r a f u d o r i a

作画… p i r a f u d o r i a

第1話

【村の井戸に住むもの 其の1】

サージュ村にある井戸。今は丘の上にある井戸が使われているが、その前は村の中心にある井戸が使われていた。

しかし、ある時からその井戸は使われなくなった。

それは単純で水が出なくなったというものである。しかし、水が出なくなった理由がわからない。

今まで水が出なくなるということはなかったし、そのようになる状況でもなかった。

雨も定期的に降っていたし、何か変化があったわけではない。それなのに水が出なくなったのだ。

……いや、何もおかしいことがなかったわけではない。そういえば、一つだけ不思議なことがあった。

それは井戸の中から不思議な声が聞こえて来るといふもの。

その声は「……………黒……………黒」と井戸のそこから聞こえてくるという。一時

期はそれで怪談話が作られるレベルである。

その声を聞いたというものは、村人の中に結構いる。

それは空気の音じゃないかという結果になったが、その正体はわからないままだ。

謎の事件となった。

ある時、一人の村人が井戸の底を調査すると言って、下に降りたことがある。

その村人が底にたどり着くと、水は無くなっていた。

濡れた地面と暗い空間。

しかし、その村人は何もに見られている気配を感じたと言った。だが、辺りを見渡してもそこには誰もいなかった。

今では村の井戸は移動されて、別のところにある井戸が使われている。今まで使われていた井戸は残っているが、使われていない。

形としては残っており、井戸の穴も空いた状態である。しかし、うっかり誰かが落ちたりすることがないように、井戸には蓋をしており、危険なので近づかないように柵も作ってある。

今でもこの井戸を復旧できないかと、村長や村の住民は様々な手段で井戸の復旧を行なったがどれもうまくいかなかった。

まるでこの井戸が呪われているかのように、この井戸を使わせないと何かの力が働いているように、この井戸は人を拒んだ。

しばらく時間が経ち、いつしかこの井戸はただの村の置物のようになった。復旧

の方法がないか、それを考えているため残して入るが今のところは誰も使うことはない。

だが、不思議な井戸だ。何かが潜んでいるように気配を感じる。そしてその先はどこかにつながっているように不思議な風が吹き出している。

この井戸には何か、変わった力があるのかもしれない。またはこの井戸には不思議な力を持った何者かが住み着いているのかもしれない。

第1話 【雪の降る村 其の1】

せかへい 外伝14

著者… p i r a f u d o r i a
作画… p i r a f u d o r i a

第1話

【雪の降る村 其の1】

今年も冬の季節がやってきた。サージュ村では冬を越すために王国に買い出しに行き、魔道具や食料の買い出しに行く。

冬は他の季節よりも買い溜めておくものが多い。

その理由は雪の影響である。

サージュ村からオーボエ王国へと向かうルートでは積雪になることがある。その場合馬車での移動が困難になり、雪が降ってしまうと買い出しに行けなくなるのだ。

そのためもしも買い出しに行けなかったとしても、その間は問題がないように多めに買い揃えておく必要があるのだ。

また冬の間は村では作物が取れない。冬に育つ野菜も育てているが、天候次第では作物がやられてしまう場合もある。

そのためオーボエ王国で売られている保存に適した食力を買って溜めしておくのだ。魔法により保存期間が伸びるようにされているものもあるので、これらを使い冬を越すのだ。

食料の他には魔道具も購入する。冬の寒さを凌ぐために部屋の温度を暖かくすることができる魔道具や、氷を溶かすことができる魔道具。

冬を凌ぐための魔道具を購入する。

その他には衣類や日用品なども買い貯めておく。これらを買っておくことが、冬を越えるためには必要な道具となるのだ。

普段よりも多くのものを買うため、馬車も多く出すことになる。少ない時では一台。基本は二台の馬車で買い出しに行くのだが、冬は基本的に三台になる。

買える時に買い溜めておく。それが重要なのだ。

それに村で撮れたものを売りに行くというのものもある。秋に収穫したものを大量に売りに行くのだ。

作物や衣類、サージュ村での生産品を売りに行く。

サージュ村はギルドなどがあるわけではないので、冒険者のような旅人が来るのは少ない。

そのため、この売り出しが村の重要な収入源となるのだ。

大陸には様々な場所がある。サージュ村のように季節の変化がある場所や、山奥や砂漠などでは一定の気候が続く場所もある。

その場所に適した暮らしを人々はしているのである。

冬はかなり厳しい季節である。野生の動物も工夫をして冬を越す。

他の季節であっても野生の動物は群れを作り、生活している。それはモンスターから身を守るためである。

しかし、冬であってもモンスターは現れる。そのためモンスターは野生動物は脅威である。

野生の動物がモンスターから身を守る方法は群れで行動している。

冬には逃げ場が少なかったりすることから、モンスターの被害が多かったりする。

――

今回は冬の話にしました。

第1話

【ベアウルフ討伐イベント 其の1】

せかへい 外伝15

著者… p i r a f u d o r i a
作画… p i r a f u d o r i a

第1話

【ベアウルフ討伐イベント 其の1】

ある村にあるギルド。そこにリトライダーとミエ、そしてダズの三人が来ていた。

「あれ？ ガーラ師匠はまだ来てないの？」

ミエはギルドを見渡してガーラがいないか確認する。ギルドには受付と依頼が貼られている掲示板がある。それと奥には酒場になっているスペースがあり、昼間だというのに多くの冒険者が集まって、騒いでいた。

酒場では次のクエストの相談をして集まっている冒険者やクエストを終えたあとなのか酒を飲みながら遊び騒いでいる冒険者。多くの冒険者がいる。

ここのギルドは彼らが知っているギルドの中でも出会いギルドであり、ここまで大きなギルドに来るのは久しぶりである。

リトライダー達はガーラが来ていないので、酒場で軽い飯を食べながらガーラを待つことにした。

リトライダーは酒場の店員にポテトフライを頼む。

リトライダー達が座っているのは、ギルドの入り口が見える場所で、ガーラが来てもすぐにわかるような席に座った。

しばらくして注文していたポテトフライが届く。

ポテトフライは皿に乗せられており、山盛りになっている。ポテトフライは二センチ程度の棒状のもので塩がたっぷりとかかっている。

場所によって味付けが濃い場所と薄い場所に別れている。

「おー、美味しいな」

リトライダーはポテトフライをつまみながら言う。

「てか、ガーラ師匠なんで今日遅れてるんだろう」

ミエがそう言って首を傾げる。それに対してダズがリトライダーを見ながら言う。

「腹痛いのかな」

「俺を見ながら言うな」

リトライダーはクエストを受ける前に腹痛を起こして、クエストに支障をきたしたことがあった。

そんなことをダズは言ったのだろう。

そんな感じで時間が経過して、しばらくギルドで待っていると、やがてガーラがやってきた。

ガーラの顔は青く体調が悪そうだ。咳もしている。風邪だろうか。

「すまん。待たせて……………体調が良くなくてな」

そんなガーラ師匠を三人は心配する。

そんな体調なのに無理をしようとするガーラを三人は止める。

こんな状態なのにガーラが無理をしても仕事をしようとするのは、ある依頼があつたからだ。

それは村の近くでベアウルフが現れたという情報を聞き、その討伐依頼がやってきたからだ。

ベアウルフは狼を元にできたモンスターであり、かなり強いモンスターだ。並の冒険者では勝てないだろう。

だからこそ、実力があるガーラにその依頼が来たのだ。

しかし、ガーラは体調が悪く。クエストに行けない。

「任せてください!! 俺たちがクエストを受けます!!」

第2話 【ベアウルフ討伐イベント 其の2】

せかへい 外伝15

著者… p i r a f u d o r i a

作画… p i r a f u d o r i a

第2話

【ベアウルフ討伐イベント 其の2】

リトライダー達の前に現れたのは風邪をひいていたガーラであった。しかし、ガーラには依頼が来ていた。

それはモンスター討伐の依頼だ。

動くことのできないガーラに代わって、リトライダー達はガーラの依頼を受けることにしたのである。

クエストを受けることにした三人は、ガーラをギルドにある部屋を借りて休ませると、依頼の内容を聞いて、その場所に向かうことにした。

依頼内容は簡単で、村の近くで現れたベアウルフというモンスターを討伐してほしいというもの。

ベアウルフは狼のようなモンスターで、狼よりも大きく熊のような大きさをしてるが、スピードが早くモンスターの中では珍しく、群れでの戦闘を得意とするモンスターだ。

しかし、今回発見されたベアウルフは一体。だが、一体だけでもベアウルフは危険になりうるモンスターであるし、群れを成すようになってから討伐するのは大変になってしまう。

そのため早めに討伐をするように指示を受けた。

リトライダー達は装備を整えると、ベアウルフを討伐するために村の近くにある森へ向かう。

ベアウルフはこの森で発見されたという。

リトライダー達はガーラの指示を受けながらベアウルフを討伐したことは何度かある。しかし、三人だけで討伐するのは初めてだ。

不安はある。しかし、ガーラに任せていては優秀な冒険者にはなれない。

それぞれの目指す冒険者になるために、ガーラ達は今回の依頼で大きく変わろうとしていた。

森に着くと、そこは静かである。

モンスターの発生は生態系にも影響を与える。この森に生息していた動物は、ベアウルフから逃げたのか、または食われたのか。

「どうやってベアウルフを探すんすか？」

ダズはベアウルフの探し方を聞く。

これだけ大きな森だ。手当たり次第に探していても、そう簡単には見つからないだろう。

「大丈夫だ。こいつを持ってきた」

リトライダーがそう言って取り出したのは、四角い手のひらサイズの魔道具。消しゴム程度の大きさの魔道具を手にしたリトライダーは自慢げに言う。

「こいつは魔力を放つことができる魔道具で、モンスターを呼び寄せることができるんだ」

モンスターは魔力に反応して襲ってくる。魔力を持っている動物が多いところを現れるし、強力な魔力がある場所にも現れやすい。

この魔道具はその修正を利用し、モンスターを集めることに特化した魔道具である。

その魔道具を見たミエが言う。

「っで、それどうやって使うの？」

「……………」

第3話 【ベアウルフ討伐イベント 其の3】

せかへい 外伝15

著者… p i r a f u d o r i a
作画… p i r a f u d o r i a

第3話

【ベアウルフ討伐イベント 其の3】

魔道具は使えなかった。いや、使い方がわからなかった。そのため三人は森の中を探し回ることにした。

「わんわーん、ベアウルフちゃん、どこにいろのー？」

「犬を探してるわけじゃないからやめろ。あと、犬じゃなくて狼だ」

ミエとリトライダーがそんなことをやっている、先を進んでいたダズが何かを見つけた。

「みんな、あれを見てくれっす」

「どうした、いたのか？」

リトライダーとミエはダズの指さす方を見る。するとそこには大きなキノコが生えていた。

「あのキノコ、焼いたら美味しそうっす」

「真面目に探せ！」

リトライダーはダズの頭を優しく叩く。

そんなグダグダな感じでしばらく進んでいると、リトライダー達はついに見つけた。

森の奥でうさぎを殺している白い毛皮の動物。四足歩行で大きさは熊のように大きく。鋭い牙と爪を持っている。

「いたな」

狼のモンスター。ベアウルフだ。

モンスターが動物を殺すのは魔素を手に入れるためだ。

モンスターは魔素の塊が近くににいる動物の遺伝子を元に構築された魔素の集合体である。

近くにいる動物の遺伝子を元に作られているため、動物の器官や習性が備わっているが、それらは必要なものではない。

モンスターは常に魔素が漏れている。魔素を布で包んだようなものがモンスターであり、魔素は少しずつ減っている。

しかし、モンスターは形を保つために魔素が必要だ。そのため魔素を確保するために人間を襲う。

動物の持つ魔力。それをモンスターは吸収することで魔素に変換して、身体を保つのだ。

モンスターは動物を殺して、魔素を吸収すればするほど、強いモンスターへと進化する。

「これ以上、魔素を吸収されても困る。すぐに討伐するぞ」

リトライダーはそう言うのと、腰にあるバックから短剣を取り出す。

「了解っす！」

ダズは腕にグローブのような武器をはめる。

「ええ、援護は任せなさい」

ミエは杖を取り出した。

三人のパーティ構成は前衛のリトライダーとダズ。そして後衛のミエの構成である。

リトライダーがスピードで相手を攪乱して、ミエが防御や攻撃のアシストをする。ダズの一撃のパワーで敵を倒す。それが彼らの戦い方だ。

リトライダーはパーティのリーダー的役職でもある。リトライダーが作戦を立てる。

「敵はベアウルフ、一匹だ。俺が惹きつける。ダズは隙を見て攻撃。ミエは援護を頼む」

ベアウルフとの戦いが始まった。

第4話

【ベアウルフ討伐イベント 其の4】

せかへい 外伝15

著者… p i r a f u d o r i a
作画… p i r a f u d o r i a

第4話

【ベアウルフ討伐イベント 其の4】

リトライダーがベアウルフに短剣で斬りつける。しかし、奇襲に気付いたベアウルフは後ろに飛び上がって躲した。

「ダズ!!」

ベアウルフに攻撃を躲かれたリトライダーはダズの名前を呼び、援護を指示する。

「了解っす!!」

ダズはベアウルフを狙うのではなく、近くの木を殴って倒す。

ダズのスピードではベアウルフを攻撃することはできない。そのためダズが行うのは援護だ。

ダズが倒した木はベアウルフを囲うように倒れる。そして木によりベアウルフの逃げ道を塞いだ。

だが、一つだけ道はある。それはリトライダーの待ち受ける道。こうなってしまったベアウルフの取る選択肢は一つだ。

リトライダーを倒して広い場所に逃げることに。

ベアウルフは飛び回って勢いをつけると、リトライダーに噛みつきこうと突撃してくる。

リトライダーはまず自身に魔法計算を行い、自身に魔法を付与する。

今までリトライダーはこの場面では軽量化の魔法を自身に付与していた。

軽量化の魔法は身体が軽くなる魔法であり、自分や装備につけることで移動速度を上げることができる。荷物につけると移動が楽になる魔法だ。しかし、その分、攻撃力が下がってしまうのが弱点であった。

リトライダーはこの魔法を使うことでベアウルフと同等のスピードを出すことが

できた。

実際にそれはリトライダーの得意分野であり、冒険者試験でもこの魔法を使って合格した。

だが、この魔法ではベアウルフを討伐することはできない。それは攻撃力が下がってしまうことで、ベアウルフにダメージを与えられないからだ。

そのため、リトライダーは作戦を変えた。

今までは一人で戦っていた。しかし、今は違う。仲間がいるのだ。無理して自分がダメージを与える必要はない。

「ミエ!! 頼む!!」

リトライダーはミエに魔法の付与を指示する。

「任せなさい!!」

ミエは杖をリトライダーに向けると、リトライダーの周りに空気の鎧が出来上がる。

「空気の鎧（エール・アルミュール）」

リトライダーはベアウルフに向けて腕を差し出す。

「さあ、来い!!」

リトライダーの出した腕をベアウルフは噛み付く。しかし、空気の鎧があることで牙はリトライダーの腕を砕くことはなく。

リトライダーの腕に牙は刺さったが重傷というダメージではない。

リトライダーはその状態でもう片方の腕でベアウルフのことを掴むと、そのままベアウルフの方へと体重をかけた。

「重いし、抜けられないだろ。重量化魔法と身体強化のコンボ技だ」

リトライダーはベアウルフを捕まえた。

「やれ！ ダズ!!」

「行くっすよ！」

そして動きを止めたベアウルフに向かって、ダズが拳で殴り飛ばした。

第 5 話 【ベアウルフ討伐イベント 其の 5】

せかへい 外伝 15

著者…pirafudoria
作画…pirafudoria

第 5 話

【ベアウルフ討伐イベント 其の 5】

無事にベアウルフを討伐したリトライダー達はギルドへと向かう。

「いやゝ、ナイス固定っす。リトライダー」

ダズは腕をブンブン回して満足そうにしている。

「そうだろ!! これが俺の新たな技だ!!」

リトライダーも自慢げに笑う。

そんな中、ミエは心配そうにリトライダーの腕を見た。

「傷、大丈夫?」

ベアウルフの攻撃をわざと受けて、ベアウルフの動きを封じた。ベアウルフの攻撃から身を守るために、ミエの魔法を使ったのだが、完全には守り切ることはできなかった。

「ん、ああ、大丈夫だ。良い魔法だった。あれがなければ腕を食いちぎられてるところだ。ありがとな」

ベアウルフには多くの被害が出ている。それだけ強力なモンスターなのだ。今回早めに討伐できたのはでかい。

「ミエが心配するって珍しいっすね」

ダズがそんなことを冗談のつもりで言った。

そんなことを言われたミエは杖を振り回しながら怒る。

「はぁ!? 私だって心配することあるよ!!」

ダズとミエが睨み合う。そうやって歩いているうちにギルドにたどり着いた。

ギルドの前では軽装姿のガーラが待っていた。

「ガーラ師匠!？」

三人は驚いてガーラの下に駆け寄る。

「体調は大丈夫っすか？」

「ああ、もう大丈夫だ。今回はすまなかったな」

ガーラは一日休んだことで風邪も治ったようだ。

ガーラはボロボロな三人を見て、

「討伐できたんだな。よくやった」

三人のことを褒めた。あまり褒め慣れていないガーラ。そんなガーラが照れながら褒めている姿を見て、三人は笑う。

「討伐祝いでもやるか。今回は奢ってやる」

ガーラはそう言うと、三人を連れてギルドの中にある酒場の中へと入っていく。

三人はガーラを追いかける。

「ま、いつも師匠に奢ってもらってるんだけどな！」

「ちょ、それは言っちゃダメよ!!」

「そうっすよ。師匠が奢ってくれなくなったら、どうするんすか！」

後ろでヒソヒソと話す三人にガーラは、

「おい聞こえてるぞ……」

と低いトーンで言う。

「げげ!? まさか……今日は奢らないとかないですよね」

リトライダーはビビりながら聞く。

「そんなことあるわけないだろ。ほら、早く席につけ、さっさと始めるぞ」

こうして三人だけの討伐クエストは無事に終わったのであった。

|||||

リトライダーの腕は包帯を巻いており、一応治療はしてある。その後病院にもすっかり行ってる。

モンスターから感染病になることもあると思うから、しっかりと検査するのは大事だったりする。

ガーラが毎回奢ってくれるのは、ガーラが奢るという行為に憧れを持っており、三人が慕ってくれるから、奢ってしまっている。

三人はその分をなんやかんやで、武器などをプレゼントして返してる。

第1話 【平和な日常 其の1】

せかへい 外伝 16

著者… p i r a f u d o r i a
作画… p i r a f u d o r i a

第1話

【平和な日常 其の1】

ある日本にある高校。その高校に通う少女がいた。

「おい、日菜!!」

黒髪長髪の少女の後ろに黄色いリボンにポニーテールの少女が抱きつく。

ポニーテールの少女は抱きついた勢いのまま、長髪の少女を軸に2回ほど回転して止まった。

回転を止めた後、ポニーテールの少女は長髪の少女の正面に立つ。ポニーテールの少女が長髪の少女の顔を見ると、ほっぺたを膨らまして怒っていた。

「加奈………食えない」

少女の手には食パンが握られており、それを食べていたようだ。
加奈は呆れた様子で日菜に言う。

「まあ、た、食べてるの」

日菜は無視して食パンを齧る。

「太るよ……」

加奈が続けていった言葉に日菜は一瞬動きを止める。まるで石になったかのように……。

太ると言われたことがショックだったのだろう。日菜は食パンを齧ったまま固まっている。

「おい、日菜、大丈夫か？」

加奈は日菜の顔のすぐ近くで手を左右に振って、日菜の意識を確かめる。

「あー、ダメだこりゃ」

加奈は日菜の状態を見て諦める。この状態に入ってしまったらなかなか戻らない。

どうしようか加奈が迷っていると、二人の前にある男子生徒が現れた。

「ん、お前ら何してるんだ」

二人の友人である神宮寺優斗だ。優斗は学校のバックをリュックのように背負って登校していた。

「いや、日菜のやつが固まっちゃって……」

加奈は頭を掻きながら説明する。

そんな様子の加奈を見て、

「またお前なんか言っただな」

優斗はため息を吐きながらも事情を理解した。

優斗は日菜の後ろに回り込むと、日菜の頭にチョップを食らわせる。

すると、優斗のチョップで日菜の周りを囲っていた岩が砕ける。まあ、実際に囲っていたわけではなく加奈のイメージでの話だ。

日菜は意識を取り戻した。

「あれ、私……今まで何を……。ん、優斗……いたんだ」

そう言いながら日菜は食パンを齧る。

「まだ食うのかよ！」

加奈が日菜の自由さに呆れていると、優斗が腕時計を見て焦り出す。

「あ!! やば、もうこんな時間だ!!」

時刻は8時40分。残り5分でホームルームが始まってしまう。

「おいお前らも急げ、遅刻するぞ!!」

優斗はそう言いながら急いで学校へと走っていく。

加奈も優斗を追うように、

「日菜、私たちも急ぐよ」

「うん」

走り出した。日菜は食パンを食べながら走っている。

「お前はいつまで食べてるんだよ!!」

第2話 【平和な日常 其の2】

せかへい 外伝 16

著者… p i r a f u d o r i a
作画… p i r a f u d o r i a

第2話

【平和な日常 其の2】

数ヶ月前、突如行方不明者が大量に出るという事件が起きた。
原因のわからない神隠し事件。

行方不明者は学生から社会人。多くの者たちであり、その者たちには共通点はない。
い。

近所でも男子高校生が行方不明になったらしい。

未だに警察はなんの手がかりも掴めていない。

日菜は教室の端でおにぎりを食べながら、そんな記事を見ていた。日菜の通う高校ではスマホの持ち込みが許可されており、休み時間であれば自由に使える。その時間にこのような都市伝説みたいな事件を調べるのが、最近の趣味になっていた。

そんな日菜に二人の少女が近づいてくる。

「山吹さん、何見てるの？」

同じクラスメイトの女子たちだ。

「ん、あ！ 暇つぶし」

日菜はそう言うときクラスメイトにスマホの画面を見せる。それはネットの記事であり、それを見た子達は興味津々に見ている。

「これニュースにもやってたやつだね」

そのうちの一人。眼鏡をかけた短髪の子が言う。

実際にニュースになったり騒がれてもいた。この辺りでも行方不明者が出たことで警察が見回りしているのも見たことがある。

「まだ何も分かってなかったんだ」

もう一人の癖っ毛の凄い子が顎に手を当てながら考えながらそう言った。

「山吹さんもこういうのに、興味あるんだ！」

女の子たちは日菜と一緒にそれに関する記事や他にも都市伝説のような記事を探して一緒に見ていた。

日菜は話している間にお菓子を食べながら話していたが、二人にもそのお菓子を渡して一緒に食べながら話す。

しばらくして休み時間が終わって、授業が始まる。

授業が始まったからそれぞれは自分の席に戻る。

次の授業は古典だ。

日菜達はバックの中から教科書やノートを取り出して、机に置いた。

時間が経って放課後。日菜は帰るために準備をする。教室では掃除をしている子もいるが今回は当番ではないのですぐに帰れる。

そんな日菜の前にさっきの子達がやってきた。

「ねえ、山吹さん、良かったら一緒に帰らない？」

一緒に帰ろうと誘ってくれたのだ。

日菜は少し考えて、

「良いけど。先に約束してる子がいるの、その子と一緒にだけ良い？」

「うん、大丈夫だよ」

日菜は二人を連れて、隣のクラスに行く。隣のクラスにいるのは一緒に登校もしてきた加奈だ。

加奈とは別のクラスであるが仲が良く普段は一緒に帰っている。

教室を覗くが、そこに加奈の姿はない。

「あれ？ 帰っちゃったのかな？」

日菜が不思議そうにしていると次の瞬間後ろから抱きつかれて、目を隠される。

そして視界が真っ暗になった。

第 3 話 【平和な日常 其の 3】

せかへい 外伝 16

著者…pirafudoria
作画…pirafudoria

第 3 話

【平和な日常 其の 3】

加奈を探して隣のクラスを覗いていると、後ろから抱きつかれて目を手で覆われる。

「だーれだ」

後ろにいる人物はそんなことを言ってくる。しかし、だいたい予想はついている。

「……加奈」

「あ、バレてた」

加奈は日菜から笑いながら手を離れた。

「あれ、その子達は？」

加奈は日菜の後ろにいる二人が気になったようだ。

「ん、ああ、同じクラスの……」

日菜が紹介しようとする、先に二人が頭を下げた。

「初めまして、山吹さんと同じクラスの麻宮美咲です」

眼鏡をかけた短髪の子が自己紹介する。

続いて、

「私は大橋桜です」

癖っ毛の強い子も自己紹介した。

日菜が加奈と一緒に帰ろうという話になったことを説明すると、加奈はそれを承諾する。

「分かった。でも、私掃除当番だからちょっと待ってて」

加奈はそう言うと、掃除を始める。

そしてサボっている男子生徒がいたらその子に真面目に掃除するように指示したり、色々やっていた。

そんな様子を見ていた美咲は、

「私も暇だし手伝いに行ってくる」

と言って手伝いに行く。それに釣られるように二人も手伝いに行った。

協力して掃除ができたことで順調に進み。無事に掃除が終わった。

そして四人は一緒に帰ることにした。

それぞれ変える方向が違い。高校から駅までの間であるが、その間に休み時間に一緒に見ていた記事の話などをした。

最初はなんの話か分かっていなかった加奈であったが、みんなが説明してくれたことで、理解して一緒に話に参加する。

なんだかんだで話が盛り上がり、面白い話ができていたが、気がつけば駅に着いていて、解散することになった。

日菜と加奈は家が近いので、同じ電車だが、美咲は反対方向で、桜に関しては駅にあるバス停からバスに乗って帰宅する。

「それじゃあ」

それぞれは手を振って帰宅する。

別れた後、加奈と日菜は電車の中で話の続きをしていた。

加奈は不思議そうに記事を見る。

「何かあった？」

かなり真剣に見ていた加奈に日菜は聞く。

「いや、ちょっとね……」

そう答えた後、加奈は少し考えていたが、

「……………関係あるわけないか」

そう言って話を切り替えた。

|||||

今回はちょっといつもとは違う話を書いてみました。

まだこちらの設定は不安定なので口調や設定が変わることもあるかもしれません。

そのようなことがあっても多めに見てもらえると嬉しいです。

第1話 【冒険者の日々 其の1】

せかへい 外伝17

著者… p i r a f u d o r i a

作画… p i r a f u d o r i a

第1話

【冒険者の日々 其の1】

王国や帝国などの国に属さない特殊な組織。それはギルド。ギルドは冒険者を集めて、依頼をこなし、モンスターの討伐や賞金首の捕獲などを行っている。

そんな冒険者は今……だらけていた。

「疲れた〜」

「疲れたっすね〜」

「もう動けないわね〜」

宿で疲れ切って倒れている冒険者三人組。リトライダー、ダズ、ミエの駆け出し冒険者三人だ。

今日は師匠であるガーラのクエストについて行き、ボコボコにされてクエストは達成したが疲れ切って倒れているのだ。

「お前ら……疲れすぎだろ」

ガーラは武器である斧を磨きながらそんな三人に言う。

クエストでは一番活躍していたのはガーラだ。穴に落ちたミエを助けて、モンスターに食われそうになるリトライダーを助けて、クエスト達成の書類をミスしたダズの手紙を直して、なんやかんやで一番働いている。

「ガーラ師匠は……元気っすね」

ダズは倒れた状態のまま言う。ガーラは斧を磨きながら、

「いつ何が起きるか分からない。武器は手入れできる時にしないとな」

ガーラはそう言いながら真面目に手入れをしていた。ガーラの装備はいつも綺麗に保管されており、不備を起こしたことはない。

どんな道具でも大切に使うため、すぐに壊れてしまうことはなく、どんなものも長持ちさせているのだ。

「お前らも武器の手入れはしっかりしろよ」

ガーラは三人にそう伝える。

三人は宿に帰ると、装備を放り投げてすぐに倒れた。そのため武器の手入れなんてしてない。

「あとで、後でやるから……」

ミエはうとうとしながらそう言う。と言うよりもすでにもう寝ている様子だ。

ガーラはため息を吐く。

ガーラは考える。ここで武器の手入れをやってあげたい。手入れをしておけば、いつ何が起きても良いようにできる。

それにガーラは綺麗好きであり、こうやって放り投げられているのを見るのは嫌いだ。

だが、この三人のことを考えるのならば、ここでガーラが手を出すことは良くないのではないだろうか。

ここで手伝ってしまえば、この三人はその癖がついてしまう。それはこの三人のためには良くないことだ。

ガーラは立ち上がると、

「俺は少し出かけてくる。帰ってくるまでにはやっておけよ」

そう言って出て行った。

三人のことを思うのならば、放っておくのが一番だ。それに三人も冒険者としての自覚がないわけではない。

そしてガーラが戻った時には、三人はしっかりと手入れを終わらせていた。

第1話 【魔道具ショッピング 其の1】

せかへい 外伝18

著者… p i r a f u d o r i a

作画… p i r a f u d o r i a

第1話

【魔道具ショッピング 其の1】

オーボエ王国にあるショッピングモール。そこには多くのものが売られており、そのうちの一つに魔道具を専門として扱うお店がある。

魔道具の中でも日用品を扱う。魔道具日用家具店。そこにある人物がやってきて

いた。

その少年の髪は青く。整った顔の持ち主。赤いマントを羽織り、中には制服を着ている。

その少年はシーヴ・レーベル。王立魔法学園に通う学生だ。

彼は王国で一人暮らしをして学業に取り組んでいるのだが、その暮らしの中である魔道具が壊れてしまいそれを買いに來たのだ。

「えーっと、ここは料理系だから……向こうか」

シーヴはご飯を炊くことができる魔道具やパンを焼くことができる魔道具のコーナーを通り抜けて、奥にあるコーナーへと進む。

シーヴがたどり着いたのは、洗濯物を洗うことができる魔道具のコーナーだ。

これは洗濯機であり、四角い構造をしている魔道具で大きさは人の半分くらいある。

服などを入れて、魔道具を起動すると、水の魔法で中を浸した後風の魔法で回転させて服を洗う。そのあと水を魔法で消すと、火の魔法と風の魔法を使って服を乾かすのだ。

かなり便利な魔道具であるが、値段が高く金持ちでしか手に入らない結構レアな魔道具だ。

王国では使っているものもいるが、村などでは使っているものは少なく。一つ一つ手で洗っている。

しかし、シーヴの家にはこのような魔道具が沢山あり、それらを活用して生活を楽にしている。

これらの魔道具は転生者が開発したものとされており、元あったものを魔石を使い、再現したものである。

シーヴはどれを買おうかしばらく悩んだあと、店員を呼んで相談して、買うものを決めた。

買うことにしたのは、魔道具を生産するメーカーでも有名なりズという店の洗濯機を買うことにした。

シーヴは大量の金貨を払い、洗濯機を購入。魔法で洗濯機の重さを軽くしたあと、それを持って家まで帰った。

――――

今回は魔道具を購入するシーヴの話を書きました。

なんか転生ものあるあるの転生者が異世界でもとある世界のものを作って大成功みたいなものになってしまっています。

まあ、この設定が便利なので、こうしていきたいと思います。

でも、魔石を使って作るし、材料費が高いのであんまり流通していないみたい。そのためお金持ちしか買えないものみたい。

シーヴの家系は医者でシーヴも医者を目指しています。

人の命を預かる仕事。そのため収入も多いのでかなりの金持ちです。

第1話 【暖かい家 其の1】

せかへい 外伝19

著者… p i r a f u d o r i a

作画… p i r a f u d o r i a

第1話

【暖かい家 其の1】

家の扉が叩かれる。そして入ってきたのは青い長髪で白い服を着た少女。彼女の
名前はヤマブキ。

今はこの家、パトの家に居候している人物だ。

「おかえり」

帰宅したヤマブキを茶髪のボサボサ頭の少年が出迎える。

緑色の上着に茶色いズボンを履いている。

「タダイマ帰りマシタ」

パトはご飯を用意して待っていたようで、家の中からはご飯の匂いがする。
この匂いはカレーだろう。

「お、ヤマブキさん、帰ってきたのか」

奥ではガオが食事の用意をしているようで、食器を並べている。

ガオは食器を並べながら、ヤマブキが帰ってきたのに気づいたようだ。

ガオはパトの父親であり、サージュ村の村長である。村人からの信頼は厚く。ガオも村のために全力を出して貢献している。

パトはその姿に憧れて、自分も立派な村長になろうと努力している。

パトはヤマブキを家に入れる。

「もうご飯はできてます。早く食べましょう」

ヤマブキをリビングに案内する。

リビングにある大きなテーブルには夜ご飯が並べられている。

真ん中には大きなサラダが置かれており、それぞれがサラダを取る用の小皿を用

意してある。

左端には水の入った入れ物と、コップが四つ置かれており、手前に二つ、奥に二つカレーが置かれていた。

「俺はエリスを呼んでくるよ」

パトはヤマブキを手前の左側に座らせると、エリスを呼んできると言い、リビングにある玄関に近い方の扉を開けて中に入って行った。

そこはパトの部屋であるが、今はエリスが占拠しているらしい。

夜はエリスとヤマブキが使わせてもらっていて、二人で寝ている。

ベッドは交互に使っていて、ベッドの隣に布団を敷いてベッドを使わない人はそこで寝ている。

二人が来てからパトはリビングで寝ているらしい。パトの部屋の隣にはガオの部屋があり、ガオはそこで寝ている。

しばらくしてエリスとパトが出てくる。

「今日はカレーなのね」

料理を見たエリスが夜ご飯を見て、少し楽しそうに言った。

彼女はこうして家族で食べるということに憧れを持っているらしい。なのでこうしてみんなで囲んで食べるのが、好きなようだ。

エリスはヤマブキの左に座る。

ガオはすでにヤマブキの向かいである奥の右側に座っており、パトもその隣に

座った。

「それじゃあ食べるか」

四人は手を合わせる。

「いただきます」

そして食事を始めた。

――

今回は平和な感じの話です。食べてる風景も書こうとしたけど、思いつきませんでした。

おそらくエリスがヤマブキに水を取るように言うシーンはあると思います。

ち
よ
っ
と
ゴ
タ
ゴ
タ
が
あ
り
そ
う
だ
け
ど
。

第1話 【王国の外れ 其の1】

せかへい 外伝 20

著者… p i r a f u d o r i a
作画… p i r a f u d o r i a

第1話

【王国の外れ 其の1】

満月が暗い街を照らす。王国を囲む結界が月の光に反射して、半円を描く半透明な線を映し出し、それは不気味に青い光を発している。網のような見た目になっている結界の見た目は、結界と結界のつなぎ目である。

オーボエ王国には笛のように細長い建物が多い存在しており、中央には王族の住

む城もある。

城はプリンのような崖になっている円状の丘の上にあり、道は一本しかなく、その丘をぐるっと一周する坂道がある。

その上には横並びになった笛のような建物が五個並んでおり、くっついている。それぞれで高さも違っていて、一番高いものは右から二番目の建物だ。

そんなオーボエ王国であるが、王国にはそんな建物がない地域も存在する。

オーボエ王国の特徴的な建物があるのは中心だけであり、少し離れた場所になると通常の一階建ての建物の並ぶ地域に行き着く。

そこからは中央の高い建物も見える。

そんな王国の外れ、そこにある街で一人の人間がいた。

そいつは屋根の上に登り、夜空を見上げる。

奥に見える高い建物と月が並んで、まるで王国から月の国に行けてしまえそうな
そんな錯覚に陥る。

「……………いつか、行けると良いなあ」

独り言を言う。誰かが近くにいるわけではない。だが、月と王国が近づいて、ふ
とそんな言葉が出た。

姿は黒いフードを深く被った人物だ。

しばらく夜風に吹かれたあと、立ち上がる。

思い出すのは懐かしい日々だ。あの時は何もかもが新しかった。

どんなことにも興味を持ち、多くのことを彼らと共に楽しんだ。

だが、今はもういないんだ。それでも、時は動き続ける。

フードを被った人物は屋根から降りた。

そして夜の街を歩き出す。

夜の街は人一人いない。静かな街だ。

昼は多くの人が行き交い。歩けば人とぶつかる。それほど多くの人がいた。

夜は自由だ。こうして道の真ん中を歩いても誰にもぶつかることはない。でも、

少し寂しくも感じる。

どれくらいの時が過ぎたのだろうか。

しばらく進むと、王国の中でもかなり家の少ない地域にたどり着いた。

森や畑がある王国の中でも珍しい場所だ。そんな場所に三階建ての宿がポツンとある。

宿の前では顔見知りが待っていた。老人と少女だ。彼らは事情を理解してくれている。そして協力してくれた。

あと少し、あと少しであの場所に辿り着ける。

だが、もうあそこには帰れない。だから進む。次の時代のために。

第1話 【雪山の温泉 其の1】

せかへい 外伝 21

著者… p i r a f u d o r i a
作画… p i r a f u d o r i a

第1話

【雪山の温泉 其の1】

サージュ村の村長の家。そのうちの部屋に六人の男女が集まっていた。

「おい、お前ら俺の部屋で何してるんだよ」

パトが集まっているメンバーを見ながら言う。

そこにいるのは、門番でありパトの友人のエスとルンバ。そして村にある銭湯で働く娘でありパトの友人のカナー。

さらにパトの家に住み着いているヤマブキと、天才魔法使いで王国で学生をしているはずが、たまにこうして帰ってきているエリスがいた。

金髪の少年エスと茶髪の少年ルンバ、そして緑髪で二つのお団子髪のカナーは部屋の真ん中の床で円を作るように座っている。

ヤマブキはその円から少しズレた場所で座って窓の外を見ている。エリスはベッドに座り腕を組んでいる。

カナーが円の中央に小さな紙を置く。それは縦長の紙だ。

「当たったのよ」

カナーはその紙を置くとそう告げた。

パトは不思議そうに返す。

「何が？」

「温泉旅行のチケットがよ!!」

カナーは嬉しそうにそう言った。エスとルンバは浮かれており、エリスほやれやれとした表情をしている。

そしてヤマブキはずっと外を見つめている。

「あー、あれか。少し前に応募してたやつか」

少し前にパト、エス、ルンバの三人で村の銭湯に行った時、カナーと喋り、銭湯においてあるチラシに適当に応募したことがある。

それは温泉旅行の応募であった。

「それでこのメンバーはなんだ」

パトはそう聞く。

意外と珍しいメンバーだ。エスとルンバ。そしてカナーは分かる。しかし、エリスはともかくヤマブキはこのメンバーとあまり接点がなかったはずだが……。

「これ六人までいけるんだよ」

ルンバが説明する。

「メンバーどうしよって話をしている時にちょうどエリスちゃんが帰ってきてるのを見つけてね。ヤマブキさんも一緒だったからどうかって」

エリスはなんだかんだでよく帰ってきている。今回も少し前から帰ってきてはいたが、みんなには知らせてなかったのか……。

というかメンバーはかなり適当感があるが、まあ、刺そうとしたらこの二人しかないから、ちょうどよかったのか。

「分かった。そういうことか。でも、二人ともいけるのか？ 予定とか大丈夫か？」

パトはエリスとヤマブキの二人に聞く。

まずエリスが答える。

「私は問題ないよ。どうせ暇だし」

お前は暇じゃないだろって思ったが暇だからここにいるんだ。

次にヤマブキが外を見ながら答えた。

「私モ問題アリマセン。……………旅館料理……………」

食べ物で釣られたらしい。

第2話 【雪山の温泉 其の2】

せかへい 外伝 21

著者… p i r a f u d o r i a
作画… p i r a f u d o r i a

第2話

【雪山の温泉 其の2】

温泉旅行の応募で当たったパト達は、その旅行に行くことになった。メンバーは
パト、エス、ルンバ、カナー、エリス、ヤマブキの六人。

六人はしばらく馬車に揺られて、ほぼ一日経った頃にやっと目的地に到着した。

そこはあたり一面が白銀に覆われた雪の積もる山。見渡す限り白い空間が広がっており、馬車を降りてからは歩くのにかなり力を使った。

着いた旅館は二階建ての木造の建物。大きくてかなり立派な建物であるが、古いものであるらしく所々痛んでいる場所もある。

だが、それもそれで味があるいい旅館だ。

早速旅館に入ると、そこには長髪で無気力な目をした若い女将さんが出迎えてくれた。年齢はパト達と大差ないくらいだろう。

「……いらっしやい」

元氣のない声で出迎えてくれる。そんな様子を見たエスが心配する。

「大丈夫ですか？ 元氣がないようですけど」

「元からです」

女将さんはそう答えると、そのままパト達を中へと案内する。
中にはあまり人がいないのか、静かな様子だ。

「他にも泊まっている人はいるんですか？」

ルンバが聞くと女将さんはこちらを向くことなく。

「……4名ほど」

そう答えた。

そのあと、案内された六人は2階に行き、

「……こちらの三部屋となっております」

三つの部屋を紹介された。

「それじゃあ、誰がどの部屋だ？」

エスがそう言った時、問題に気づく。

案内された部屋は二人部屋が三つだ。

今いるのは男三人。女三人だ。そして男女で別れようとしても、一部屋だけ男女が一緒になってしまう。

そんな中、エスが手を上げた。そして真顔で、

「俺をカナーと一緒にしてくれ」

エスは殴られた。

エリスは腕を組む。

「これは困ったね」

どういう部屋の構造なのか。そこまでは調べていなかった。当たってすぐだったため、準備が忙しくなんやかんやで見逃していた。

そんな中、エスが手を上げた。

「俺は縛って目隠しして、俺をどうしてくれたって構わない!! さあ!! 俺を縛っ

てくれ!! それなら同じ部屋で……ぐば」

エスは再び殴られた。

「この変態は放っておこう」

カナーはエスをボコボコにした。エスはその辺で横たわる。

「私ハパトノ護衛ナノデ、同ジ部屋ノ方ガ助カリマス」

ヤマブキがそんなことを言う。しかし、

「いや、ヤマブキさんが俺の護衛というのは分かるが流石にな……」

それにヤマブキがそんなことを言うてからの、エリスの目が怖い。

そうやって困っていると、

「ぱっぱらっぱー!!」

突然女将さんが変なことを言い出した。まあ、棒読み感がすごいが……、

その突然のテンションにみんなは啞然とする。

「そんなお困りの皆さんに今回は特別大サービス。……もう一部屋おまけしましょう」

女将さんのテンションのキャラクター性にみんなは驚く。固まっているみんなを見て女将さんは、

「どうかしましたか？」

「いや、突然喋り方するから」

「私はこんな人間ですよ」

女将さんはそう言うと、もう一部屋サービスしてくれた。というかもう少し早めに言ってほしい。

第3話 【雪山の温泉 其の3】

せかへい 外伝 21

著者… p i r a f u d o r i a
作画… p i r a f u d o r i a

第3話

【雪山の温泉 其の3】

旅館に着いたパト達は荷物を整理した後、日が落ちるまで外で遊ぶことにした。雪は村で降る雪よりも多く、気をつけないと腰まで浸かってしまう場所もある。パト達は旅館のすぐ側の広場を借りて、雪遊びを始めた。

ヤマブキは寒いのが苦手で、まるで雪だるまのように厚着をしている。

「ヤマブキさん、寒いのが苦手なの？」

カナーが聞くと、ヤマブキは頷く。

すると、カナーは雪を集めて何かを作り始めた。

「ほら、あんた達も手伝いなさい」

雪を投げ合って遊んでいたパト、エス、ルンバを手伝わせると、カナーはかまくらを作った。

雪で出来た人が二人くらい入れそうなスペース。中に入ると意外と暖かい。

「おー、良いなこれ」

パトとエスができた瞬間に入って、そんな感想を言っていると、

「ほら、あんた達は出なさい」

カナーに引っ張り出された。

「なんだよ」

エスが口をとんがらせて文句を言う。しかし、カナーはエスのことなんて気にかけない。

「ほら、ヤマブキさん、どうぞ」

カナーはヤマブキを中に入れてあげる。すると、ヤマブキは暖かくて良いのか、結構気に入った様子だ。

パトはかまくらを作ってくれたカナーに礼を言う。

「ヤマブキさんのために作ってくれたのか。ありがとう」

「まあ、来る時も寒そうだったしね」

寒いけどみんなと遊びたかったのだろう。苦手な寒さなのにヤマブキはついてきた。
た。

ヤマブキはかまくらの中で雪を集めて、小さな雪だるまを作って遊んでいる。

「俺はヤマブキさんと一緒に遊んでるよ」

パトはそう言ってかまくらの中に入る。

「分かった。このバカ二人は私が雪まみれにしてくる」

カナーはそう言うと、エスとルンバの首を両脇に挟みそのまま連れて行く。
ルンバは少し怯えていたが、エスは興奮してた。

二人になったパトとヤマブキはかまくらにある雪を集める。

ヤマブキが小さな雪だるまを完成させる。ヤマブキは自分の作った雪だるまを手のひらに乗せると、表情には出さないが嬉しそうに見つめている。

「お、そっちも完成したか。俺もできたぜ」

ヤマブキの完成から少し遅れてパトも何かを完成させた。それは雪で作られたエビフライ。かなりクオリティ高く作られている。

ヤマブキはパトの作った雪エビフライを見て驚く。

「俺なんだかんだで器用なんだ。このゴーグルだって昔父ちゃんに貰ったものなんだが、壊れるたびに自分で直してるんだ」

パトはそう言うのとゴーグルを自慢げに見せる。しかし、ヤマブキはそんなゴーグルには興味なく、雪エビフライをじっと見ていた。

「おい、食えないからな」

第4話 【雪山の温泉 其の4】

せかへい 外伝21

著者… p i r a f u d o r i a
作画… p i r a f u d o r i a

第4話

【雪山の温泉 其の4】

次に何を作ろうかと考えながら、パトとヤマブキが雪を集めていると、かまぐらの外から視線を感じる。

そっちの方を見ると、

「お、エリス、やることは終わったのか？」

せっかく雪山に來たのだから、研究のレポートを書いていたエリスがやってきた。

「ええ、とりあえず……」

そう言うとエリスは無理矢理かまくらの中に入ってくる。

「狭い……」

かまくらの中は人が二人入れる程度の大きさだ。三人入ると結構狭い。

「エリス、………狭い」

パトがそう訴えるが、エリスは笑顔で、

「何か問題でも？」

「いや、だから、狭いんだけど」

「問題ないでしょ」

「……………」

そんな状況でもヤマブキはせっせと雪を集めていた。

仕方がないので、パトが入り口の方へ行き、身体の半分を出すことにした。

パトの下半身は冷える。

今度は三人でそれぞれ新しいものを作り出す。

ヤマブキはさっきのより少し大きくなった雪だるま。ついでに身体を一段増やして三段にしたバージョンだ。

さっき作った雪だるま達の横に置くと、ヤマブキはそれを見て楽しむ。

雪だるまに挟まれて雪エビフライがあるため、雪だるまがエビフライを食べている光景にしか見えない。

パトも新しい雪作品を完成させた。

「よし、俺もできた」

パトが今度作ったのは、ブロッコリーだ。それも菊の部分も葉っぱな部分もかなりの完成度で出来ている。

結構な出来のものができたことでパトは満足そうだ。パトはヤマブキにブロッコリーを渡す。ブロッコリーを受け取ったヤマブキはエビフライの横に置いた。雪だるま二体がエビフライとブロッコリーを囲む不思議な状況だ。

「エリスはどうだ？」

パトはそう言い、エリスの作っているものの方を見る。しかし、エリスは雪を集めただけでまだ何も完成していない。

「まだ作ってる途中か……」

そう言ったパトに対して、エリスは人差し指を立てて、

「ふふふ、もう完成よ」

エリスは集めていた雪にその辺で拾ったであろう、鉛筆程度の大きさの小さな棒を向ける。

すると、雪は形を変えて、小さなオーボエ王国を作った。かなり小さいが細かいところまで再現されている。

雪で作られたオーボエ王国の模型だ。

「どうよ!!」

エリスは腕を組んでドヤ顔をする。

実際にクオリティは凄い。パトも何度かオーボエ王国には行ったことがあるが、その細部まで作り込まれている。

だが、一つだけ文句を言いたいことがある。

「魔法はズルい」

パトはエリスの頭にチョップを喰らわした。

第 5 話 【雪山の温泉 其の 5】

せかへい 外伝 21

著者… p i r a f u d o r i a
作画… p i r a f u d o r i a

第 5 話

【雪山の温泉 其の 5】

エスとルンバは雪の壁を作る。エスはかなり平べったいが、ルンバは厚い壁だ。しかし、ルンバは壁が厚いが高さが低い。

「このくらいか？」

エスが近くで雪の玉を大量に作っているカナーに聞いた。

カナーは二人が作った雪の壁を見ると、

「うん、そんなもんでいいでしょ。サンキュ！」

と適当に返事をした。

雪玉をある程度作り終わると、二人を呼んで並べた。

そして腰に手を置くと胸を張る。

「これから雪合戦を行う!!」

と自慢げに宣言した。

ルールは簡単、相手に多く雪玉を当てたほうが勝ち。二人の作った壁が陣地で、その間にある線を越えてはいけない。

「じゃあ、まずルンバ!! 私と勝負よ!!」

カナーはそう言って、ルンバと一対一の雪合戦を行うことにした。

二人はお互いの陣地に行く。そしてエスが試合開始の合図をした。

「スタート!!」

始まったと同時にカナーが連続で雪玉を投げる。しかし、ルンバの作った壁は頑

丈だ。ルンバは壁に隠れている限り雪玉に当たることはない。

だが、しかし、隠れているだけでは攻撃ができない。

「ほらほら！いつまで隠れてるの!!」

カナーは雪玉を投げまくる。しかし、この勢いで投げ続ければ、いつかは弾切れする。

ルンバはそれを狙っているのだ。

そしてついにその時が来た。カナーの攻撃が止まったのだ。

「よし、今だ!!」

ルンバは今はチャンスと顔を出す。しかし、

「ばふ!!」

ルンバの顔に雪玉が直撃した。

カナーの陣地にはまだ雪玉が残っている。カナーはわざと雪玉が切れたと思わせて、ルンバに顔を出させたのだ。

「かかったね!!」

カナーはルンバに逃げる隙も与えず、雪玉を当て続ける。

ルンバは慎重な少年だ。何事も慎重に行う。しかし、雪合戦なんてしばらくやっていなかったことで、ルンバはそこに注意を払うのを忘れてしまっていた。

「あんたに隙をあげると、私の動きを読んでくるからね。絶対に反撃はさせない」

カナーの猛攻でルンバは雪まみれになってしまった。全身雪だらけでびしょびしょになったルンバは、降参を宣言した。

「降参く!!」

「やった!!」

カナーはジャンプして喜ぶ。かなり嬉しかったようだ。

ルンバを最初の相手に選んだのも、ルンバに動きを読まれないための作戦。全ては計画のうちだったということだ。

「さてと、じゃあ次は……」

カナーはそう言くと次の標的の方を見る。

エスは全力疾走で逃げた。

第 6 話 【雪山の温泉 其の 6】

せかへい 外伝 21

著者… p i r a f u d o r i a
作画… p i r a f u d o r i a

第 6 話

【雪山の温泉 其の 6】

「さてと次は……」

ルンバを雪まみれにしたカナーは次の標的の方を見る。

ルンバを雪合戦で倒したのは計画通りだったという感じだ。このままでは自分も雪まみれにされてしまう。

危険を感じたエスは全力疾走で逃げる。

「あ、待て!!」

カナーは追いかけようとするが、その前にエスは雪で滑って転けた。

雪に頭から突っ込んだことですでにびしょびしょのエスは観念して雪合戦をすることにした。

「じゃあ、私はルンバの作った壁を使うね」

そう言うとかナーはルンバの作った壁の方へ行く。エスも自分の作った壁へと向

かう。

だが、エスは自分が作った壁に自信があった。それは自分が作ったというものもあるが、それだけではない。

さっきの試合でこの陣地は一回勝っているということだ。

それにエスはカナーに勝たなければならない理由もある。それはカナーをびしょびしょにしてやりたい。

いつもバカにしてくるカナーをどうにか泣かせてやりたいのだ。ついでに服が透けると嬉しいとかもある。

そんな期待をしながらエスとカナーの雪合戦は始まった。

「スタート!!」

ルンバの合図で二人は雪を投げ合う。しかし、二人とも雪玉を避けて、壁の中に隠れる。

お互い譲らない戦いだ。これは長くなる。そう思った。しかし、

カナーは大量の雪を持つと立ち上がる。

そしてそれを壁に隠れているエスに投げ出したのだ。

さっきと同じ作戦。そうとも思えた。しかし違った。

凄いい勢いで投げられた雪玉は、雪の壁を少しずつ破壊し、エスの作った壁を破壊してしまったのだ。

「なにー!!」

カナーの強力な投擲が雪の壁を破壊した。それによりエスに雪玉が次々と当た
る。

エスの顔に雪が当たり、身体中が真っ白になる。

やられまくったエスだが、これで負けるわけにはいかない。せめて一撃だけでも
!!

エスは雪玉に当たりながらも無理矢理走り、接近戦で勝負に出ようとする。

しかし、エスは転んでしまった。

エスは雪にズッポリと顔面から埋まる。そんなエスにカナーは雪玉を投げ続け
た。

「降参!! 降参だー!!」

それでも雪を投げられて、そのまま雪に埋められそうになったエスは降参した。

雪合戦で圧勝したカナーは子供のようにはしゃいで喜ぶ。

「やったー!!」

ジャンプしてカナーは喜ぶ。

そんなカナーを見てルンバは言う。

「そんなにはしゃいでると転ぶぞ」

ルンバに言われた通り、カナーは雪に滑って転んだ。

第7話 【雪山の温泉 其の7】

せかへい 外伝 21

著者… p i r a f u d o r i a
作画… p i r a f u d o r i a

第7話

【雪山の温泉 其の7】

雪で遊んだパト達は旅館に戻った。そして旅館の女将さんに旅館にある温泉を紹介された。

そして温泉に入ることになったのであった。

「とりあえず持つてくものはこんなものか？」

雪で濡れた服を部屋で着替えて、旅館で借りられた和服に着替えたエスとルンバはタオルを持って廊下で待ってた。

しばらくして部屋からパトが出てくる。

「お待たせ」

パトの雪で濡れた服を着替えていたようだ。

待っていたエスがパトに言う。

「なあ、パト、個室俺と交換しないか？」

「ジャンケンで決めただろ。ダメだ」

「え」

旅館で借りられたのは四部屋だ。メンバーは女三人男三人なので、二人と一人に分かれることになった。

男はジャンケンでパトが勝利して一人部屋になり、女もじゃんけんの結果エリスが一人部屋になったようだ。

「あれ？ まだ女子は来てないのか？」

パトがそう聞くとルンバが首を振る。

「いや、カナー達なら先に行ったぞ。どうせ別々なんだし、待たせるよりは先に行かせたほうがいいだろ」

パトはかまぐらの外に体を出して長時間動かなかったため、冷えて腹を下していた。そのためしばらく便所に籠っていたのだ。

「いやゝ、すまん」

パトは手を合わせて謝る。そんなパトにエスは自慢げに言う。

「良いってことよ。これで男と女を間違えて入っても言い訳ができる」

「言い訳にならないし、お前にそんな度胸はないだろ」

そんなエスにパトは冷静にツツコミをした。

パト達が泊まっているのは旅館の二階だ。温泉は一階にあるためパト達は階段を

降りる。

その途中女将さんとすれ違った。

「……………あ、どうも」

女将さんは忙しそうにせっせと働いている。

「お疲れ様です」

パト達はお辞儀をして温泉に向かった。

温泉に着くと、そこは露天風呂だった。満点の星空が夜空に浮かび、周りには白い雪が残っている。

身体を洗うと、早速湯船に浸かった。

外は凍える寒さだが、湯船の中はとても暖かい。雪で冷え切った身体がホカホカに温まる。

「はぁ、気持ちいなぁ」

三人は並んで細めになって浸かる。

眠くなってしまいそうなほど気持ちいい。

そうしていると、他の旅館に泊まっている客も入ってきた。

「ガーハハ!! 一番風呂!! ……って人がいたのか」

入ってきたのは金髪のマッチョな男の人。男の人は一番風呂だと思っていたが、パト達が入っていたので負けたとショックを受けていた。

「まあまあ、私たちもさっき入ったばかりですから」

パトがそう言っ て宥めようとすると、

「まあ、私はもっと前から入っていたんですけどね」

岩に隠れて温泉に入っている人がいた。先客がいたようだ。

一番風呂に入りたかった人はさらにショックを受けていた。

第 8 話 【雪山の温泉 其の 8】

せかへい 外伝 21

著者… p i r a f u d o r i a
作画… p i r a f u d o r i a

第 8 話

【雪山の温泉 其の 8】

温泉を出たパトの部屋に集まり、しばらく雑談をした後、ご飯ができたと呼ばれた。

「どんなご飯か楽しみね！」

カナーはそう言いながら廊下を歩く。

「ハイ、トテモ楽シミデス」

ヤマブキは最初からこれが目的だ。頭の中にはご飯のことしかない。よほど食事が楽しみなのだろう。一番先頭を歩いている。

「飯食ったら寝る前にもう一回温泉入ろうぜ」

エスはルンバにそう言っていると、

「お、いいな」

と返事をする。それを聞いていたエリスも、

「私もそうしよかしら」

と便乗した。

「ヤマブキさん、行き過ぎ！こっちだぞ」

廊下を進んで行き過ぎたヤマブキをパトが止める。食堂はこの角を曲がったところにある。

いい匂いがしてくる。パト達がワクワクして進んでいると、

「キャー！！」

突然、食堂の方から悲鳴が聞こえた。

「なんだ……」

みんなは動揺する。

「何かあったのかもしれない。急ごう」

パトはそう言い急いで食堂に行く。その後ろをみんながついていくと……。

食堂の入り口で赤い液体の上で倒れている女将さんの姿があった。

近くには他の客がおり、温泉で出会ったマッチョの人と、その彼女らしき女の人
がいた。さっきの悲鳴はこの女の人の悲鳴だったようだ。

しかし、

「これ……もしかして……………」

カナーが倒れている女将さんを見て言う。

「さ、殺人……」

カナーはエスに借りていろんな本を読んだことがある。その中で推理ものの小説も読んだことがあり、そのシーンが頭に浮かんだ。

悲鳴を聞きつけた他の客もやってくる。温泉に先に入っていた男の人と、それから少し遅れてスキンヘッドで女性の服を着た化粧まみれの男の人。

「おい、大丈夫か!!」

マッチョの人が女将さんに近づこうとした時、カナーが止めた。

「待って、これは事件よ!! 下手に触らない方がいい!!」

そう言ってマツチヨの動きを止めた。

「事件……だと………」

その場にいる全員は衝撃を受ける。

カナーは真面目な表情で言う。

「犯人はきっとこの中にいる!!」

そう自慢げに言った。その時!!

死体が動き出した。

「っ!？」

その場の全員はびっくりする。そんな中、女将さんは立ち上がると、

「……………ケチャップ運びながら寝てた」

「紛らわしいことするな!!」

女将さんは食事の時に自由に使っているようにケチャップを運んでいる最中に寝てしまったようだ。

そして倒れた時にケチャップを潰してしまい、ケチャップまみれの床の上で寝ていたらしい。

カナーは恥ずかしそうに顔を隠した。

第1話

【貴族の妹達に幸せを! (クリスマス) 其の1】

せかへい 外伝 クリスマス

著者… p i r a f u d o r i a

作画… p i r a f u d o r i a

第1話

【貴族の妹達に幸せを! (クリスマス) 其の1】

ヤザ村。そこはレンガ作りの建物が多く立ち並ぶ村だ。村の入り口には大きな道があり、そこを進むと村の中央にある広場に着く。

そこには英雄を題材にした銅像が置かれており、村の守護と繁栄を示している。

そんな中央からさらに進んだ先にある屋敷がある。村で一番大きなお屋敷。そこは村を収めている貴族ニーオン家のお屋敷だ。

ニーオン家は十二貴族と呼ばれる大貴族の一つであり、王族と同じく、魔法文明を作ったとされるマジーの子孫だと言われている。

そしてそのマジーの血を持つものが使えりとされる固有魔法。それを使いこなすこともできる。

さらにニーオン家は王族との繋がりが強く、現当主のゴード・アドラス・ニーオンはオーボエ王国とフルート王国の戦争の際に大きな功績を残しており、現在のオーボエ王国の王とは強い繋がりがあある。

そんなニーオン家。そこには三人の娘がいる。

屋敷の庭で剣を振る練習をしている黒髪短髪の少女。彼女の名前はミリア・アド

ラス・ニーオン。

ニーオン家の長女であり、今のニーオン家を継ぐことになっている。

正義感が強く、行動力もある。上品さには欠けるが、人々のことを考えて行動することができる心優しい少女だ。

ベッドの上で身体を休めながら、窓から娘の様子を見ていると、扉が叩かれた。

「入って良いぞ」

すると、中に入ってきたのは黒髪の小さな少女達。まだミリアに比べるとかなり小さい。

彼女達はサリスとミーニャ。

ミリアとは少し歳の離れた妹達である。

サリスはミリアに違い短髪だが、癖毛がありよく髪が跳ねている。ミーニャは肩まである髪で二人とは違い髪を伸ばしている。

「お父さん、見てください!!」

「これ面白い!!」

二人は双子であり、亡き妻が最後に残してくれた力である。

そしてベッドから腰を曲げて二人を見た。

ゴード・アドラス・ニーオン。今の屋敷の当主であり、この村を管理している。過去には大魔法使いとして王国で名を残した有名な魔法使いだった。

だが、戦争で身体を動かすことが困難になり、今は昔から体が弱かったが、戦争以降持病が悪化してしまい、こうして一日中部屋で過ごすことがほとんどだ。

「どうしたんだ？」

ゴードは二人が持ってきたものを見る。

サリスとミーニャはゴードに近づくと持ってきていた本だ。

「良い子にしていると、サンタさんがプレゼントをくれるんだって!!」

第2話

【貴族の妹達に幸せを! (クリスマス) 其の2】

せかへい 外伝 クリスマス

著者… p i r a f u d o r i a

作画… p i r a f u d o r i a

第2話

【貴族の妹達に幸せを! (クリスマス) 其の2】

屋敷の庭でミリアは剣を振っていた。ミリアは細い身体で自分の半分くらいある長さの剣を振る。

それを隣でバイズが見守っている。

バイズはミリアが数年前に出会った騎士であり、フルート王国が崩壊し、帝国になった時に国から追放された騎士だ。

フルート王国では聖騎士長を務めており、騎士組織のトップであった。ミリアに拾われてからは同じように帝国から追放された騎士を匿い、ミリアの騎士としている。

そしてバイズと同じく帝国を追われた騎士の中では盗賊になる者もいる。そんなものを捕らえることもやっている。

今はミリア直属の騎士として、ミリアの側近と騎士団の隊長をやっている。

しばらく剣を振っていたミリアだが、しばらく降り終えたと、剣を鞘にしまった。

「終わりですか？」

バイズが言うミリアは近くに置いてあった水を飲んでから、

「いや、まだだ」

そう言った後、水の入った水筒を地面に置くと、バイズに向けて剣を抜いた。

「バイズ。少し手合わせしてくれないか？」

それを聞いたバイズは驚く。

「大丈夫なんですか？ もう少し休んでからでも……」

「戦場ではそんなこと言えないだろ。それとも嫌なのか……」

バイズは自分の雇い主であるミリアに剣を向けることに抵抗があった。だが、それがミリアの命令ならば仕方がない。

「分かりました……」

バイズはミリアから少し距離を取るために歩く。そして少し歩いたところでミリアに停められた。

「そこで良い。………準備はいいか？」

ミリアはすでに剣を抜いている。バイズは腰にある剣に手をかける。

「はい、いつでも………」

「……じゃあ、開始だ」

ミリアは剣を持った状態で走る。そのスピードは武器を手にしているとは思えない速さだ。

そして走る時の姿勢はまるで忍者。

「……………っ」

気がつけばミリアはもうバイズの目の前にいた。

ミリアは剣を振る。それをバイズは剣を抜いて防いだ。ミリアは横に剣を振ったが、バイズは鞘から抜く動作で攻撃を防ぐ。

「油断していたな。馬鹿者が……」

ミリアはそう言い次の攻撃を仕掛ける。バイズはどうかミリアの攻撃を防ぐがミリアのスピードについていくので精一杯だ。

最初は剣を抜かずに軽く流して終わる気だった。しかし、ここまでミリアが強いとは想定外。

バイズはミリアの攻撃を防いでいるだけで攻撃をすることができない。

やがてバイズの剣はミリアによりバイズの手から離され、バイズは負けた。

第 3 話

【貴族の妹達に幸せを! (クリスマス) 其の 3】

せかへい 外伝 クリスマス

著者… p i r a f u d o r i a

作画… p i r a f u d o r i a

第 3 話

【貴族の妹達に幸せを! (クリスマス) 其の 3】

負けたバイズはちょっとしょげていた。しかし、ミリアの成長は嬉しい。

ずっと隣で見てきたのだ。そしてこれからもお守りするつもりだ。

バイズは剣をしまうと気になっていたことを聞いた。

「なぜ突然手合わせなどと言いだしたのですか？」

それもミリアが得意としている短剣の二刀流ではなく、通常の剣による腕試し。

「ああ、そうだな、そろそろお前にも伝えておこう。……手伝ってもらわなければならないしな」

「私にできることなら何なりと……。それでなんでしょうか？」

「サンタクロースを捕まえる!!」

それを聞いたバイズは首を傾げた。

「サンタクロース？ なんですかそれは？」

バイズには聞き覚えのない単語だ。新手のモンスターの名前だろうか？

「先日ある書物を読んだ。その中で異界にはこの季節にサンタクロースというおっさんが現れて、良い子にプレゼントをあげるらしい」

「ほお、また変わった話ですな」

ミリアは屋敷の方を見る。

「異界では良い子にプレゼントをあげるのに、なぜこの地ではそれが無いのだ。不公平ではないか」

「まあ、そうですね」

「だから私はそのサンタクロースというものをとっ捕まえて、我が妹達にプレゼントをあげされるのだ!!」

それを聞いたバイズはミリアのことが可愛く見えてきた。

さっきまで騎士である自分のことすら倒してしまったこと少女の、子供扱い一面を見た気がする。

そしてミリアの説明を聞いていたバイズはちょっとだけ思い出した。だからこそミリアが可愛く思えてしまったのだ。

前にフルート王国で騎士として働いていた時に、そのサンタクロースというものの話を聞いたことを思い出した。

その時は名前が間違えられていたのか、名前を聞いただけではしっくりとこな

かったが、説明を聞いて思い出した。

雪の降る季節に、赤い服を着た老人が子供達にプレゼントを配ると言う話。だが、それは異界でも作り話である。

実際にはサンタクロースという人物は存在せず、私達の想像上で存在しているだけである。

しかし、ミリアはやると言ったらやる人間だ。それにそういうものを信じているのが少し可愛いし、見守ってみたい。

「分かりました。でも、そのサンタクロースを捕まえに行くのですね」

「そうだ。だからお前も着いてこい。バイズ、私とお前ならどんな強敵であろうと、必ず屈服させることができる」

ミリアの中では、サンタクロースはどんな凶暴な存在とされているのだろうか。

第4話

【貴族の妹達に幸せを! (クリスマス) 其の4】

せかへい 外伝 クリスマス

著者… p i r a f u d o r i a
作画… p i r a f u d o r i a

第4話

【貴族の妹達に幸せを! (クリスマス) 其の4】

ミリアとバイズはサンタクロースを探しに、旅に出ることになった。

サンタクロースは雪の降る地に現れる。だから雪のある地にいるのだろうという
安直な考えで、大陸の北西にあるデンボ山に行くことになった。

「ここがデンプ山か……」

そこは巨大な山々と海の隣接する地域。大陸の最も西側にあり、この先にどんな世界が広がっているのか、まだ誰も知らない。

「ミリア様、こちらを……………」

そう言いバイズが渡したのは防寒具。通常の防寒具よりもさらに厚着のものだ。

今も布を何枚も重ねて寒さを凌いでいるが、ここから先はさらに寒くなる。この山の標高は大陸でトップ3に入る高さであり、頂上は大雪が降っている。

目的地はその頂上だ。そこにサンタクロースがいるかもしれない。

「ああ、お前も気をつけろ」

ミリアはバイズから防寒具を受け取ると、それを持って先に進む。

やがて山の頂上に近づいて来て、木の根には雪が残っていたりと、その寒さが感じられる場所にたどり着いた。

「なあ、バイズ……」

山を登っているとミリアが聞いてくる。

「私の妹達は良い子だよな」

「はい。とても良い子ですよ」

バイズはそのまま続ける。

「サリス様はミリア様の真似をするのが好きでよく剣を振る遊びをしています。ミニー様は最近本にハマられたようでよく読書をしていますね」

「そうか……」

バイズの回答を聞いたミリアはそう答えた。だが、バイズの方を向くことはない。そんなミリアにバイズは少し揶揄うように言った。

「ミリア様も良い子ですよ。ゴード様の代わりに村の人々の悩みを聞き、解決を探す。誰よりも立派な領主です。あなたに支えることができて光栄です。……きつと、サンタさんはミリア様にもプレゼントをくれますよ」

それをミリアは顔を真っ赤にして振り返った。そして、

「私のことなどは聞いていない!!」

そう言ってジャンプすると、バイズの頭を軽く叩いた。

そんな感じでミリア達は雪の積もる頂上にたどり着いた。雪も降っておらず、綺麗な頂上だ。

南西を見るとそこはずっ——と続く海が見える。北東には大地が広がっており、遠くの方には村が見えたりもする。

「サンタクロースは……いなかったか……」

ミリアはそう寂しそうに言った。

それを聞いたバイズは後悔した。ショックを受けさせることになるなら、最初か

らないと言っておけばよかったと……。

だが、

「……………ん、ちょっと待て」

山を降ろうとした時、ミリア達は木造の小屋を発見した。

第 5 話

【貴族の妹達に幸せを! (クリスマス) 其の 5】

せかへい 外伝 クリスマス

著者… p i r a f u d o r i a

作画… p i r a f u d o r i a

第 5 話

【貴族の妹達に幸せを! (クリスマス) 其の 5】

デンボ山の頂上に着いたミリアとバイズ。しかし、そこにはサンタクロースはいなかった。
だが、

「あれは……………」

そこにあったのは木造で出来た小さな古屋だ。

「もしかして、あそこにサンタクロースが住んでいるのか！」

ミリアはそう言いながら古屋を見る。ミリアの言葉を聞いたバイズは驚いた。

「ま、まさか、本当に……………」

サンタクロースは想像上の存在だ。だが、本当に存在していたとしたら大発見になる。

ミリアは腰にある剣に手を置くと、

「バイズ、行くぞ……」

そう言うのと古屋の方へとゆっくりと近づいていく。

「待ってください」

バイズもミリアの後ろを追いかけて古屋の方へと歩いていく。

古屋に近づくのと二人は身体を低くして、古屋の壁に引っ付く。

そしてゆっくりと窓から中を覗いてみた。

中も木造のテーブルや椅子が置かれて質素な内装だ。中には温度を管理することのできる魔道具も置かれている。こんな雪山に住んでいるのだから当然の装備だろう。

しかし、中に人影は見えない。

「ミリア様……いませんね」

「ああ、だが、さっきまではいたようだ。あれを見ろ」

ミリアはそう言うのとテーブルに置かれたマグカップを指した。

「あのマグカップからは湯気が出ている。入れた手だ……」

サイズが中を見ると、ミリアの言った通りマグカップからは湯気が出ている。ということとはさっきまではいたということだ。

しかし、この古屋の主はどこに行ってしまったのだろうか。

「古屋を一周してみるか……」

ミリアとバイズは古屋の周りを一周してみることにした。そして入り口の近くを通った時、何が発見した。

「……………み、ミリア様!!」

「なんだ……………っ!？」

そこで発見したのは雪に埋もれた人間だ。

「バイズ、すぐに救出しろ!!」

「はい!!」

バイズは雪に埋まっていた人間を引き摺り出す。ミリアはその間に古屋の中に入ると魔道具を起動させて古屋の中の温度を上げた。

「早く入れろ」

バイズは雪の中に埋まっていた人物を背負い、古屋の中へと入れる。
そして古屋にあったベッドに寝かせた。

しばらくしてその人物は起き上がった。

「ぐっ……………わしは今まで何を……………」

その人物は白髪に白い髭を生やした老人であった。意識を戻した老人にミリアは聞く。

「何があったんだ。……………サンタクロースに襲われたのか？」

それを聞いた老人は首を傾げた。

「サンタクロース？」

第 6 話

【貴族の妹達に幸せを! (クリスマス) 其の 6】

せかへい 外伝 クリスマス

著者… p i r a f u d o r i a
作画… p i r a f u d o r i a

第 6 話

【貴族の妹達に幸せを! (クリスマス) 其の 6】

「サンタクロース？」

老人は首を傾げる。

「わしは古屋の天井が壊れてたから補修をしてただけじゃ。………いやあ、お主達がきて助かった。あのままでは凍死しておったわ!! はははっー!!」

バイズは死にかけたというのに笑っていられるこの老人にため息を吐く。

ミリアはサンタクロースが現れたと思っていたが、違っていたとショックを受けていた。

「それでこんな山奥に何の用なんじゃ？」

さっきまで死にかけていたというのに元気な老人だ。もう立ち上がって冷めかけのコーヒーを飲んでいる。

「サンタクロースを探しにきたんだ」

それを聞いた老人は不思議そうな顔をした。

「サンタクロース？ それは新手もモンスターか、何かかな？」

まあ、大体その反応になるだろう。バイズはこの老人の反応に違和感はない。

「知らないのか！」

ミリアはテーブルを叩く。それを見て老人とバイズは驚く。

「い、いや、知らないのう」

老人はミリアに少し怯えてひいている。バイズもちょっとひいてしまった。

「サンタクロースはな!! 子供たちの希望の存在なんだ!!」

そう叫んだミリアは力説を始めた。サンタクロースがどのような存在なのか。どんなことをしてくれるのか。

ミリアの力の入った説明に思わず二人もワクワクしてしまった。

「どうだ!! これがサンタクロースだ!!」

ミリアは両手を腰に当てると、威張るように胸を張った。

それだけミリアはサンタクロースという存在を信じているのだ。

それを聞いた老人は「ふふふ」と笑った。

「そうか。じゃが、わしもサンタクロースには会ったことがない」

それを聞いたミリアは悲しい顔をする。だが、

「じゃが、お主は妹達にサンタクロースからのプレゼントをあげたいのじゃろ。それなら簡単じゃ」

そう言う老人は古屋の中にある木箱の中から布を取り出した。

「お主がサンタクロースになれば良いんじゃ」

それを聞いたバイズは首を傾げる。だが、ミリアは分かったみたいで、

「そうか!! そういうことだな!!」

と言って布を受け取った。

「わしも手伝う。衣装作りをしようじゃないか」

老人は裁縫セットを取り出した。そしてサンタクロースの衣装をミリアとバズ、そして老人の三人で作ることになったのであった。

しばらくして衣装作りが終わる。

「完成だ!!」

「そうじゃな。じゃあ、頑張るんじゃぞミリアサンタよ」

「おう!!」

第7話

【貴族の妹達に幸せを! (クリスマス) 其の7】

せかへい 外伝 クリスマス

著者… p i r a f u d o r i a
作画… p i r a f u d o r i a

第7話

【貴族の妹達に幸せを! (クリスマス) 其の7】

屋敷に帰ったミリアとバイズ。雪山で貰った衣装をミリアは自分の部屋に隠すと、今度は村へと向かった。

「何をなさるんですか？」

バイズが聞くとミリアは答える。

「サリスとミーニャのプレゼントをかうのよ！」

ミリアはそう言うのと村を歩き回る。ヤザ村にはいろんな店がある。その中から二人へのプレゼントを探すことにしたのだが……。

「うーむ、なかなか良いのが見つからないな」

ミリアは手を顎に当てて悩む。そんなミリアにバイズは質問する。

「玩具屋さんは見に行ったんですか？」

「ああ、そうだな。宝石とかよりは人形とかの方がいいか」

ミリアの回答を聞いたバイズは、やっぱりこの人も貴族なんだなあって思ったのであった。

玩具屋さんに行き、ミリアは猫と熊のぬいぐるみを買った。そして屋敷に帰るとそれをプレゼントの箱に入れた。

「結構は今日の夜だ。お前の任務はここまでだ。ありがとな、バイズ」

「いえいえ、妹様達も喜んでくれると良いですね」

こうしてミリアは夜になるのを待った。そして日が暮れて夜になる。クリスマス当日だ。

ミリアは老人から貰ったサンタクロースの服を着ると、プレゼントを持って屋敷

の中を移動した。

もう深夜であり、サリスとミーニャは寝ているはずである。暗い屋敷の中をミリ
アは移動する。しかし!!

「サンタクロース、まだかな？」

「もうすぐだよ！」

サリスとミーニャの二人は起きていた。

しかもサンタクロースを待っている。サンタクロースの服を着ているとはいえ、
この姿を見られてガッカリされたくない。

どうするか……。

ミリアが困っていると、後ろから肩を叩かれる。振り返るとそこにはバイズがいた。

「お任せください……」

バイズはそう言うと言とサリスとミーニャのいる部屋に入る。

「あ！ バイズだ!!」

「まだ起きてらしたんですか。そろそろ寝ないといけないですよ」

バイズはそう言うと言と部屋の蠟燭を消す。

これがチャンスだ。暗い状況なら顔をはっきりと見ることはできない。

ミリアは高速で移動して二人のベッドにプレゼントを置いた。バイズは蠟燭を消してそのまま二人を寝かしつける。これなら起きた時にプレゼントがある状態だ。

部屋を出て、二人を寝かし終えたバイズとミリアと合流した。

「お疲れ様です。ミリア様」

「助かったよ。バイズ」

そしてプレゼントを渡し終えたミリアは自室で寝ることにした。

そして次の日に起きると、ミリアのベッドの上にプレゼントが置いてあるので

あ
っ
た。
。

第 9 話 【雪山の温泉 其の 9】

せかへい 外伝 21

著者… p i r a f u d o r i a
作画… p i r a f u d o r i a

第 9 話

【雪山の温泉 其の 9】

食事を終えたパト達はそれぞれで好きなことをして時間を過ごしていた。

エスとルンバはまた温泉に行き、そのあとエリスも温泉に入っていた。

ヤマブキは一階にある広場で大きな窓から夜空を見ていた。その隣ではカナーとパトがボードゲームを借りてゲームで対戦していた。

エスとルンバは温泉に入っていると、壁の向こう側にある女子風呂の扉の開く音がした。

エスとルンバは小声で話し合う。

「おい、誰が入ってきたみたいだぞ」

「ん、それがどうしたんだ」

ルンバは気にしていない反応にエスはショックを受ける。

「さっきはパトがいたから怒られると言わなかったが、覗くチャンスだぞ!!」

「……………何言っただよ。言ってるだけでどうせやる勇氣はないんだろ」

「う、まあ、そうだけど」

ルンバにそう言われたエスは落ち込んで顎まで湯船に浸かる。

「でも、想像するだけでも興奮するだろ」

「それはお前だけだ」

「つまんないの」

旅館の広場では大きな窓があり、夜空を見ることが出来る。そこには大きなソファが三つほど間隔をあけて置かれており、ヤマブキは一番窓に近いところに座り星を見ていた。

近くにあるソファではパトとカナーがゲームをしている。白と黒の駒を設置して挟むと相手の色を変えることができるオセロというゲームだ。

これは昔別世界からやってきた者達から伝えられたと言われるゲームだ。

「うーむ、また負けた」

カナーは白だったが、パトにあとちょっとのところで負けてしまった。

何戦かしているが、パトの方が勝率が高い。カナーは何も言わずにもう一戦という感じで駒を設置する。

そんな中、ふとカナーはヤマブキの方を見た。

「そういえば、ヤマブキさんって不思議な人だよね」

「ああ、そうだな」突然現れて村に住み着いて。謎が多い人だけど、……ほっとけない人だな」

「パトはもしかしてヤマブキさんのこと気になるの？」

「ああ、ヤマブキさんについては謎なことが多い。どこから来たのか、何が目的なのか。でも、村から追い出すわけにもいかない。……村のみんなには感謝してる、ヤマブキさんを見守ってくれてて」

パトが礼を言っていると、カナーは、

「当然よ。それにヤマブキさんってなんかパトに似てる気がするんだよね」

「え、俺と？ どこが？」

「えーっと、なんていうか、雰囲気でもないんだけど。なんか言葉にしにくなもの」

「なんだよそれは……」

第10話

【雪山の温泉 其の10】

せかへい 外伝 21

著者… p i r a f u d o r i a
作画… p i r a f u d o r i a

第10話

【雪山の温泉 其の10】

旅館にやってきたパト、ヤマブキ、エリス、エス、ルンバ、カナーの六人。
雪で遊んだり、温泉に入ったり、美味しいご飯を食べたりして一日を過ごした。

そして翌日、帰る日がやってきた。

旅館の宿泊は一日。たった一日だったが楽しむことができた。村に帰るまではまた長い道になるので朝から帰りの支度をする。

「よし、忘れ物はないか？」

パトはみんなに確認する。みんなは各々で問題ないと発言したあと、馬車に乗った。

やはり寒い場所は辛いらしくヤマブキは服を何枚も着ている。

「ん、帰りは俺が馬車を操作するよ」

行きはずっとパトが馬車を動かしていた。そのためリンバは馬車の操作をしてく

れると言ってくれた。

「ありがとな！」

ルンバに礼を言って手綱を渡す。そして荷台に乗るとすでにエスが乗っていた。

「よっ！」

「お前はルンバを見習え」

そしてヤマブキ達も乗せると馬車は動き出した。女将さんは出発を見送ってくれた。また機会があれば、ここに泊まりたい。

馬車は雪道を進む。荷台から顔を出してパトはルンバに喋りかける。

「大丈夫か？」

「ああ、この程度なら問題ない」

通常の道ならルンバも慣れているが、雪道は久しぶりなので緊張しているようだ。

「何かあったら遠慮なく言えよ。手伝うから」

「おう！ならそこの役立たずのエスを捨てててくれ」

「りょーかい」

冗談で言うのと、寝かけていたエスが起きてツッコミをした。

「おい！」

こうしてこの旅は終わった。短い時間であったが彼らの大切な思い出になっただろう。

そして村に戻れば大量の仕事が待っているのだろう。

――――

ということで、今回のエピソードはおしまいです。今回の話はもうだったでしょうか？

楽しんでもらえたら嬉しいです。

何回か話によっては、内容を変えていたりします。まあ、キャラクター的に微妙な話は避けました。

と、今回の話ですが、他の外伝に比べるとパラレルワールドに近い話になっています。なので本編の時系列的には王国に行く前くらいですが、季節も違いますし、本編の時間的にそんな時間はなかったです。

なので今回は本編とは別の話と考えてもらえると嬉しいです。

こんな感じの外伝はいくつかあるので、ものによっては関係のあったりなかったり、気軽に見てもらえると嬉しいです。

それでは次回をお楽しみに!!

第1話 【襲撃ユキザル 其の1】

せかへい 外伝 22

著者… p i r a f u d o r i a
作画… p i r a f u d o r i a

第1話

【襲撃ユキザル 其の1】

いつも通り、村の警備を行なっているエスとルンバ。二人が門番をしている。

「あーあー、暇だなあ」

エスは門に背中をつけて休んでいる。

「暇なのは良いことだろ。問題がないってことだ。……あと、サボってると後でマティルさんに怒られるぞ」

そんなエスにルンバはそう言う。ルンバは真面目に門の前で槍を待って立っている。

そうして数時間時間が経過すると、草原の奥に白い何か走っているのを見つけた。

「おい、ルンバ、今何かいなかったか？」

「ん？ 何言ってるんだ？」

エスに見えたがルンバには見えていなかったようだ。

しかし、しばらくするとまた動く。白い物体が草原を動いている。

「おい、ルンバ、今度こそ見えたよな」

エスは見えたか聞くがまだルンバには見えていないようだ。

「何が見えたんだよ？」

見えたものをエスが説明する。

「こー、白くてすばしっこいの」

「それだけじゃわからん」

実際エスもそれくらいしかなかった。遠いというものもあるが、それ以上に動きが早いのだ。

しばらくすると、またそれが見えた。また一瞬だったが、少しずつ近づいてきているように感じる。

「今度こそ見えたよな？」

エスがそう聞くと、ルンバは頷いた。そして、

「ああ、見えた。あれはまずいな……。エス槍を持て」

ルンバは真面目な声でそう言う。

「どうしたんだ？ そんなビビって……」

エスはルンバがなぜそんなに焦っているのかわからない。

「あれはモンスターだ。それもかなり厄介なやつだ……」

「それはどんな？」

「ユキザルだ」

それを聞いたエスは笑う。

「ユキザル？ なんだよ、そいつは？」

エスはそのモンスターについて知らないようだ。

ルンバは槍を構えた。

「ユキザルはＣランクのモンスターだ。それもかなり凶暴で強い!!」

「なんでそんなモンスターが？」

「この前近くで冒険者達が討伐していたらしい。その生き残りが逃げてきたんだろ
う。とりあえずさっさと構えろ、死ぬぞ！」

ルンバに言われてエスはやれやれと槍を取る。その時、

「っ!!」

振り向くとルンバの前に白い猿がいた。

「ルンバ!!」

ルンバは槍を構えていたため、槍でユキザルを攻撃する。しかし、ユキザルは素早くルンバの攻撃を避ける。

そして少し離れると、その場で尻をかき始めた。

さっきまで目でギリギリ見えるほど遠い場所にいたのに、気がつくともうこんなところに。

エスもこれはヤバいと気づき、槍を構えてすぐに戦える体制になる。

「俺たち二人で勝てるのか？」

エスはルンバに聞く。

「やるしかないだろ」

第2話 【襲撃ユキザル 其の2】

せかへい 外伝 22

著者…pirafudoria
作画…pirafudoria

第2話

【襲撃ユキザル 其の2】

ユキザル。それはCランクに設定されているモンスターだ。

猿が元になったモンスターであり、サルを見た目をしている。見た目が白く、それは雪に適した体になっているからだ。

移動速度が速く、走るスピードは馬よりも速い。ユキザルから逃げようと馬に乗っても追いつかれてしまう。雪の上はさらに速さが上がると言われている。

さらにユキザルはかなり凶暴であり、獲物を見つければすぐに襲ってくる。

「ルンバ!! 大丈夫か?」

ユキザルに襲撃され、それをどうにかしたルンバ。

「ああ、問題ない。だが、こいつに攻撃を当てるのはなかなか厳しいな」

「マテイルさんと呼ぶか? 魔法なら範囲攻撃だから避けられないだろう」

エスの提案にルンバは首を振る。

「いや、呼びに行っている間にこいつは村に入る。そうすると被害が拡大する」

「なら、どうするんだ？」

「俺たちで倒す。そうするしかない」

もしもどちらかがこの場から離れれば、すぐにユキザルにやられてしまう。そうすれば村に侵入されるだろう。それだけは避けなければならない。

「だが、どうするんだ」

エスは聞く。それに対してルンバは、

「俺たちも魔法を使う……」

「魔法だと、だが、俺たちは日常用の魔法しか使えないぞ」

「力を合わせるんだ。一人じゃできなくても二人ならできることもある」

ルンバはそう言うと、槍を前に出して魔法計算を始めた。

「俺は風魔法を使う。エスは炎魔法を俺の後に使ってくれ」

「……わかった」

エスはルンバの槍に魔法計算を行う。そしてエスが炎をつけると槍の先が燃えた。

だが、これだけでは……。

エスがそう思った時、ルンバがユキザルに向かって走り出した。そこで槍に火をつけただけでないことに気づく。

ルンバは炎は糸を引くように火をつけた場所から移動している場所まで続いているのだ。

これはルンバの風魔法でエスの炎魔法がその場に残るように調節した。そして槍が動いてもその場所に炎が残る。

ユキザルは素早くルンバの攻撃を避けるが、ルンバの炎はやがて円を描きユキザルの逃げ場を奪った。

「これで逃げられない……。エス！あとは任せた!!」

ルンバは風の魔法をその場に残し、炎の壁を残すことで精一杯だ。

そこでエスが動いた。

炎の壁に囲まれて動けなくなったユキザルをエスは槍で突き刺した。

「討伐完了！」

槍で刺されたユキザルは魔素に戻り姿を消した。

ユキザルが討伐されたので、ルンバは魔法を解除した。

「ナイスだ、相棒」

「おう！」

第1話 【王国 其の1】

せかへい 外伝23

著者… p i r a f u d o r i a
作画… p i r a f u d o r i a

第1話

【王国 其の1】

オーボエ王国。そこは何百年も続く王国であり、歴史は古代の時代から続いている。

王族は魔法文明の祖と呼ばれるマジーの子孫であり、神の力を受け継いでいる。

現在の王の名はルーシル・フェリス。国民を大切にする立派な王であり、六人の子供がいる。

息子は三人、娘は三人。

第一王女はエリザベス。美しい女性であり、金髪的女性だ。冷静な判断力を持っており、固有魔法は自身の分身を作ることができる能力。

エリザベスは正義感の強い女性であり、固有魔法を使い王国の裏社会の住民を捕らえている。侵入捜査などをしていられると言われる。

第一王子アルベルト。頑強は身体を持ち、例代の王族でもトップクラスの戦闘センスを持っている。その戦闘センスと固有魔法である身体能力を上げることができる魔法で、今の王国には彼に勝てる騎士はいないと言われる。

しかし、単純な思考の持ち主であり、物事を楽観的に判断してしまうところがある。

現在の王には認められているが、国民からの評価は少し低い。

第二王子はジョージ。アルベルトとは違い、生まれつき身体が弱く。病弱であり外に出ることができなかった。しかし、頭がよく国の状態を見極める力もある。そして固有魔法は相手の感情を読み取ることができる能力で、相手の心理状況を知ることができる。

第一王女のエリザベスと仲が良く、協力して裏社会の人間を捕らえ、固有魔法を使い情報を得たりしている。

昔に比べれば今は身体の状態も良くなったが、あまり激しい運動はできない。それに運動のセンスもない。

第二王女はベアトリス。ワガママで自由な王女様。しかし、ジョージに似た固有魔法を持っているが、ジョージよりも細かな面まで知ることができて、それらにより人の悪意を知り、人との関わりを拒絶するようになる。

信頼している人物は限られており、特定の人間と自分の拾った動物しか信じてい

ない。国民からは大量の動物を従わせているため動物姫と呼ばれている。

第三王女はモルモレッド。おっとりした性格で姉達に比べると静かなタイプである。しかし、行動力があり、密かに行動を起こしていたりする。

固有魔法は一定範囲の人間を眠らせることができる。しかし、コントロールができないため使うことはない。弟以外には好かれていない。

第三王子はメロス。真面目で負けず嫌い。嘘をつくことのできない正直な王子。しかし、その代わり騙されやすく、ベアトリスにおやつを盗まれたこともあった。だが、彼自身はそれに気づいていない。

アルベルトに比べると運動能力は低いが、騎士と同等かそれ以上の力の持ち主。固有魔法は霧を作り操ることができる能力で、パワーではアルベルトに負けるが、戦術はかなりうまい。

第1話 【はじまり 其の1】

せかへい 外伝 24

著者… p i r a f u d o r i a
作画… p i r a f u d o r i a

第1話

【はじまり 其の1】

カナル様の命令により、ヤマブキはこの世界にやってきた。しかし、彼の意味はなく、ただ命令に従うということしか頭がない。

頭がぼーっとする。そして何も考えられない。ただ夢のような意識の中、身体が勝手に動いている。

この世界に降り立った時、そこは山の中だった。

日は山から顔を出している。朝だ。

カナル様の命令はこの先にある村に住むパトという少年に会うこと。そしてその少年と共に行動をし、彼を守るというもの。

ヤマブキはまず、そのパトという少年を探す必要があった。

ヤマブキは山の中を歩く。

今は自分が誰なのかもわからない。ただ目的のためだけに進む。

深い森を進んでいると、何かに呼ばれている気がした。

「……………お……………い……………こ……………おい」

どこから声が聞こえるのか。ヤマブキには分からなかった。だが、身体が勝手に動いた。

後ろを振り向くと、そこには金髪の少年がいた。ヤマブキよりも少し歳下だろう。身長は一回り低く、全身が隠れるくらい大きな黒いマントを羽織っている。金髪の髪は目にかかるくらい長い。

「おい、その青いの、聞こえてるか」

やっと何を言っているのか聞こえた。そしてヤマブキが振り向くと、少年はヤマブキのことを睨みつけてきた。

「ツチ、聞こえてるならさっさとこっちを向きやがれ」

ヤマブキは謝ろうとするが声が出ない。そして自分の意思とは別に声が出た。

「何ノヨウデスカ」

それは自分の声だ。しかし、喋ろうとしていた言葉も違う。自分であって自分ではない存在が身体を動かしているようだ。

少年は回り込むように歩くと、ヤマブキが向かっていた方向を塞いだ。

「それはこっちのセリフだ。この先に何のようだ」

少年はヤマブキを警戒しているようだ。少年の問いにヤマブキは答える。

「帕特・エイダー、トイウ少年ヲ探シテイマス」

それを聞いた少年は身体をビクツとさせた。何かを知っているようだ。

「パト……だと……あいつに何のようだ？」

「彼ヲ守護シニ来マシタ」

「守護……だと？」

ヤマブキの回答に少年は興味を持つ。

そしてヤマブキも自分から出た言葉に驚いていた。

自分がなぜここにいるのかも分からない。その少年も知らない。そのはずなのになぜそんなことを言ったのか？

そして記憶の中にはしっかりと、そのパトという少年の顔が浮かぶ。知らないは

ずなのに知っている。何だか気持ち悪い感覚だった。

「ほう、少し話を聞かせてもらいたいな」

少年はそう言った。

第2話 【はじまり 其の2】

せかへい 外伝 24

著者… p i r a f u d o r i a
作画… p i r a f u d o r i a

第2話

【はじまり 其の2】

カナルにより地上に降り立ったヤマブキだが、パトを探している最中に金髪の少年と出会った。

その少年はヤマブキの行く手を止めて、どこに行くのか聞いた。パトを探していると伝えたヤマブキにその少年は興味を持ったと言ってきた。

「ついて来い」

少年はそう言うと言マブキの前を歩き、森を進む。

ヤマブキはパトの居場所が大まかにしか分からない。そのため何か知っていそうなこの少年について行くことにした。

二人がしばらく歩いていると、少年は足を止めた。

「あんたが何者かは分からない。だが、村に危険を及ぼす可能性のある者は排除する」

それを聞いた山吹は逃げるべきと判断した。何が何だかはわからない。だが、ここにいるのは危険だと思ったのだ。

しかし、身体が動かない。ヤマブキはその場から動こうとしない。

「やれ、イングリッド」

少年がそう言うのと木の上から仮面で顔を隠した少女が降ってきた。

少女は落下しながら、

「私に命令するな」

と言い。

ヤマブキが素早く振り返るが、ヤマブキが行動を起こすよりも早く少女はヤマブキの左肩、腰、右足と落下しながら順番に触れた。

すると、触れられた部位からヤマブキの身体がおかしくなる。

体重が何倍にも感じられる。

ヤマブキはその重さに耐えきれず、地面に倒れ込んだ。

イングリッドと呼ばれた少女は倒れたヤマブキの背中を踏みつける。

「おい、グラオス。こいつは何者だ」

そして少年に聞いた。グラオスは答える。

「分かん。だが、怪しい奴だ。裏組織の手先かもしれん。情報を聞き出そう」

ヤマブキの身体は動かない。これはイングリッドに触れられた影響だろう。

山吹がどうしよう!! と焦っている、

ヤマブキの身体に異変が起こる。ヤマブキの腕の一部が不思議なもので覆われる。そして腕にガトリングガンが現れた。

ヤマブキは腕だけを動かして、二人に向けてガトリングガンを撃つ。

突然の反撃だったが、二人は素早く後ろに飛び上がり回避した。

しかし、まだ身体は自由にならない。逃げる二人に向けて乱雑にガトリングガンを放つ。

グlausは魔法でマントを高質化させて弾丸を弾いて防ぐ。イングリッドは空中に飛び上がると身体を捻りながら空中を無重力空間を動くようにして避けていた。

ヤマブキの弾丸は近くの木にも当たり、木は倒れる。

「無茶しやがる……」

グラオスは弾丸を弾きながらヤマブキを睨んだ。

第3話 【はじまり 其の3】

せかへい 外伝24

著者… p i r a f u d o r i a
作画… p i r a f u d o r i a

第3話

【はじまり 其の3】

ヤマブキは身動きが取れない。しかし、地面に寝そべったまま、イングリッドとグラオスに向けて弾丸を放った。

二人は弾丸を防いだり回避している。

「無茶しやがる……」

グラオスはマントを高質化させてヤマブキのことを睨んだ。

イングリッドは重力魔法を使い、空中を飛び回りながらヤマブキの弾丸を避ける。

近くの木も倒れ、二人が近づけずにいると……。

森の奥から巨大なモンスターが現れた。それはゴブリンをそのまま巨大化させたようなもので、人型であるが緑色の皮膚を持ち、牙を持っている。

だが、身体の大きさはゴブリンの十倍以上、一階建ての家と同じくらいの大きさである。

「こいつは……」

グラオスはそのいつを見ると驚く。イングリッドはグラオスに近づくと、

「このモンスターが討伐依頼とあった巨大モンスターだな」

そう言った。

ヤマブキもそのモンスターの登場で攻撃を止める。

グラオスはモンスターを警戒すると、

「その女は後だ。先にこいつを討伐する。手を貸せ、イングリッド」

「分かっている。このために来たんだ」

二人はモンスターと対峙した。

巨大なモンスターは手に金棒を持っており、それを持って襲いかかってきた。

イングリッドは空へと飛び上がる。グラオスはその場でマントを広げた。

モンスターがグラオスに向けて金棒を振り下ろす。グラオスはマントを広げて、マントで自分の身体を覆い隠す。

布で金棒が防げるはずがない。しかし、

金棒はマントに弾かれた。

だが、この光景はさつきもあった。グラオスはマントでヤマブキの弾丸を防いで

いたのだ。

「俺のマントは鋼鉄よりも硬い」

モンスターは金棒が弾かれて、身体をよろける。その隙にイングリッドは空へ飛び上がると、ふわりふわりといつも間にかモンスターの頭上にいた。

モンスターの顔をイングリッドは二度蹴る。

蹴られたモンスターは顔を金棒を持っていない手で抑えて後ろによろめいた。

イングリッドは一度グラオスの側に降り立つ。

そしてグラオスに聞く。

「こいつ、私たちが出るほど強いかな？ 私たちが出るほどでもないと思うが……………」

グラオスもそれに賛同したようで、

「ああ、これなら水晶（クリスタル）でも対処できる」

そう言った。

冒険者にはランクが存在する。冒険者としても貢献度によってそのランクは上がる。

下から

水晶（クリスタル）

翠玉（エメラルド）

紅玉（ルビー）

蒼玉（サファイア）

白金（プラチナ）

剛金（ダイヤモンド）

だが、その称号を得ることができるものかなり難しく。70パーセント以上が称号を得られない。

選ばれた30パーセントの冒険者が称号持ちとして戦っているのだ。

第4話 【はじまり 其の4】

せかへい 外伝24

著者… p i r a f u d o r i a
作画… p i r a f u d o r i a

第4話

【はじまり 其の4】

巨大なゴブリンのようなモンスターがイングリッドとグラオスを襲う。

しかし、グラオスはモンスターの攻撃を防ぎ、その時できた隙をイングリッドが使ってモンスターに攻撃した。

グラオスとイングリッドは不思議に思う。それは依頼内容よりも弱かったのだ。

このモンスターはここよりももっと北の地で発生して、それからずっと活動している。

多くの冒険者を倒していたと聞いていたが、それにしても弱すぎる。

「確かに巨大だが、三十人も被害が出る？」

イングリッドはそう言った。

多くの冒険者にも被害が出た。まだ村には被害は出ていないが、これからその可能性もあるため、イングリッドとグラオスが呼ばれたのだ。

しかし、モンスターはしばらくふらふらした後、

大きな声で叫び声を上げた。

イングリッドとグラオスは耳を塞ぐ。

「うるさいな……」

次の瞬間、グラオスの身体が吹っ飛ぶ。そして十本以上木を吹き飛ばした後、グラオスは止まった。

「……っ!!」

イングリッドは魔法を使い、宙に浮く。

グラオスを吹き飛ばした攻撃が、イングリッドも襲うがどうにか空中で避けてイ

ングリッドは高く空中に飛び上がった。

「何が起きたんだ……」

イングリッドが下を見ると、そこにはさっきもモンスターの死体があった。だが、おかしい。

「なんだ、あの傷は………」

モンスターの腹に大きな穴が空いていたのだ。

だが、イングリッド達はモンスターの腹を攻撃した記憶はない。

そしてそれ以前にもそんな傷はなかった。

イングリッドが空中にいと、吹っ飛ばされたグラオスが地上から叫んだ。

「イングリッド、後ろだ!!」

イングリッドが後ろを振り向くと、

「っ!？」

そこにはさっきのモンスターよりも一回り小さいモンスターがいた。身体は痩せ細っているが身長は高く。緑色の肌にツノも生えている。そして背中にはハエのような羽が生えていた。

「なんだこいつは……」

モンスターはさっきのモンスターが持っていた金棒を持っており、それでイングリッドに攻撃を仕掛けてきた。

モンスターの攻撃は目に見えないほど早く。普通なら避けることはできないだろう、だが、イングリッドは魔法はそれを可能にする。

「私と空中戦をする気か……」

イングリッドは軽量化と重力化を使い戦う冒険者だった。しかし、それをさらに研究し、あることに気がついた。

その二つの魔法は重力を操作しているのだと……。

実際には質量は変わらない。だが、重さだけ変わっている。それを知ったイングリッドは独自の魔法を作った。それが重力魔法。

第5話 【はじまり 其の5】

せかへい 外伝 24

著者… p i r a f u d o r i a
作画… p i r a f u d o r i a

第5話

【はじまり 其の5】

空中でイングリッドはモンスターと戦っていた。どちらも空中で素早い機動力を持っている。

だが、単純なスピードならモンスターの方が早い。

「っ……………」

イングリッドはどうか魔法での工夫でモンスターの攻撃を避けている状態だ。

だが、空中にいるイングリッドにはグラオスは何もすることができない。

グラオスは魔法で飛ぶこともできない。

飛び道具もあの高さでは届かない。

「イングリッド、一旦降りて来い。二人で戦った方がいい」

グラオスがそう叫ぶと、イングリッドは

「くっ、貴様の提案に乗るのは気持ちに乗らないが。これは仕方がないな……」

モンスターは攻撃を避けながらどうにか地上に近づく。しかし、それをモンスターが追ってくる。

簡単にはグラオスの元へはいけない。

だが、

「この距離なら大丈夫だ」

モンスターが木の高さまで降りてきたところで、グラオスは魔法を使った。両手を広げると、魔法陣を展開する。

「空気石（エールロシエ）」

すると、グラオスの左右に二つずつ空気の塊ができる。それは長方形の形をした

四角い空気の塊。

「イングリッド、行くぞ」

グラオスはその空気の塊を発射する。

その空気の塊がモンスターに当たると、モンスターの身体にペツタリとくつつく。
そして、

「重力魔法」

イングリッドがそう言うのと、モンスターに刺さった空気の塊が突然重くなった。
イングリッドはモンスターに空気が当たる前に空気の塊に触れていた。

モンスターは空気の塊が重くなったことで飛行に支障が出る。

動きが鈍くなったところを、イングリッドが攻撃する。

モンスターの後ろに回り込むと、連続で蹴り攻撃を仕掛ける。

モンスターは振り向くが重さで動きが遅くなっているため、イングリッドのスピードについていけない。

イングリッドは再び回り込むと、モンスターに蹴り攻撃をした。その攻撃でモンスターは地面に落下する。

地上にはモンスターの落下を待っていたグラオスがいた。

グラオスは地面に触れると、

地面をさらに硬くした。モンスターはその硬くなった地面に落ちた。

大きな音が出て、地面にモンスターは転がる。

だが、まだ消滅しない。

グラオスがもう一度地面に触れると、今度はモンスターのいる周囲の地面が爆発するように弾けた。

モンスターはその爆発に巻き込まれる。だが、

「まだやれないか……」

グラオスがそう言うといングリッドも降りてきた。

「一体、なんなの……あれは……」

第6話 【はじまり 其の6】

せかへい 外伝24

著者… p i r a f u d o r i a
作画… p i r a f u d o r i a

第6話

【はじまり 其の6】

モンスター討伐の依頼を受けて、搜索をしていたイングリッドとグラオス。しかし、途中でこの世界に送られていたヤマブキと出会う。

ヤマブキから情報を得ようとしたグラオスだったが、討伐依頼にあったモンスターへの襲撃を受ける。

最初は余裕であったが、モンスターの腹から別のモンスターが現れる。そのモンスターと交戦する二人であったが、なかなか手強いのであった。

砂埃の舞う中、モンスターは立ち上がる。体に目立つ外傷はない。

「……………こいつ……………A級よりも遙か上、それもS級でも上位の方だ」

グラオスはモンスターを見てそう言った。

モンスターにはランク付けがされる。F〜Aランク。世間一般ではそのモンスターが公表されている。

しかし、称号を持つ冒険者の中にはSランクのモンスター討伐依頼が存在する。

F〜Dランクまでは駆け出し冒険者や村の防衛隊が対処できるレベル。C〜A

は冒険者でも経験のある者、Aは熟練の冒険者が対処できる。

という形でランクが作られている。

しかし、実は熟練冒険者でも手強いモンスターSランクが存在する。

それは国家や世界規模の危険なモンスターであり、称号を持っている冒険者でも討伐するのは難しい。

「応援を呼ぶ？」

イングリッドは少し身体を宙に浮かせながら言った。

「そうしたいところだな……お前の足も気になるし……」

グラオスはそう言ってイングリッドの足を見た。モンスターに蹴りの攻撃をしてからだろうか、イングリッドの足は大きく膨れて腫れてきた。

「……………これくらいは問題ない」

イングリッドはそう言って強がるが、

「あまり強がるな。……毒だろ」

グラオスはそう言った。

グラオスはマントの中から小瓶を取り出す。

「とりあえずこいつを塗っておけ……。痛み止めにはなるはずだ」

そしてイングリッドに投げつけた。イングリッドは小瓶を受け取る。

「……………すまんな」

イングリッドが礼を言ったところで、モンスターが動き出す。
モンスターは身体についた土を払うように身体を振る。
その振り方はまるで犬のようだ。

イングリッドは腫れた場所に薬を塗りながら言う。

「あのモンスター。見たことある？」

イングリッドの問いにグラオスは首を振る。

「いや、知らないな……」

「そう……少し考えたんだけど、可能性として人工的に作られたモンスターという

可能性もあると思う？」

「さあな。だが、まるでキメラみたいな身体だしな。可能性としてはありそうだな」

第7話 【はじまり 其の7】

せかへい 外伝 24

著者… p i r a f u d o r i a
作画… p i r a f u d o r i a

第7話

【はじまり 其の7】

モンスターがこちらに向かい走ってくる。

「来るぞ」

グラオスはそう言う Mantle を広げた。

「分かっている」

イングリッドはしゃがむと地面に手を触れる。

そして魔法陣を展開すると、魔法を発動させた。

すると、モンスターの周りの地面から小さな石が浮かび上がる。それと同時にモンスターは羽を使って飛んで移動していたが、突然方向感覚がおかしくなり、地面に突撃してしまった。

Mantle を広げたグラオスの Mantle の内側から縄が出てくる。それはモンスターの方へと伸びていくと、モンスターを地面に貼り付けるように拘束した。

ただの縄だ。しかし、グラオスが魔法で何倍にも強度を上げている。

だが、

「まさか……………」

モンスターは力ずくでグラオスの縄を破る。

「強度は鉄よりも硬いんだぞ」

「鉄檻でも閉じ込められないってことだな」

グラオスが驚く中、イングリッドは冷静に分析する。

「私の重力魔法にも適応し始めてる。これはそろそろまずいかな……………」

イングリッドの魔法の効果は続いている。しかし、モンスターはイングリッドの魔法が発動しているのに立ち上がる。

まだ完全には適応していないが、少しずつ慣れてきているのは確かだ。

皮膚には毒がある。接近戦は好ましくない。作戦も残り少ない。だが、グラオスは笑った。

「追い詰められれば、追い詰められるほど燃える。面白いな」

グラオスにイングリッドは少し驚いたが、

「そうだな。これこそ戦いって感じだ」

そしてイングリッドは宙に浮くと、近くにある木に向かって飛んだ。そして木に触れると、次々と木を浮かせる。

それを見たグラオスはイングリッドを追いかけて、イングリッドの飛ばした木に手で触れる。

そして十本ほど浮かしたら、イングリッドはモンスターに向けて木を飛ばした。三発は受けたが、そこから先はイングリッドの重力に対応できたのか、空を飛んで木を避ける。

モンスターが飛んで行ったのは、

「グラオス!!」

グラオスの方だ。グラオスは地面から土を手にとると、

その土を空中にばら撒く。モンスターは突撃して金棒を振り下ろしてくるが、土で壁を作りグラオスは攻撃を防いだ。

反撃のために二人はそれぞれ動く。イングリッドはしゃがみ、グラオスはマントの中から何かを取り出そうとする。

だが、二人よりも早く。モンスターは回り込んだ。

土の壁を回り込み、グラオスに金棒を振り下ろそうとしてきた。

「っ!？」

その時、銃声と共にモンスターの動きが止まる。連続で鉄の弾がモンスターに当たり、モンスターはその弾丸に押されてグラオスから離れていく。

そしてモンスターは一度空に飛ぶと、距離を取った。

「貴様、なんのつもりだ」

ヤマブキは腕から弾丸を発射させていた。

第 8 話 【はじまり 其の 8】

せかへい 外伝 24

著者… p i r a f u d o r i a
作画… p i r a f u d o r i a

第 8 話

【はじまり 其の 8】

グラオスに襲いかかるモンスター。それを止めたのはヤマブキであった。

「貴様、なんのつもりだ!!」

グラオスが聞くとヤマブキは腕を元に戻しながら答えた。

「ココハ共闘スベキト判断シメシタ。ソレダケコノモンスターハ脅威ニナリマス」

グラオスは嫌そうな顔をしたが、すぐに決断した。

「仕方がない。手を貸せ!!」

グラオスはヤマブキと共に戦うことを決める。

「イングリッド、こいつの手も借りる」

グラオスがイングリッドに伝えると、

「聞こえている。足を引っ張らせるなよ」

そう答えた後、手のひらに小さな魔法陣を手のひらに展開すると、小さな竜巻を作った。

重力で作られた磁場の竜巻。風ではなく、引力がぐるぐると回転しており、真ん中では電気が発生しているのかバチバチしている。

イングリッドはそれをモンスターに向かって放った。最初は掌サイズだったが、モンスターに向かって飛んでいくにつれて大きくなり、最終的にはモンスターを覆うほどの大きさになった。

しかし、モンスターはダメージを受けている様子はない。

そしてモンスターはその攻撃を受けていたというのに、その竜巻から簡単に抜け出して、イングリッドの方へと飛んでいく。

イングリッドは空中を浮遊して逃げようとするが、モンスターの動きの方が早い。

モンスターが追いついて、イングリッドに攻撃をしようとするが、モンスターの背中をミサイルが直撃する。

ミサイルはモンスターに当たると爆発して、そのままモンスターを地面に叩きつけた。

グラオスはモンスターの元へと走ると、モンスターの頭上に飛び、空気を固める。そして長方形の空気のかくを作ると、モンスターに落とす。

その数は二つ。グラオスはその二つの空気のかくに足の乗せて立つ。体重でモンスターを抑えた。

だが、グラオスの体重だけで抑えられるはずもなく。モンスターが立ち上がろうとすると、グラオスはふらつく。

「おっとっと……」

グラオスはジャンプして地面に着地した。

モンスターは立ち上がる。やはりダメージを与えられている感じはない。

「何か弱点を見つけないと、どうにもならないな……」

グラオスはモンスターを見ながらそう言った。

「弱点デスカ……」

「弱点だな」

ヤマブキとイングリッドも考える。しかし、このモンスターにはどれだけ攻撃しても手応えがない。本当に弱点なんてあるのだろうか。

「しかし、やるしかないよな……」

第9話 【はじまり 其の9】

せかへい 外伝24

著者…pirafudoria

作画…pirafudoria

第9話

【はじまり 其の9】

ヤマブキはモンスターに向けて弾丸を放つ。しかし、効果がないようでそのままモンスターはヤマブキに向かって突進してきた。

「っ!!」

グラオスがヤマブキの前に立ち、マントを広げる。そして硬くなったマントでモンスターからの攻撃から守った。

「油断するんじゃないねー」

グラオスがそう言うと同時に、モンスターの体重が何百倍にもなり突然モンスターが地面に倒れた。

イングリッドが二人がいる反対側で魔法を使い、モンスターの動きを止めたのだ。

グラオスはヤマブキの手を掴むと、モンスターから少し距離を取る。

今のところ、三人がどうにか包囲してモンスターの動きを制御しているところだ。もしも一人でもやられれば、戦線が崩壊して全滅しかねない。

ヤマブキはグラオスに連れられている時にあることを言う。

「弱点ヲ見ツケマシタ」

それを聞いたグラオスは驚く。

「本当か!？」

「ハイ。シカシ、参考ニナルカドウカ」

「それは後で考える。とにかく教えろ」

ヤマブキは戦闘中に発見した。モンスターの弱点についてグラオスに教える。

「皮膚ハ硬ク、ドンナモノニモ適応スル。シカシ、適応スル度ニ身体ガ変化シテイル」

モンスターは高重力にもすぐに対応できる。万能な適応力を持っている。しかし、適応できるのはすぐではなく、時間が必要なのだ。

しかも、身体を適応させるためには身体を変化させる必要がある。そしてその時、

「身体ハ脆クナリマス」

それを聞いたグラオスも今までの戦闘を振り返って考える。そしてヤマブキが言っていることが正しいと考えた。

「よし、そういうことなら……」

グラオスはヤマブキがモンスターを惹きつけているうちに、ヤマブキが言っていたことをイングリッドにも伝える。

そして、作戦を立てた。

「イングリッド、やれ!!」

「だから、命令するな」

ヤマブキが弾丸で惹きつけているうちに、イングリッドはモンスターの体重を何倍にも上げる。

すると、モンスターは一度重力に耐えられず、コケるように地面に倒れた。

しかし、すぐに適応してしまう。そのため、

「次はこうだ」

イングリッドは今度は体重を軽くする。そうしたらモンスターの身体は風に飛ばされて少しだけ宙に浮く。

そしてモンスターが慣れる前に今度はまた重くした。モンスターが地面に叩きつけられたと同時に、グラオス近くの木を硬くしてモンスターに倒す。

モンスターは木に押し潰される。しかし、まだ生きている。

そこに、

「発射」

ヤマブキの集中砲火。どうにかモンスターを倒すことができた。

第 10 話 【はじまり 其の 10】

せかへい 外伝 24

著者… p i r a f u d o r i a
作画… p i r a f u d o r i a

第 10 話

【はじまり 其の 10】

モンスターを討伐することができたグラオス達は少し休んでいた。

イングリッドはモンスターの毒でやられた足をグラオスに見せる。

「うーん、じゃあ、これを飲め」

そしてグラオスは緑色のジュースをイングリッドに渡した。

「な、に、これ……………」

イングリッドは嫌そうな声でそのジュースを受け取る。

「それは解毒効果のあるジュースだ」

「本当に大丈夫なのか？」

「俺は医者勉強をしたことがある。それとかなり優秀な家の出だ。そこは変の医者よりは信用できるぞ」

「家出してきた奴が、それを自慢するか……………」

イングリッドはヤマブキとグラオスに見られないようにして仮面を外して、ジュースを飲んだ。

「にが……」

「だが効く」

イングリッドは素直にいうことを聞いてジュースを飲み切る。

絶対に顔を見せようとしないうイングリッドを見てヤマブキがグラオスを聞く。

「ナゼ、顔ヲ隠スンデスカ？」

「さあな。元いた組織とか、家柄とか、色々噂はあるが何も教えてくれない。……………素顔は美人って噂もあるがな。冒険者の中だとちょっと人気があつたりするらしい」

「ソウナンデスカ」

それを聞いたヤマブキはイングリッドに聞いてみる。

「美人ナンデスカ？」

それを聞いていたイングリッドは吹き出して恥ずかしがる。

「何言ってるんだ!!」

イングリッドは飲み終わったコップをグラオスに渡すと、

「それで今は仲良くしてるけど、この女はどうするんだ？」

イングリッドはヤマブキについてグラオスに聞く。最初は拷問をして正体を知ろうとしていたが。

「……………一度共闘した仲だしな。それにこいつは悪い奴じゃなさそうだし……………」

グラオスはそういうと立ち上がる。

「途中まで案内してやるよ。サージュ村は俺の故郷だし……………」

そしてヤマブキを連れて行くことにした。

最初は怪しんでいたが、一緒に戦っているうちに悪さをしようとしているわけで

はなさそうだと、そう感覚的に思った。

確信ではない。しかし、何かあってもあそこには信頼できる人がいる。問題はな
いだろう。

そしてグラオスとイングリッドは村の近くまで案内した。まだ村は見えていない
が、二人が案内できるのはここまで、他の依頼があるからだ。

「あそこには俺の妹がいるんだ。リーラっていうんだが、会ったら仲良くしてやっ
てくれ」

「ハイ」

「それじゃあ、またな」

グラオスはそう言い背を向けた。そんなグラオスの背中を見ながらイングリッド

がヤマブキに伝えた。

「あいつが人にここまで仲良くするのは珍しい。久しぶりに楽しそうなあいつの姿を見た。……元気でな」

そしてイングリッドも空を飛んでいってしまった。

第1話 【ガーラ奮闘記 其の1】

せかへい 外伝 25

著者… p i r a f u d o r i a
作画… p i r a f u d o r i a

第1話

【ガーラ奮闘記 其の1】

冒険者。それはギルドに属して仕事を行う者達であり、ギルドの試験に合格したもののみ渡される冒険者カードを持つ者である。

村単位での依頼をこなすために武器や魔法の使用が許可されており、騎士とは違い国には属さない特殊な職業である。

そんな冒険者の一人。赤い鎧を着て、背中には片手用の斧を背負っている。

そんなガーラの後ろをついてくるのは、新人冒険者の三人組。

金髪の少年リトライダー。オレンジ髪的女性ミエ。そしてスキンヘッドのダズだ。

彼らはガーラを師匠と慕い度に勝手に同行している。

ガーラはある事情があり、今は一人で活動をしている。冒険者の殆どがパーティを組んで、依頼をこなす中、ガーラを一人で依頼を達成してきた。

そしてそんなガーラに与えられた称号が、水晶（クリスタル）。

だが、この三人はその称号に釣られてきたわけではない。というか、この三人が

そのことを知っているのかすら怪しい。

だが、あんやかんやで慕ってくれるこの三人と一緒にいるのは悪い気はしなかった。

そんなある時、ギルドから依頼を受けた。

「はい、ガーラさんにしか頼めない依頼で……」

そう言って渡されたのはモンスター討伐の依頼だ。それもかなり強いモンスター。

今はまだあの三人には見つかっていない。

「あの、あの方達も連れて行くんですか？」

ギルドの職員に聞かれる。それはおそらくあの三人のことだ。

「いや、今回の依頼はあいつらには身が重い。あいつらには内緒にしてくれ」

そしてガーラはあの三人に内緒で依頼のモンスターを討伐しに行った。

討伐依頼があったのは蜘蛛系のモンスター。そして苦戦しながらもどうにか倒すことができた。

巨大な蜘蛛が地面に倒れる。しかし、

「っ!!」

ガーラは蜘蛛の糸で引っ張られる。引っ張る方向にはもう一匹のモンスターがいた。

まさか、もう一匹いるとは……。

依頼では一匹しか発生していないはずだった。これは調査隊が見逃していたのか。

ガーラは斧を振り、糸を切ろうとするが、糸があるのは背中で糸が届かない。

このままではやられてしまう。

その時であった。

「ガーラ師匠!!」

三人が現れた。ダズとミエがモンスターを惹きつけて、リトライダーは糸を切るとガーラを解放する。

「なんできた……」

ガーラが聞くと、三人は

「あなたの弟子ですから」

そう言った。

無茶する奴らだ。だが、助かった。

ガーラは斧を振る。

「お前たち、準備はできてるな！ 行くぞ!!」

第1話

【盗賊のプハッー!! 其の1】

せかへい 外伝 26

著者… p i r a f u d o r i a

作画… p i r a f u d o r i a

第1話

【盗賊のプハッー!! 其の1】

オーボエ王国にあるある酒場で二人の男が酒を飲んでいた。

「プハッー!! こいつは染みるぜ!」

青髪に青いバンダナの男はそう言って酒を飲み干した。その向かい側では薄茶色に角刈りの男が、串に刺さった肉を食べていた。

「それでミニバン、今日の儲けはどれくらいだったんだ？」

青髪の男が角刈りの男に聞く。ミニバンは肉のなくなった串を青髪に向けた。

「金貨四枚……」

それを聞いた青髪はあちやちやって顔をした。

「プハッー!! やっぱり奪うならあの女からだったか」

そう言って青髪は悔しがる。しかし、そんな青髪にミニバンは、

「あの男を襲えって言ったのはアプーだろ」

と言う。アプーはそれを言われて、頭を抱えた。

「だがよく、相手は女だぜ、襲えるかよ……」

アプーがそう言うと、ミニバンは串を齧りながら、

「まあ、そうだよな。俺たちには無理だな……」

二人は盗賊だ。昔は冒険者を目指していたが、冒険者試験に落ちて、それから色々あって盗賊になった。

しかし、二人は今まで一度も、女性をターゲットにしたことがない。

それは彼らが紳士だからではない。女性に武器を向ける勇気がなかったのだ。

アプーとミニバンが酒場で話していると、二人のテーブルに一人の女性が割り込んできた。

「ほーん、またその程度しか得られなかったのか」

その女性は二人の手に入れた金貨を見て、そう言いながら馬鹿にしてきた。

「あ、てめー！！！！」

アプーは入ってきた女性を睨む。女性はミニバンの食べていた串を一本奪うと食べた。

「あ、俺の……」

ミニバンは奪われた串を哀しく見つめる。

赤髪にバンダナを巻いた女性。

そしてアプーとミニバンが女性を襲うことに恐怖を覚えるようになった原因。

「プハッー!! 何しに来やがった、グラニット」

彼女の名前はグラニット。二人の先輩の盗賊だ。

グラニットはミニバンの肩に手を回し、がっしりと掴む。ミニバンは怯えるようにアプーの方を見た。

「おいおい、先輩に向かって、何しに来やがったはないだろう。お前達が熊の爪

（オングル・ウルス）の罨張りに入りそうになった時、助けてやったのは誰だと思ってるんだ」

グラニットはそう言い、ミニバンの首を絞め始める。ミニバンは涙目になりながらアプーに助けを求める。

「プ、プハッ、何しに來たんですか？ グラニット先輩」

「それでよろしい」

グラニットは満足すると、ニコニコしながらミニバンのことを離れた。

第2話

【盗賊のプハッー!! 其の2】

せかへい 外伝 26

著者…pirafudoria
作画…pirafudoria

第2話

【盗賊のプハッー!! 其の2】

オーボエ王国の端。そこには王国の手の届かない場所があり、そこには荒くれ者が集まっていた。

その酒場に三人の盗賊が集まっていた。

「それでグラニット先輩はどうしてここに？」

アプーが聞くとグラニットはミニバンから奪った串を食べ終えて、皿の上に置いた。

ミニバンは寂しそうになくなった串を見ている。

グラニットはニヤリと笑うと、

「ちょっと面白そうな宝を見つけてな。お前達も手伝え」

そして二人にそう伝えた。

「面白そうな宝？」

ミニバンは首を傾げる。

グラニットはポケットから紙を取り出す。そしてそれをテーブルの上に置いた。それは写真で三枚の写真がある。

そこには髭のおじさんの写真と、大きな屋敷の写真、そして水晶の写真だった。

「プハッー!! なんだこれ？」

アプーは写真を手にとって見ながら、グラニットに聞いた。

ミニバンも写真を見る。そして屋敷を写真を見ると、

「この屋敷、確か王国の近くにある屋敷だ……」

グラニットは答える。

「ここの屋敷にあるこの水晶。それがちょっと高価な物でな。そいつを手に入れたい。そしてそれをお前達に手伝ってもらいたいんだ」

最初は嫌がっていた二人であったが、報酬もしっかりともらえるということ、その宝を盗み出す計画に手を貸すことにした。

月もない夜に、三人の盗賊は集まった。

「プハッー!! この屋敷か……」

オーボエ王国から数キロ離れた場所にその屋敷はあった。道はしっかりと作ら

れており、レンガ道があるがそこに集まると見つかってしまうため、裏口の森に集まった。

「お前たち、準備は良いか？」

グラニットが聞く。グラニットは頭にバンダナを巻いていて、黒っぽい服を着て軽装だ。腰には短剣をぶら下げている。

「プハッー!! 問題なし」

「大丈夫だ」

二人は頷く。

ミニバンは軽装に腰に短剣。アプーも同じく短剣だ。

三人は侵入を開始する。

「よし、ここから行くぞ」

三人は裏から屋敷に侵入する。屋敷は三メートルほどの大きさの壁に囲まれている。

「よし、お前達もそこでしゃがめ」

「……………」

グラニットは二人にしゃがむように指示する。

「何をさせようと……………」

ミニバンは嫌な予感がして聞くと、

「足場にする」

グラニットはそう偉そうに答えた。

仕方がなく二人はいうことを聞くことにした。ここで逆らっても良いことがないからだ。

そして屋敷に侵入することができた。

「よし、あとはあの水晶を探すだけだ」

第3話

【盗賊のプハッー!! 其の3】

せかへい 外伝 26

著者… p i r a f u d o r i a

作画… p i r a f u d o r i a

第3話

【盗賊のプハッー!! 其の3】

ある水晶を盗むために屋敷に侵入したミニバンとアプー、そしてグラニット。彼らは屋敷の中を探索していた。

「それであの宝はどこにあるんだ？」

ミニバンは屋敷の中を静かに歩きながら、小さな声で聞いた。

それに対して、グラニットは小さな声で答える。

「この屋敷には地下室があり、そこに宝物庫があるらしい。そこにあるだろう」

グラニットはそう言い、地下室を探す。そしてしばらく屋敷の中を探し回り、やっと地下室を見つけた。

「この下に宝物庫があるはずだ」

グラニットは地下室の階段を降りる。ミニバンたちもついていくんだが、ミニバンは一つ気になることがあった。

「なあ、そういえば、アップー」

「なんだ？」

「グラニットはどうやってこの宝の情報を手に入れたんだろうな」

「プハッー！ 分からん、だが、ま、どっかから調べてきたんだろ」

そして地下室にたどり着いた。

地下の宝物庫にはいろんな宝がある。それを見た二人は目を輝かせる。

「こ！これは!？」

それは宝の山々。

「プハッー!! おい、グラニット、本当にその水晶だけがお前の手柄でいいのか？
これ全部俺たちがもらっても？」

「ああ、構わん、私の欲しいのはこいつだけだ」

グラニットはそう言い、水晶を手にとった時、

降りてきた階段から足音が聞こえた。そして男の人の声。

「うーん、不審な魔力を感じて来てみれば……ネズミが入り込んでいるではないか」

「っ!!」

グラニットは短剣を抜いて走り出す。そしてミニバンとアプーを押して退ける。

そしてその後すぐに金属音が響きた。

「ほほお、なかなかの使い手ですな。お嬢さん」

二人を切りつけようと、すでに男は剣を抜いて攻撃していた。それをグラニットが素早く防いだのだ。

「あ、危なかった」

「プハッー！ 助かったぜ」

二人はグラニットに押し倒されて何かと思ったが、すぐに状況を理解して礼を言った。

アプーもミニバンもそこその実力も持ち主だ。しかし、背後から攻撃されたと

いうのに気づくことができなかった。

「グラニット!!」

ミニバンはそれを伝えようとするが、

「分かってる」

グラニットはミニバンが何を言いたいのか分かったようだ。

「貴様……何者だ………」

グラニットは攻撃を仕掛けて来た男に聞く。すると、男は答えた。

「俺か……俺はラピッドとでも名乗ろうか」

そう言い男は長い髪をかき分ける。そしてラピッドと名乗った。

第4話

【盗賊のプハッー!! 其の4】

せかへい 外伝 26

著者… p i r a f u d o r i a
作画… p i r a f u d o r i a

第4話

【盗賊のプハッー!! 其の4】

屋敷の宝物庫にたどり着いた三人であったが、そこにラピッドと名乗る男が現れた。

「何の用だ？ お前もこの宝を狙う輩か？」

ミニバンが聞くとラピッドは首振る。

「うーむ。私は君たちみたいなチンケな盗賊とは違う。私はこの屋敷の主からこの宝物子を守るように言われているのさ」

そう言うラピッドは髪をばさっとさせた。そしてカッコつける。

だが、このラピッドは騎士や冒険者という感じではない。裏世界での剣士だ。剣術や服装からもそうだが、アプーとミニバンはこの男を見たことがある。

それは王国にある手配書だ。

このラピッドは騎士殺しの罪で追われている。しかし、なぜそんな男がこの屋敷の宝物庫を守っているのか……。

グラニットはラピッドに短剣を向けた。

「やはりこの宝は奴らと繋がりがあるんだな」

ラピッドはグラニットの言葉を聞き、グラニットの持つ水晶を見た。

「ほう、その水晶を狙っていたか……。そしてその水晶の価値を知っているとは……」

ラピッドは剣を握り直す。

「まあ、良い。どちらにしろ。どんな侵入者でも始末する。それが俺の仕事だ」

ラピッドはグラニットに斬りかかる。そのスピードは早く。目で追うのがやっとのスピードだ。

グラニットはラピッドの剣を受け止める。短剣であるのにそれでラピッドの剣を止められるグラニットの腕はかなりのものだ。

「ほほお、やりますなあ」

ラピッドはそう言いながらグラニットに剣を振り続ける。グラニットはどうか防いでいるが、ギリギリの状態だ。

「グラニット!!」

ミニバンとアプーも短剣を抜くと、ラピッドの背後に回り込んだ。

「お前ら……」

「プハッー！俺たちも加勢するぜ」

ミニバンとアプーも戦闘に参加する。

「三人とは卑怯な……」

グラニットだけを相手しているだけなら、圧倒していたラピッドであったが、三人を同時に相手にするのは辛いらしく、距離を取った。

「プハッー、卑怯ねえ、盗賊は卑怯な行為をしてこそだぜ」

ラピッドは最初に二人を始末できなかったのが、ここに来て状況を悪くした。しかし、あることに気づいた。

「お前ら、その女の正体を知っているのか……」

ラピッドはミニバンとアプーにそう告げる。

グラニットはその水晶の正体について知っている。ならば、この二人はその仲間なのか、そう最初は考えていた。

しかし、この二人は水晶の話をしている時、知っている様子はなかった。

「その女はなあ」

ラピッドが言いかけた時、

「言うな!!」

ミニバンとアプーが同時に叫んだ。

第 5 話

【盗賊のプハッー!! 其の 5】

せかへい 外伝 26

著者… p i r a f u d o r i a
作画… p i r a f u d o r i a

第 5 話

【盗賊のプハッー!! 其の 5】

「その女の正体はなあ」

ラピッドが言いかけた時、

「言うな!!」

ミニバンとアプーが止めた。

ミニバンとアプーはグラニットよりも前に出た。そして武器を構える。

「分かってる。グラニットが何者かなんて……」

「プハッー！ だが、それでも良いんだ。俺たちみたいな奴を助けてくれた、この人だからなあ」

そしてラピッドに斬りかかる。ラピッドはどうか攻撃を防ぐが、かなり厳しい状況だ。

「ぐう、……これは厳しい……」

ラピッドはそう言うと、出口の方へ飛ぶ。

「報酬は減ってしまうが仕方がない。金よりも命の方が大事だからな」

ラピッドは地下室を出ていく。追おうとするミニバンとアプーを

「待て……深追いはするな。それで十分だ」

そう言って止めた。

そのあと、グラニットは水晶を持って館を出る。ミニバンとアプーも持てるだけの財宝を持って外に出た。

「いやー、今日は大量だー！」

「プハッ！これもグラニットのおかげだな」

二人はそう言って喜んでいるが、グラニットはさっきの出来事があってから静かだった。

「グラニット……………」

二人は心配して声をかける。グラニットは下を向いて言った。

「気づいていたのか……」

それを聞いた二人は両手を前に突き出した。

「プハッ！、気づいているのは俺たちだけだ。そして俺たちを捕らえれば、口封じ

もできる」

「そうだぜ、ほら捕まえな」

しかし、グラニットは首を振る。

「その必要はない。……私は盗賊だからな」

ミニバンとアプーと別れたグラニットは水晶を持って王国のある路地にいた。路上で周りを見渡し、誰もいないのを確認すると、魔道具を取り出した。

この魔道具は他の魔道具と通信することができる魔道具だ。距離はあまり長くないが、建物二、三軒程度の距離なら届く。

「……聞こえるか。ああ、任務は成功した。無事に水晶も手に入れた。水晶はここに置いていく。回収を頼む。……………問題ない、まだ誰にもバレていない。……………あの二人はまだ利用できる。それに本質はこちら側だ。……………はい、では」

グラニットは魔道具をしまう。そしてその場から立ち去ろうとした時、空から人が降りて来た。赤いフードを着た男だ。

「よう、盗人……」

さつきまで誰もいなかった。いや、屋根の上にいたのか。

グラニットは警戒する。

そんな中、フードの男は歩いてくる。グラニットは剣を抜こうとするが……。
身体が動かない。

「ぐ……………」

グラニットは何もされていないはずなのに、地面に倒れる。そして朦朧とする意識の中、

「グラニット!!」

二人の声が聞こえた気がした。

第1話 【エスの病 其の1】

せかへい 外伝 27

著者… p i r a f u d o r i a
作画… p i r a f u d o r i a

第1話

【エスの病 其の1】

俺の名前はエス。サージュ村で門番をやっている。村人だ。

俺は今ちょっとした病にかかっている。それは……………恋の病だー!!

俺は仕事を終わると、汗を流すために村にある銭湯に向かう。

扉を開けると、まだ夕方よりも前だからか、人は少ない。そんな入り口を掃除している少女。

緑髪の肩まである髪を縛り、邪魔にならないようにしてせっせと働いている。彼女の名前はカナ・エリア。この銭湯の経営者の娘であり、エスの友人でもある。

お客さんが来たとカナは元気よく挨拶をするが、エスだと気づいたら声が徐々に小さくなった。

「いらっしゃあ〜、ってエスカ」

カナがエスを見る目はまるでゴミを見るかのような目である。そんな目で見たエスは身体を震わせる。

「うちに来ないで、冷水でも浴びれば良いのに」

カナーの追い討ちにエスは湧き上がる感情を止められなくなった。

エスはカナーの前で土下座する。

「付き合ってくれ！」

「やだ」

エスはそんな会話をした後、銭湯に入る。温かいお湯で冷えた身体を温める。そして門番の仕事での汗を流した。

お湯に浸かっていると、扉が開いルンバが現れた。

「よ！ エス」

「おう、お前も来たのか！」

エスは仕事帰りだが、ルンバはこれから仕事らしい。仕事の前に一度身体を流しに来たのだ。

「なあ、ルンバ……」

「ん、なんだ？」

ルンバが頭を泡立てながら洗っていると、エスがお湯に浸りながら喋りかけてくる。

「カナーの奴、俺のこと嫌いなのかなー？」

それを聞いたルンバは少し考えた後、

「そういうことじゃないと思うぞ」

そう答えた。ルンバは水を溜めておいた桶で頭の泡を流す。

「そうなのか？」

「カナーは人に合わせるのが得意だから。お前のノリに合わせてくれてるだけ」

「いや、それはまんまだろ」

「え……」

ルンバは今度は石鹸を取って身体を洗い始める。

「ま、どうにか頑張ってみろよ。本気なんだろう？」

ルンバがエスにそう聞くと、エスは頷く。

「そうだな。この気持ちは嘘じゃないな」

| |

今回は日常回的なやつです。

会話的にはルンバがそう考えてるってだけだから、カナーがどう思っているかは分かりません。実は嫌われてる？

エスとルンバは基本的に二人で門番をしていることが多いですが、交代で行うこともあります。

スケジュールはマティルが作ってる。

第1話

【ユキザル討伐クエスト 其の1】

せかへい 外伝 28

著者… p i r a f u d o r i a
作画… p i r a f u d o r i a

第1話

【ユキザル討伐クエスト 其の1】

ある村のギルドに四人の冒険者が集まっていた。

金髪の男リトライダー。オレンジ髪の女ミエ。スキンヘッドの男ダズ。茶髪の男
ガーラ。

ギルドにある掲示板からガーラが持ってきた紙を二人に見せる。それはクエストだ。

ギルドでは冒険者に猫の搜索からモンスター討伐まで様々な依頼を用意している。

民間の人がギルド経由で依頼しているものやギルドが地域の問題解決のために依頼しているクエストなど依頼元も変われば、報酬も変わる。

「……………これは討伐クエストですか」

ガーラの持ってきたクエストを見たミエはガーラにそう言った。

「ああ、そうだ。討伐対象はユキザル。Bランクのモンスターだ」

それを聞いたダズは少し嫌な顔をした。

「ユキザルですか……俺役に立てなそう……」

それに比べてリトライダーはテンションが上がっているようだ。

「ユキザルだと……去年はスピード勝負で負けたが、今年こそは勝ってやる!!」

ユキザル。それは猿をベースとしたモンスターである。白い身体が特徴であり、雪に同化することから冬の季節にのみ現れる。

身体は五十センチ程度の大きさで小柄なモンスターであるが、その特徴はユキザルの身体能力である。

ユキザルの移動速度はモンスターの中でもトップクラスであり、そのスピードは

同じスピードに特化したベアウルフにも匹敵する。

それに雪の上での移動性能が高く。雪でどれだけ足場が不安定であろうと、そのスピードは衰えることはない。

それに攻撃力も高く。ユキザルは強力な爪を持ち、それで相手を引っ掻くのだ。その爪は出し入れが自由であり、それに爪の威力は丸太を真っ二つに切断してしまう。

スピードに特化したモンスターということで、リトライダーはやる気が出ているが、ダズはちょっとやる気がない。

それもリトライダーはスピードには自信があるのだ。冒険者で自称最速をいえるほどに自信がある。

冒険者試験の時はそのスピードを活かしたことで合格できた。

しかし、ダズはスピードに自信がない。移動速度の速いモンスターを捕らえるのが苦手で、どうしてもスピード負けしてしまう。

だが、その代わりに攻撃力が高く。一撃で岩のできる。だが、当たらなければ意味がない。

ガーラはそんなダズを見て、

「お前にはお前のやるべきことがある。それをやれば問題ない」

そう伝えた。それを聞いたダズは少しか元氣を取り戻す。

「はい!!」

第2話

【ユキザル討伐クエスト 其の2】

せかへい 外伝 28

著者… p i r a f u d o r i a
作画… p i r a f u d o r i a

第2話

【ユキザル討伐クエスト 其の2】

ユキザルというモンスターの討伐クエストに向かうことになったガーラ達。
ユキザルの目撃情報のあった森へと向かう。

森には雪が積もっており、少しでも油断すると……

「あ……………」

ミエが膝まで雪の中に足を沈める。

「大丈夫か？」

リトライダーが手を伸ばしてミエを引っ張り出す。

ミエは雪の中から足を出すことができたが、靴の中に雪が入り冷たい。

「冷たい……………でも、ありがとう、リトライダー」

そう言ってリトライダーのいた方を見ると、リトライダーは頭から雪に埋まっていた。

雪の中でモゴモゴと助けを求めている。ミエを助けた後、そのまま勢いで倒れてしまい、雪の中に突っ込んでしまったみたいだ。

「……………」

ミエは少し考えた後、

「ねえ、ダズ、これどうする？」

ダズに聞いてみることにした。

「ほっとけば良いんじゃないすか」

「そうね。そうしましょ」

リトライダーは雪の中で暴れていた。

| | | | | | | | | | | | | | | | | |

しばらく進むと、ガーラが足を止める。

「いたぞ」

ガーラはそう言うと言と背中に背負っていた片手斧を手を持つ。ガーラの指示に従い、リトライダー達も各々の武器を持った。

リトライダーはナイフ程度の大きさの短剣の両手に一本ずつ。ミエは木製の杖。

ダズは鋼鉄製のグローブを手にはめた。

ガーラはモンスターを発見したみたいだが、まだ三人はわかっていない。

ガーラは魔法を使い常に周囲を警戒していた。それによりモンスターの気配を感じ取ることができたのだ。

だが、リトライダー達にはその魔法が使えない。そのためモンスターを察知できないのだ。

「どこにいるんですか？」

リトライダーは足音を立てないようにしてガーラに近づいて小声で聞いた。

ガーラはゆっくりと斧で前を指す。

「この先だ」

ガーラが示した方を見てもまだモンスターは見えない。だが、ガーラがそう言っているのだ。いるのは確かだろう。

ミエはガーラの差した方を見ながら言った。

「ユキザルは雪に同化する。感知魔法を使えない私たちが近づくのは危険ね」

ミエの発言を聞いたガーラは頷くと、

「その通りだ。見えない敵を相手にするのは難しい。普段なら俺一人で討伐してくるところだが……………」

ガーラは鎧の中から魔道具を取り出した。

「ユキザルに関しては俺一人だと厄介だ。この魔道具を使って今回は討伐するぞ」
そして三人にその魔道具を渡した。

第3話

【ユキザル討伐クエスト 其の3】

せかへい 外伝28

著者… p i r a f u d o r i a
作画… p i r a f u d o r i a

第3話

【ユキザル討伐クエスト 其の3】

リトライダーとミエ、そしてダズはガーラの指示に従い、魔道具を指定された位置に設置した。

ガーラに渡された魔道具は手のひらサイズの長方形の魔道具。

それをガーラの魔道具を合わせて、四角形を作る形で設置した。そして設置し終えたと、ガーラはリトライダー達に戻ってくるように指示した。

それに従い戻った後、ガーラはもう一つの魔道具を手を持っていた。

「この魔道具は？」

ミエは聞くがガーラは答えない。

三人はこの魔道具を知らない。だが、何らかの使い道があるのだろう。

ガーラが取り出した魔道具はリモコンだ。そしてそれを操作してボタンを押す。すると、四人が設置した魔道具が起動して、それを角にして結界が貼られた。

「こ、これって……………」

「あれっすよね」

その魔道具を見たリトライダー達は驚く。そして見覚えがなかった理由をわかった。

リトライダー達は冒険者だ。そのため一定の場所に留まることはない。金もないわけではないが、仕送りしていたり、道中は必要ないため預けていたりする。

ガーラの魔道具は結界が完成した後、結界内が暖かくなり始めた。

「これがあの魔道具っすか」

冬になると金持ちの家や金のあるお店では、暖房魔道具を使用する。結界魔法で温かい空気を閉じ込めて寒い風を入れない。

そして炎魔法を調節した魔石により、結界内の温度が上昇するのだ。

「ユキザルは温度喧嘩に弱いからな。今回はギルドから借りてきたんだ」

ガーラはそう言った。

ギルドでは魔道具の販売やレンタルをしている。その一つとして借りてきたのだ。

この暖房の魔道具は拠点を持たない冒険者には必要のないものだし、クエストにも必要にならない。

それに値段もそこそこするため使う冒険者は少ない。

だが、ガーラはユキザルの討伐にこの方法を使う。ユキザルはガーラでも倒すのが困難なモンスターだ。

そのためこのようにユキザルの弱点を突くことで、ガーラはユキザルを討伐してきた。

しかし、ユキザルの時にこの作戦を使うと、魔道具を設置している間に逃げられてしまうこともある。この魔道具は角に設置する必要があるため時間がかかるのだ。

だが、リトライダー達がいれば、ユキザルの逃げ場もないし、魔道具も素早く設置できる。

「よし、あとはユキザルを討伐するだけだ。この結界は人間やモンスターなどは出たり入ったりできる。逃すなよ！」

「はい!!」

第4話 【ユキザル討伐クエスト 其の4】

せかへい 外伝28

著者… p i r a f u d o r i a
作画… p i r a f u d o r i a

第4話

【ユキザル討伐クエスト 其の4】

十匹のユキザルが一斉に動き出す。敵に見つかったことで動揺したのか、バラバラに走り出す。

モンスターは群れをなすのは珍しい。モンスターは魔素の集合体であり、特定の

行動を行う。そのため群れをなすことはほとんどない。

ユキザルも群れで動くモンスターではない。しかし、ユキザルは行動範囲が広いわけではなく、同じ場所で発生したモンスターが固まっていることが多い。

今回もそういうことであり、ユキザルが十匹同じ場所にいた。

群れで動く習慣はないため、ユキザルはバラバラに逃げる。ガーラ一人ではこうやって逃げていくユキザルを仕留めるのは難しいだろう。

走って逃げていくユキザルをガーラは斧を一振りして、三匹同時に倒す。そしてもう一振りして二匹を倒した。

だが、残り五体のユキザルが逃げていく。

しかし、

「こっちだ!!」

リトライダーが軽量化を使い、二匹のユキザルの首を短剣で切る。リトライダーの攻撃は攻撃力が薄いというのが弱点である。

しかし、こうやってモンスターの弱点を狙い、耐久力の少ないモンスターを相手にすれば倒すことができる。

これにより残りは三体。

「私もやるよ!」

ミエは杖を前に向けると、空気の塊を飛ばす。

「空気の弾丸（バル・エール）」

空気の弾丸が発射されると、一匹目のユキザルの身体を貫通して、二匹目も倒れた。

そして最後の一匹、

「ダズ!!」

三人はダズの方を見る。ダズは最初にユキザル討伐と聞いて不安そうだった。しかし、ガールにそれぞれの役割をこなせと言われてから、少し気が和らいだ感じだった。

ユキザルは走って結界の外へと向かう。温度変化で弱くなっているとはいえ、ダズでは追いつけないスピードだ。

ならば、

「こいつでどうすつか!!」

ダズは身体強化をした身体で地面を殴りつけた。それにより地面が揺れてユキザルは体制を崩す。その隙にすかさずに、ダズ近くになった木にしがみつく。

そして力一杯木を持ち上げて、何倍もある木を引っこ抜いた。

「うおおおおお!!」

ダズはその木を持ち上げた後、足場が不安定になり動けなくなったユキザルに向けて振り下ろした。

ユキザルはぺっちゃんこになって討伐できた。

「よくやったな。ダズ」

リトライダーはそう言っているとダズの背中を叩く。

ガーラは残りのモンスターがいらないのを確認すると、ダズの峰へと近づいてきた。

「お前にはパワーがある。それを活かさせたな」

「はい!!」

第1話 【氷の女王 其の1】

せかへい 外伝 29

著者… p i r a f u d o r i a

作画… p i r a f u d o r i a

第1話

【氷の女王 其の1】

アングレラ帝国は魔法の使用を禁止している。その理由は魔法によりモンスターの発生や魔素による人体被害があるからだ。

そのため基本的には人力で物事を行い、国として機能させている。

そんな帝国だが、唯一魔法の使用が認められている存在がいる。それが賢者と大賢者である。

大賢者はそれぞれが専門部門の行政を行なっており、それに必要な魔法の使用を認めている。そしてそれを補佐するのが賢者の役割である。

こうしてアングレラ帝国は政治を行い、国を守っているのだ。

「あつい、あついのお〜」

白い着物に身を包んだ水色の長髪の女性。髪は後ろで結んでおり邪魔にならないようにしている。

女性は汗を掻きながら机に倒れ込むように座っている。

「あつゝ、なんで妾がこんなところに」

彼女の名前はクリスタ・L・リードレアム。アングレラ帝国の賢者の一人だ。特に魔法は氷の魔法であり、その美貌と氷魔法を使うことから周りからは氷の姫と呼ばれている。

彼女が部屋でだらけていると、扉が開き一人の男が入ってきた。

身体に鱗があり、まるで魚人のような男。スーツを着ているが筋肉の多い肉体のせいでパツパツに見える。背中にはギザギザしたノコギリのような大剣を背負っている。

「おおぅ!! クリスタ!! 元気か!!」

「其方のせいでもっと死にそうになった」

この魚人のような人間はガレッド・シャーク。クリスタと同じく賢者である。昔に魔素に体を侵されてしまい、モンスターのような肉体になってしまった。

だが、鱗の身体は刃物すら弾き、水中でも呼吸をすることができる。それに通常の人間の倍以上の身体能力を持っており、重い武器でも軽々と振り回す。

「ガハハ!! 相変わらず暑いのが苦手みたいだな!!」

「其方の暑苦しさも苦手じゃよ」

クリスタはガレッドが来たというのに机に顔を引っ付けたまま倒れている。

ガレッドは大剣をテーブルに立て掛けると、部屋に置いてあったうちわを見つめ

た。

「これで仰いでやろうか？」

それはクリスタが持ってきたものである。しかし、うちわで自分を仰いでいても
疲れるし、身体が熱くなるだけだった。

「……………じゃあ、頼もうかのう」

ガレットはそのうちわを持つと、力一杯上下させる。

すると、クリスタに突風が吹く。それによりクリスタの髪はぐちゃぐちゃになっ
てしまった。

「何をするんじゃ……………」

「すまん、力入れすぎた」

第2話 【氷の女王 其の2】

せかへい 外伝 29

著者… p i r a f u d o r i a

作画… p i r a f u d o r i a

第2話

【氷の女王 其の2】

クリスタとガレットが椅子に座り待っている。ガレットはノコリギのようにギザギザと尖った刃のついた大剣を磨いている。クリスタは暑さにやられて机に突っ伏すように倒れていた。

「暑い、暑すぎじゃ」

「そうやってやってるから暑いんだよ。何かに集中してれば気にならないぞ」

「そうは言ってもやることなんてないしのお」

クリスタはそう言い、ぐだーつとしている。そんなガレットは向かいに座りながら武器を拭く。

「というか、そんなに暑いか？今はそんなに暑い時期じゃないぞ。夏になったらもっと暑いからな」

ガレットがそう言うのと、クリスタはぬるっと腰を上げた。

「夏は冷凍施設から出ないからのお、お主にとっては適温かもしれぬが、妾には辛

いのじゃ」

そしてまた倒れた。

ガレッドはクリスタのいつもの生活しているスペースを思い出す。

クリスタは帝国の奴隷管理の仕事と倉庫の管理をしている。基本的には倉庫の管理であり、冷凍室で食料などの保存を行う。

奴隷に関しては冷凍室での拷問のようなものを行い、抵抗する氣力を失くさせる。それがクリスタの行う仕事である。基本的にクリスタが生活しているのは冷凍室であり、自身の魔法で冷気を溜めた倉庫で暮らしている。

基本的には引きこもっており、よっぽどのことがないと外には出てこない。

クリスタは普段から温度の低い場所にいる。そのせいで通常の温度では暑いと感じてしまう。

「おい、そろそろジェイ様が来るぞ。もう少ししっかりしろよ」

「良いじゃろおー、まだ来てないんじゃないし、というか早く帰りたいのお」

そんな会話していると扉が叩かれる。そして扉が開くとそこから金髪の少年が現れた。

その少年を見たクリスタはビクツとして、すぐに姿勢を正した。

「ジェイ様!!」

入ってきたのはジェイ・アウン。アングレラ帝国で唯一に魔法の使用を許された

大賢者の一人であり、奴隷管理を行なっている。

クリスタやガレッドはジェイの部下であり、ジェイの補佐を行なっている。ジェイは二人の上司にあたる。

ジェイは部屋の中を見渡す。そして二人を見た後、

「フェスがないようだな」

と言った。フェスとはクリスタやガレッドと同じくジェイの部下の賢者である。しかし、そのフェスが見当たらない。

ガレッドは立ち上がると、ジェイに説明する。

「フェスは仕事が忙しいようで来れないみたいです」

ガレットはジェイにそう伝えた。

第3話 【氷の女王 其の3】

せかへい 外伝29

著者… p i r a f u d o r i a
作画… p i r a f u d o r i a

第3話

【氷の女王 其の3】

集まった賢者と大賢者達は会議を始めた。今回の会議ではフェスが参加できず、クリスタ、ガレット、ジェイが行う。

このような会議は他の大賢者達も行っており、それぞれの部署で行われている。

「それで今回の奴隷の状態だが、どうだ？」

ジェイはテーブルに肘を置いて聞いた。それに対してクリスタが答える。

「問題ないのお、奴隷は着々と増えておる。じゃが、人口も増えれば問題もある。リュウガ様は何を考えおるのかのあ」

ジェイの専門分野は奴隷の管理だ。アングレラ帝国では奴隷は国民として認められて、国外に出ることのできない労働力として働かせている。

反乱が起きないように生活の保証もしているし、奴隷の意見も聞き入れるようにしている。

魔法の使えないこの国では人力が基本であり、魔法の力を補うために人の力を

使っている。それがこの国なのだ。

そのために多くの奴隷を必要とする。だが、奴隷が増えれば人口も増える。それによる多くの問題もある。

「その辺りはエンド様に策があるようだ。そちらの報告を待とう」

しかし、その問題はリュウガの側近であり、大賢者の一人であるエンドが引き受けた。どういう解決法があるのかは分からないが、ジェイよりもエンドの方が位は上である。

同じ大賢者であるが、エンドだけが少し発言力を持っている。

「ジェイ様、少し良いですか？」

話し合いの最中にガレットが手を上げた。ジェイはガレットの発言を許す。

「フェスについてです。最近女性の奴隷を集めているという話を聞きますが、良いのですか？」

フェスは賢者であり、奴隷管理には欠かせない魔法を使う人物だ。

特殊な首輪を作り、それで人の自由をコントロールできる。この魔法を使えるものは簡単には身つかない。かなりの人材なのだ。

しかし、フェスには色々と問題があり、今回の会議にも顔を出していないが、それは今回だけではない。

いくつかの会議も理由をつけて参加しないのだ。

それにガレッドが言った通り、女性の奴隷を中心に集めている。

帝国が認めているのは奴隷を帝国の労働力としての活用だ。それを犯罪的な行為

に使うことは許していない。

「そうだな。フェスには見逃せない部分もある。フェスについてはガレッド、お前に任せて良いか？」

ジェイはそう聞くと、ガレッドは胸を張る。

「はい。任せてください。俺が奴の裏を暴いてやりますよ」

そんな感じで会議は進む。

第1話

【進め!! 洞窟探検隊 其の1】

せかへい 外伝 30

著者…pirafudoria

作画…pirafudoria

第1話

【進め!! 洞窟探検隊 其の1】

ある日のことである。突然エスとルンバがパトの家を訪れた。

「おい!! パトいるか!!」

エスが大声で叫ぶ。

「なんだよ……」

パトは寝癖のついた髪を掻きながら自分の部屋から出てくる。玄関を見るとそこにはエスがまだかまだかと待っていた。

「どうしたんだ？」

パトが聞くとエスがポケットの中からある紙を取り出す。

「最近新しい洞窟が見つかったんだって!!」

エスはワクワクしながら言うが、パトはどうでも良さそうに答える。

「それで……?」

「俺たちで探検しようぜ!!」

エスはそう楽しそうに言う。隣では無理やり連れてこられたルンバが呆れた様子
でいる。

パトはあくびをした後、

「何言ってるんだよ。そういうことは冒険者の仕事だろ。俺たちには関係ないだろ」

そう、洞窟やダンジョンの探索は冒険者の仕事である。モンスターに出会っても
対処できるし、宝石などの価値もわかる。

他にも探窟家などもこれらを行う。

昔は村に住んでいる老人のライトも洞窟探索を行っていた。それにより多くの魔石を発掘しており、魔道具の発展を促して歴史を変えている。

だが、洞窟探索には危険がつきものだ。モンスターだけではない。ライトのように魔素により身体が自由が効かなくなってしまう人間も多い。

洞窟のような場所には植物はないが、過去に魔法を使って発掘や探索を行なっているため、魔素が大量に残っている。

そしてその魔素を浄化する植物がないため洞窟には魔素が溜まりやすいのだ。

パト達は冒険者ではない。ただの村人だ。洞窟探索は彼らには危険すぎる。

「おーい！ 絶対楽しいって!! 行こうぜ」

このように遊び感覚で洞窟に行く人間は特に危ないだろう。こういう人間を止めるのもパトの役割だ。

「ダメだ。俺たちには危険すぎる」

パトがそう言った時、後ろから、

「行ってこい」

と、突然言われた。後ろを振り向くとそこにはパトの父親のガオがいた。

「父ちゃん、行ってこいって、洞窟の危険性は知ってるだろ」

ガオは村長になる前は地方を旅していた。冒険者の免許も取ったし、危険な地にも踏み入れたことがある。盗賊だって討伐したことだってあるのだ。

「ああ、分かる。だからこそ、お前は行くべきだ」

「え……」

しかし、そのためかガオは自分のようにパトにも生きてほしいと考えているところがある。

旅をしているいろいろ学ぶ。それがガオのやり方なのだ。それをパトに押し付けることがある。そしてそれほ今もだ。

「そういう場所に行くことで成長できる」

第2話 【進め!! 洞窟探検隊 其の2】

せかへい 外伝 30

著者…pirafudoria

作画…pirafudoria

第2話

【進め!! 洞窟探検隊 其の2】

結局洞窟に行くことになってしまった。そして予想外の人物がついてくることにもなった。

「リーラ、本当に行く気か？」

「はい！」

パト達と共に行きたいと言い出したのは、村に住む少女リーラ・ルーテラだ。金髪の長髪の子供で村にいるお医者さんの子供である。

パト達よりも一回り小さく。ちょっと歳も離れている。リーラには兄がいたが今は行方がわからない。パト達は兄の方が年齢も近い。

普段は家で医者勉強をさせているのだが、たまにこうやって抜け出してくる。そしてちょうどいいタイミングでこの話を聞いてしまったのだ。

パトはリーラを行かせないと説得する。

「洞窟は危険なんだぞ、モンスターも出てくるし、トラップだってあるかも！」

それを聞いたリーラは、

「モンスターは魔力の多いものを襲う傾向があります。パトだけならまだしもエスさんとルンバさんがいれば大丈夫です。あと洞窟にはトラップはありません」

「……………」

リーラは普段は静かな子なのだ。あまり自分から喋るタイプじゃない。だが、パトにはよく喋りかける。

そして知識を自慢することも多い。

しかし、リーラの言っていることは間違っていない。

パトはまともに魔法が使えないくらい魔力がないが、リーラもそこまで多いわけじゃない。エスやルンバがメンバーの中だと一番魔力量が多い。

そしてモンスターは魔力の多い存在を狙いやすい。

だが、それは理論上での話だ。実際には魔力の多い人間は力を持っており、モンスターは簡単には攻撃できない。

そのためモンスターは抵抗されにくい人間から襲うということもある。

だが、リーラにそのことを言っても本ではそう書いてあったと否定されるだけだ。

「でもな、危険なんだよ」

パトがどうにかリーラについてこさせないようにしようとしたが、リーラが涙目になる。

「いや、だから危な……」

そうしているとエスが、

「ま、ついてきても良いんじゃないね」

と適当なことを言い出した。

「おい！」

とパトはエスを止めようとするが、エスは自信満々に、

「俺たちが守ってやるから安心しやがれ！」

と胸を張って言い出した。

エスとルンバは門番として実戦を積んでいる。そのため低レベルのモンスターに

は負けないだろう。

だとしてもこの自信はどこから湧いてくるんだか……。

「俺の新品の槍でしっかり守ってやるぜ」

エスはそう言々と新しい槍を見せびらかす。

つまりは槍を新しく買ったから自信满满ということなのか。いや、そんなことで自信满满になるなよ!!

もっと慎重になれ!!

こうしてリーラも行くことになった。

第3話

【進め!! 洞窟探検隊 其の3】

せかへい 外伝 30

著者… p i r a f u d o r i a

作画… p i r a f u d o r i a

第3話

【進め!! 洞窟探検隊 其の3】

向かうことになった洞窟は村の南西にある山にある洞窟だ。森林により洞窟の入り口が隠れていたため発見されていなかったらしい。

「あれ、みんなどうしたの？」

洞窟に行く準備をするためいろいろ村でアイテムを買っていたら、緑髪の少女に出会った。

彼女の名前はカナー。村にある銭湯を提携する夫婦の娘である。歳はパト達に近くよく遊んでいる。

「これから洞窟に行こうって話になってな」

「洞窟？ あなた達だけで？」

「そう、なんだよ……」

パトはカナーに事情を説明する。そしてリーラを引き留めて面倒を見てくれないか頼むが……。

「面白そうね!! 私も言っている?」

「いや、なんでそうなるんだよ!!」

パトはカナーを断ろうとするが、カナーも頑固について行こうとする。

カナーが行くという話をしていると、リーラにもその会話が聞こえたのか寄ってきた。

「カナーお姉ちゃんも来てくれるの?」

「ええ、こんな面白そうなの、ついて行かない方が損よ!」

絶対おかしい。普通なら洞窟なんて怖くて危険な場所だ。そんな場所に行きたがる村人がいるこの村にちょっと恐怖を覚える。

そんなカナーは悲しそうなトーンで言う。

「でも、行きたいのにパトがね。行っちゃダメって言うんだよ」

「えー、かわいそー」

リーラはそんなことを言いながらパトを見つめる。

なんとなく作戦は分かった。そしてそれにリーラも便乗している。

正直リーラは村の中だとエリスに次ぐ天才児だ。まだ十歳程度なのに医者としての知識をほぼ全て持っている。

王国に行って医者や薬屋、なんでもできてしまうほど、頭が良い。

パトが困っていると、そこにエスがやってきた。エスはどこかでリングを貰ってきたのか。それを片手に持っていた。

そしてさっきまでの話を聞いていたみたいで、

「おう、ついて来たいんならついて来な」

とか言い出した。それに対してパトは

「おい、何言ってるんだよ……」

と止めようとするが、

「俺の槍の新技、洞窟で見せてやるぜ」

と言うとリンゴを投げてそれを槍で貫いた。

新しい技を考えたからそれを自慢したいらしい。そのために洞窟に行くのか？
いや、馬鹿なのか。うん、馬鹿なのだ。

エスは貫いたリンゴを抜き取ると、それを割ってリーラ達に渡そうとするが、二人は首を振って嫌がった。

仕方がないのでエスは自分でリンゴを食べる。

「ま、今回はあいつもいるし、大丈夫だろ……」

とエスはリンゴを食べながらパトに伝えた。

第4話 【進め!! 洞窟探検隊 其の4】

せかへい 外伝 30

著者…pirafudoria
作画…pirafudoria

第4話

【進め!! 洞窟探検隊 其の4】

洞窟に行く前に行きたい場所がある。そう言われてパトはエスについて行く。
他のみんなはどこに向かうのか分かっている様子で、足取りが軽い。

「おい、どこに行くんだよ」

「強力な助っ人を呼びに行くんだ」

そして辿り着いたのはパトの家だ。

「おい……まさか……」

その時、家の扉が開かれる。

そしてそこから出て来たのは、ヤマブキとエリスだ。しかも二人とも私服じゃなくて探検用の服装をしている。

「……………お前ら、何やってるの？」

パトが聞くとエリスが、

「私が行けば十分って言うてるのに、こいつが付いてこようとするのよ」

「コレハ私ノ仕事デス。行カナイワケニハイキマセン」

そう言ってヤマブキとエリスが取っ付き合っている。まあ、ヤマブキは何もしていなくてエリスがヤマブキの頬を引っ張っている感じだが……。

それを見たエス達は少しばかりと止まっていたが、エスが、

「よし、これでメンバーは集まったな！」

と言った。エス達がいるのに気づいたエリスは素早く姿勢を正す。

「ええ、私が手伝ってあげる！」

「もういろいろと遅いぞ」

パトがそうツツコんだ。

こうして洞窟に向かうことになった一向。メンバーはパト、ヤマブキ、エリス、エス、ルンバ、カナー、リーラの七人だ。

確かにヤマブキやエリスが居れば洞窟探索の危険に対する対策はできる。

だが、本当に村人が洞窟探索なんかをして大丈夫なのだろうか。

しかし、悩んでいる時間はなくパト達は洞窟に着いた。

山の壁面に面した洞窟で、そのまま入ることができる。

洞窟の入り口は人が一人入れる程度の大きさだったが、中に入ると予想以上に広い空間だった。

「暗!! 明かりだ!! 明かり!!」

エスはそう言うのとルンバにランプをつけるように指示する。ルンバは持って来ていたランプに魔法陣を展開すると魔法で火をつけた。

「なかなか広いのよ」

あたりを見渡しながらエリスが言う。それに対してカナーが、

「これはなんかお宝があったりするかしら」

そう言った。

そんな中、パトは少し怯えていた。それを見たヤマブキが、

「ドウシタマシタカ？」

と聞いて来た。ヤマブキの言葉を聞いてリーラもパトの方を見る。

「パト？　どうしたの？　もしかして怖いのか？」

怖いだと……そ、そんなことあるわけじゃないじゃないか。ちょっと洞窟の壁の様
が顔に見えたからってビビってるわけじゃない。

そんなパトを見たルンバは、

「あ、お化け」

とパトの肩を叩く。

「ぎゃー！ー！ー！ー！ー！！！！！」

パトは飛び上がった。

第 5 話

【進め!! 洞窟探検隊 其の 5】

せかへい 外伝 30

著者… p i r a f u d o r i a
作画… p i r a f u d o r i a

第 5 話

【進め!! 洞窟探検隊 其の 5】

「脅かすなよ……」

パトは驚かして来たルンバに寄っかかる。

「悪い悪い、お前そういうの苦手だしな」

ルンバはそう言いながら笑っている。反省している感じはない。

「じゃあ、早速進むか！」

エスはそう言うのと先頭になって洞窟を歩き出した。

その後ろをカナーとルンバ。そしてエリスの後ろで怯えているパト。最後尾にはヤマブキの手を握ってリーラが進む。

しばらく進むと、洞窟の奥から風は吹いて来た。そしてそれと同時に不思議な鳴き声が聞こえる。

「なに、この声？」

カナーは不思議そうに先を見るが先は真っ暗で何も見えない。前に出ようとするカナーをエスが腕を横に出して止める。

「待て、モンスターかもしれない。下手に前に出るな」

エスは槍を握る。そしてルンバにも前に来るように指示した。
ルンバも仕方なく槍を構えるとエスの隣で構える。

「大丈夫なの？」

リーラは心配そうにパトに聞く。それに対してパトはキツパリと答えた。

「あの二人なら大丈夫だ」

エスとルンバはパトの認める村の門番だ。二人で協力すれば、どんな相手が来て

も大丈夫。

それを聞いたリーラは心配しながらも焦ることはなく二人を見守る。

洞窟の奥から何かが歩いてくる足音が聞こえる。何かが来ている。パト達に足音が近づいている。

二人は槍をしっかりと握り、奥へと向ける。カナーは心配そうに見つめており、エリスはいつでも魔法を出せるように杖を手にする。

パトも槍を握りしめて二人の後ろで何かあった時のために準備をしておく。リーラはヤマブキの後ろに隠れ、ヤマブキもリーラを守るような体制だ。

徐々に近づいてくる。そして奥に一つの明かりが現れた。それは少しずつパト達の元へと揺れながら寄ってくる。

まるで火の玉のようなその物体を警戒する。小さかったその光は少しずつ大きくなっていく。

「ルンバ……」

「ああ、エス。合図をしたら同時にだな」

エスとルンバは攻撃のタイミングを確かめ合う。

火の玉のモンスター。そんなモンスターは見たことがない。モンスターは基本的に動物を元になっている。そのため大体はその面影が残るのだ。

そうになると、新種のモンスターか。それとも……。

「……………」

そんなことを考えていたパトは少し怖くなる。

そして近づいて来たその光に向かって、エスとルンバが攻撃しようとした時、

聞き覚えのある声が聞こえた。

「なんじゃ、なぜお前達がここにいるんじゃ？」

「ライトさん!？」

第 6 話

【進め!! 洞窟探検隊 其の 6】

せかへい 外伝 30

著者… pirafudoria

作画… pirafudoria

第 6 話

【進め!! 洞窟探検隊 其の 6】

洞窟で出会ったのはサージュ村に住んでいる老人ライト・マヤギだった。

「なんでライトさんがここに？」

パトが聞くとライトは灯りのランプで皆を照らしながら、

「それはこっちのセリフじゃよ。お前達もなんでここにいるんじや」

と聞き返して来た。それに対してエスが答える。

「新しい洞窟が発見されたって聞いて、探検に来たんです」

それから事情を話す。そしてライトがなぜここにいるのかも聞く。

ライトも新しい洞窟が発見されたという情報を聞き、近場でもあったため久しぶりに探索に来ていたようだ。

昔は探窟家として有名だった人物だ。新種の洞窟が近場で発見されたと聞いて、居ても立っても居られなくなってしまったのだろう。

そんなライトはすでに洞窟の奥を探索して来たみたいで、ここからはライトに案内してもらったことになった。

「まさかライトさんに案内してもらえるなんて……」

リーラは嬉しそうに言った。ライトは王国でも本を出版するほどの有名人だ。村人からは一目置かれている。

ライトは杖をつきながら戦闘を歩いていく。途中でライトは足元に気をつけるように言うとうと、

「こ、これは!？」

そこにはコウモリ型のモンスターが倒れていた。まだ消滅はしていないが、すで

に再起不能状態で時期に消滅するだろう。

「これ、もしかしてライトさんがやったんですか？」

パトが恐る恐る聞いてみると、ライトは笑いながら答える。

「いやあ、歳を取るとこんなモンスターにも苦戦してしまう。歳はとりたくないものじゃ」

それを聞いた一行は驚く。このモンスターはかなり巨大で強そうだ。それを一人で倒してしまったと？

それでも衰えていると言われても全然納得できない。

しばらく進んだ後、洞窟の先に光が見えて来た。そこには氷柱のように天井に張り付いた光る石がたくさんあった。

そしてそれは赤色や青色、様々な色に光っている。

「これは魔石……?」

それを見た一同は唾を飲んだ。洞窟の中にこんな綺麗な空間があり、そしてこれが全て魔石だなんて……。

ライトはその石の一つに触ると、

「この程度でびっくりしてたら勿体無いぞ」

と言って笑った。

「わしは長年洞窟を探索して来たが、ここより綺麗な魔石はいっぱいあった。お前達ももっと大きくなったらそういうところに行ってみると良い。そうすると新たな

発見がある」

こうして洞窟探検は終わったのであった。

第1話 【ヤマブキクッキング 其の1】

せかへい 外伝 31

著者… p i r a f u d o r i a
作画… p i r a f u d o r i a

第1話

【ヤマブキクッキング 其の1】

ある日のことである。パトの家のキッチンである事件が起きたのは……。

それはパトとガオの帰りの遅くなった日のことであつた。家にはヤマブキしかお

らず。二人の帰宅を待っていた。

しかし！このまま待っていても何もない。それに仕事を終えて帰ってくる二人だ。疲れ切っているはずだ。

だが、そうになると夜ご飯はどうなるだろうか。高確率で手抜きになる。それだけは避けなければならない。

「私が作りマスカ」

そしてあることを考えた。それは自分で作ってしまえば、食べたいものも食えるし、しっかりとした料理を食べられるということだ。

ヤマブキは早速料理を始めることにした。

まずは家にある食材を確認する。あるのは葉草と卵、後はよくわからない粉だ。

流石にこれじゃ何も作ることができない。

だが、パトの家には料理を保存できる道具がない。だから、こういうものしかない。こうなったら買いに行く。

ヤマブキは食材を買いに行った。そして数分後、ヤマブキは帰宅した。いろんな食材を購入してきた。これなら問題なく作ることができる。

ヤマブキは早速調理を始めた。

そして完成した頃、パトとガオが帰宅してきた。二人はヤマブキが料理してくれていたことを知ると感謝する。

「ありがとうございます!! ヤマブキさん!!」

しかし、完成された料理を運んだ瞬間、二人の表情は変わった。

「……………」

それは紫色のカレーである。そして紫色になったサラダも一緒だ。

どうしてこうなったのかはわからない。だが、気づいたらこうなっていた。

匂いからしてやばそうだ。

しかし、パトがこんなことを言う。

「まあ、実は美味しいかもしれないから」

そう言った後、三人同時にカレーを口にしてみた。次の瞬間、口の中で爆発するような感覚を味合う。一体何が起きたのか、とにかくこれは食べ物といえるものではなかった。

こうしてヤマブキの料理は終わった。しかし、このカレーは結局誰も完食することはできなかった。

このカレーを完食できる猛者は現れるのだろうか。

――――――――――

今回はヤマブキが料理が下手というのをテーマにした話です。

まあ、これは下手という次元じゃないですね。

ヤマブキは食べるのは好きなんですけど、作るのは苦手みたいです。まあ、やつ

でもトーストを焼くくらいしかできないです。

見た目もあぁなってますが、味付けが基本的に苦手な感じです。ヤマブキは甘いものを食べ過ぎです。だからなんです!!

第1話 『寝れない天才を寝かしつけろ』

世界最強の兵器はここに!? 寝れない天才

著者：ピラフドリア

第1話

『寝れない天才を寝かしつけろ』

俺は一日の疲れを癒すため、リビングで布団に入り、目を瞑った。

今日も多くのことがあった。村長である父の手伝いで村を駆け回り、もうヘトヘトである。だが、それも尊敬する父の様な村長になるためだと考えれば、俺は頑張ることができる。

瞼の裏の景色もやがて視界から消えていき、俺は眠りに……………。

「パト!!」

扉が開き、俺の名前を叫ぶ声。

眠りを妨げたのは……。エリス・グランツ。幼馴染であり、現在俺の部屋を強奪している天才魔法使いである。

エリスは腕を組み、俺のことを見下ろすと、小さな声で呟いた。

「寝れない」



満月が夜空の頂点へと立つ時刻。俺はエリスと作戦会議を行っていた。

その目的は……。

「これより、どうやったら眠ることができるのか。それを考えます」

エリスを眠らせることである。

「おい、エリス。一つ言っていていいか……」

俺はエリスに向かって、ずっと言いたかった文句を言うことにした。

「いつも起きる遅いから、夜寝れないんだろ？」

「……………」

「……………」

エリスは俺に杖を突きつける。

「関係ないことは発言しない!!」

「関係あると思いますけど!!」

俺のツツコミにエリスはそっぽを向く。反省しているのかどうなのか……。

しかし、眠る方法か……。

俺は腕を組み、思考を働かせる。すると、一つ良い案を思い付く。

「そうだ！ エリス!! 運動してみるのはどうだ？」

「運動？」

「そう、いつも寝っ転がってばかりだろ。だから、少しでも体を動かせば、眠たくなるかも」

それを聞いたエリスは「なるほど」と手を打つ。そして、

「じゃあ、早速運動しますか！」

エリスはパジャマから、いつも着ている制服に着替えると、俺を連れて家を出た。

……え、なんで連れてかれるの？



深夜の森に暗雲が立ち込め、轟音と共に閃光が森へと放たれる。

森は紅花が咲き誇るが如く燃え上がり、世界の終焉を表す絵画のような、地獄と化していた。

「よし、じゃあ、帰りましょ」

森を破壊した魔法使いは鎮火を終えると、悠然と村へと帰っていく。

まあ、魔力の源は生命力。魔力を使えば疲れるのは確かだが……。そういう運動

か。

村に着くと、先程の魔法により村では騒ぎが起きていた。それもそのはず、事前情報もなくあんな強力な魔法を放ったのだから……。俺もあそこまで強力な魔法を撃つとは思ってもみなかった。

俺はエリスを先に帰らせ、村の皆んなに事情を説明し謝りに行く。一通り騒ぎも収まり、明日の後始末を想像し、ため息を吐くと、エリスが目の前に居た。

「あれ？ 帰って寝たんじゃ？」

「うるさくて寝れない」

お前が騒ぎを起こしたんだろうが!!



家に帰宅した俺たちは他の方法を模索していた。

「うーん、寝る方法かー」

思考を回していると、外に出たことで少し身体が冷えたのか。エリスが体を震わせながらぼつりと独り言を呟く。

「お風呂……入りたいな」

「ふろ?………はっ!!」

その独り言を聞き、俺は閃く。

「そうだよ。風呂はどうだ？ 体を温めれば眠たくなるかも!!」

それを聞いたエリスの顔を明るくなる。

「そうね！ それは良い案ね！」

早速俺たちは村の浴場へ向かう。しかし、

「閉まってるね」

「そうね。閉まってるわね」

浴場は営業時間外でやっていなかった。



部屋に戻った俺たちは、また別の手を考えることにした。

「他に良い方法はないの？」

「うーん、他の方法か……」

何かヒントはないかと、自身の机に目をやった俺は、ある物を見つけた。
そしてちょっとした思い出話を思い出す。

「なあ、エリス。これは父ちゃんから聞いた話なんだが。俺は小さい頃怖がりで夜

になるとすぐに泣いちゃってたらしいんだ」

「今と変わらないのね」

「泣かないよ！ 怖いのは苦手だけど!!」

エリスの言葉に思わずツツコンでしまったが、話を戻す。

「そんな俺の寝かしつけ方は読み聞かせだったらしいんだ。……母ちゃんがどんな人だったかは覚えてない。だけど、母ちゃんが読んでくれた本の内容は、なんだか覚えてるんだ」

俺は布団に腰を置く。その様子を見てエリスは察したのか、布団の中で目を瞑った。

なんてことない昔話。王都に行けば手に入る子供向けの童話。そんな話が眠り誘ってくれる。

気が付けば二人は、眠りの世界に入っていた。

【後書き】

漫画版とゆっくり版も作りました。

小説版は二人ともねれてハッピーエンドな感じ。それと今まで触れてこなかったお母さんの存在も少し出してみた。

どのバージョンにも良さがあると思うので、全部見てもらえると嬉しいです。内容と違います。

第1話 【大脱出 其の1】

せかへい 外伝

著者… p i r a f u d o r i a
作画… p i r a f u d o r i a

第1話

【大脱出 其の1】

サージュ村。小さな田舎だが、人々は支え合い生活をしている穏やかな村。
そんな村で息を切らせて、物陰に隠れている男がいた。

「おい、パト……何やってるんだ」

門番の仕事を終えたエスは、物陰に隠れているパトの姿を発見した。汗を流し、息が荒い。何かあったのだろうか。

「エス………か………」

パトは自分の家の方向を一瞬見るがスガに目を逸らす。

「お前の家に誰かいるのか？」

「いや、……まあ、………」

なんだか、ソワソワして何かを隠している感じのパト。
エスはチラリとパトの家の方を見る。

すると、彼の部屋の窓からピンク色の帽子が見えた。あの特徴的な服装は……。

事態を察したエスはパトの方を向くと、

「……あれか、村長さんに怒られたのか」

とパトに話しかける。パトの部屋にいるのは村長ではないことは分かっている。しかし、部屋にいる人物については知らないことにした方が、パト達のためだろう。

「そ、そうなんだよ！ それで逃げてきたんだ……」

パトはそう言いながら家の方を見る。すると、パトの部屋にいた人物が動いた。

それを見たパトは焦り出す。

「……ま、まずい!!」

焦るパトを見て、エスはため息を吐くと、

「……俺も仕事終わったし、森にでも逃げるか？」

パトとエスは二人で村から出て森に行くことになった。しばらく時間を潰してから家に戻る。

「俺たちだけで村を出て大丈夫か？」

「もう俺たちは大人だぜ。昔みたいにモンスターは討伐できる。それに俺は門番だしな」

自信満々なエスは戦闘を歩く。しばらく進んでいると、エスは足を止めた。

「パト……止まれ」

「何がいるのか？」

「ああ、そこの木の影……」

エスは目線でパトに知らせる。

パトとエスは槍を取り出す。そして木の影の方を警戒する。

木の影に隠れている何かは、ゆっくりと姿を現した。

それは羽の生えたカエル。だが、普通のサイズのカエルではない。人間の腰くらいあるサイズのカエルだ。

「……こいつはデーモントード」

「どんなモンスターなんだ？」

パトが聞くとエスが答える。

「こいつはカエルを媒体としたモンスターで、家畜や子供を長い舌で丸呑みにする。さらには体液には毒性があり、皮膚に触れるだけで毒の体液が飛び散る」

「なんでそんな強いモンスターがここに……！」

「オルガさんの影響だろう。……パト、やれるか？」

エスはパトの顔を見る。

「ああ、いくぞ！」

せかへい 外伝ストーリー

著者 ピラフドリア

発行日 2022 年 5 月 12 日

ハーメルン -SS・小説投稿サイト-

<https://syosetu.org/novel/270652/>

本書の内容を無許可で転載・複写・複製することは、禁じられております。
